ユヤ　ユユ　ユヨ

ヨヤ　ヨユ　ヨヨ

■注意「ヤ」は第一段縮字にして「ユ」は第三段縮字であります、又「ヨ」は第五段の縮字を應用するので御座います。

縮字應用例

彌生　稍々　由々敷

也行は我國語中に於て少なき言葉で御座いますから從つて縮字應用の場合も僅少であります故に之れが變化もあまり著くありませぬ、されば應用例の如くにせば宜しいのであります。而して「ユ」の次に「ヨ」縮字を連ぬる時は之れ亦縮字の頭に角を附して連綴するのであります。

例題

躍約　揶揄　湯屋　動もすれば

八　良行應用例

ララ　ラリ　ラル　ラレ　ラロ

リラ　リリ　リル　リレ　リロ

ルラ　ルリ　ルル　ルレ　ルロ

レラ　レリ　レル　レレ　レロ

ロラ　ロリ　ロル　ロレ　ロロ

■注意　上に掲げたるは應用の一班を示したのでありますから用例を示さざるものは各自に於て適宜應用すれば宜しいのであります、唯だ「ラル」「ロル」は用例に示せる以外即ち變体「ウ」を楕圓にしたる縮字を用ゐる時は基礎文字の「レ」と同一文字となりますから「ラ」及「ロ」に應用すべき第三段縮字は必らず縦の縮字を活用する事に

注意せねばならぬ、第五段の縮字は上下何れに附しても差閊がありませぬ、「ルル」のみは後章の略綴の方法に據つた方が利益であります。

縮字應用例

露暦　せらるれども　赤裸々

履歴　來れり

■注意　縮字は「せらるれども」のみならず總て二個重ねて綴る時は後に附せらるゝものは必らず其首端に角を附する事を怠つてはなりませぬ、若し角を附せずして連綴する時は何れが先に縮綴せられたるものなるか往々にして識別し難い場合に遭遇するものであるから苟めにも角を附する事を忘れてはなりませぬ。

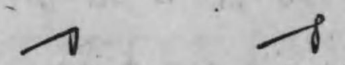
第七　拗音と縮字

拗音文字に對する縮字應用の方法は既に各段縮字法の節に於て述べたる如く「キャ シャ チャ ニャ ヒャ ミャ リャ」は第一段縮字、「キュ シュ チュ ニュ ヒュ ミュ リュ」は第三段縮字、「キョ ショ チョ ニョ ヒョ ミョ リョ」は第五段縮字を應用すべきものでありますが中には應用の必要を認めざるもの及清音文字中の同一子音(發聲)を有する行と共通併用すべきもの將又二三變則の應用がありますから以下各行に付き説明致します。

一　加行拗音と縮字

加行拗音は五十音圖中の加行と同一發聲を有するものでありますから兩行混用しても決して差閊はありませぬ、然れども加行の拗音と清音とは兩者文字の方向を異にせるが故に全体に亘つて應用するの要は素よりありませぬ、されば「キャ」に第三段縮字を連らねて「キャク」(客となし「キョ」に同一段縮字を應用して「キョキュ」及び「キョク」と致します、即ち次の如くである。

キャク　　キョク
キョ キュ



■注意　「キャク」は「キャ キュ」とも讀み得るのでありますが我國語に於ては「キャ キュ」と發音せらるる言葉は絶無と言つても宜しい位でありますから、決して兩者間に紛乱の虞れは斷じてありませぬ、又「キョ キュ」は「キョク」とも讀み得るのであるが「キョク」の方は基礎文字を以て書くも縮字するもさしたる差異はありませぬけれども「キョキュ」の方は縮字の應用を至便と致します、而して兩者併用するも各其用所を全然異にするが故に誤謬を來すの虞れはありませぬ。

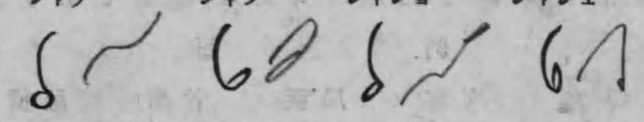
二　佐行拗音と縮字

佐行拗音も亦同一發聲である所の佐行直音字と縮字法を混用しても差支へはありませぬ、然れども唯だ混用とのみ言ふ時は少しく語弊が御座いますが、茲に混用と言ふのは同一發聲を有する直音文字は拗音字に對して混用しても宜しいといふ意味であつて、拗音字は何れの時

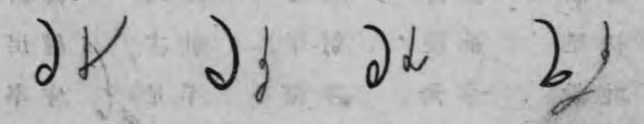
に於ても直音字に對しては縮字を應用する事が出來ないのでありますから誤解のない樣にしなければなりませぬ、偖て佐行拗音字に對して佐行直音の縮字を應用し得るとするも全般に亘つて用ゐる時は紛乱錯雜を釀すの嫌ひがありますから豫め下の如く局限致します。

應　用　例

シャサ　シャソ　シャショ　シャシュ



シュサ　シュセ　シュシュ　シュソ



ショサ　ショシ　ショセ　ショソ

■注意　「シャサ」「シュサ」「ショサ」に於ける「サ」及「ショシ」の「シ」は普通の方法でありますけれども、「シャソ」「シュショ」に於ける「ソ」及「ショ」は兩者共第五段縮字を應用さるゝ譯でありまして之れを區別し置くを必要と致しますが故に用例の如く「ソ」を右方に連ね「ショ」を左方に縮綴する事に定めたの

であります、「シャシュ」「シュシュ」に於ける「シュ」は第三段縮字を、「シュセ」「ショセ」の「セ」は第四段縮字を「シュソ」「ショソ」の「ソ」は第五段縮字を應用したのでありまして他は悉く基礎文字を以て連綴するのを便と致します、而して拗音字に應用されたる縮字は總て直音に於けるものゝ如く變化がありませぬから、寧ろ從來の文字に於ける漢字の如く象形に依つて記憶するのが得策であります。

例題

歸客（キカク）	客席	局面	首席	社債
主催	書齋	處士	書式	書籍
初足	社稷	射手	社主	射出
社說	車側	手跡	手足	守卒

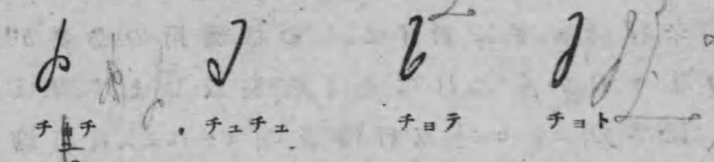
首席、守卒、手跡の如き場合には基礎文字を以て書いた方が便利であります。

三　多行拗音と縮字

多行拗音に對しては同一發聲である所の多行各音の縮字を混用しても宜しいのでありますが、之れも矢張全体に亘つて應用する時は混乱を來すの憂ひがありますから、佐行と同樣豫め應用の範圍を制限して「チャ」「チュ」の二音のみ字に

活用する事と致しました。

チョチ　チュテ　チュト　チュチョ



チュチ　チュチュ　チョテ　チョト

■注意　「チュチ」は「チュ」の尾端右側に第二段縮字（チ）を附し、同じく「チュ」に第三段縮字（チュ）の縱に橢圓なるものを結付けて「チュチュ」と爲すのであります又「チョ」の右側に小圈を附して「チョチ」、同じく「チョ」に第四段縮字を附して「チョテ」、同じく「チョ」の右上方に第五段縮字を綴りて「チョト」となすのでありますが「チュト」「チュチョ」は「チュ」に第五段縮字を二重に應用するのでありますから之れ亦佐行拗音字に於ける「シャショ」「ショソ」の場合の如く一定した方が便利でありますが故に上掲の如く「ト」の縮字を上方に附して「チュト」、「チョ」の縮字を左側に「チョ」の尾端を引返して「チュチョ」としたのであります、即ち「チュチョ」に於ける「チョ」の縮字は「チュ」の尾端を直ちに上方に廻して橢圓環にしたものであります。

例題

中途　躊躇　忠直　忡々

四　波、末、良各拗音と縮字

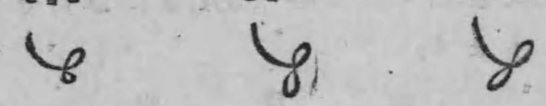
奈行拗音字に對するものは應用の必要がありませぬから之れは全く省略致します、尙ほ波行拗音の「ヒャ ヒュ」、末行拗音の「ミャ ミュ」、良行拗音の「リャ」も亦全然省きまして之れ等各音字に連綴さるべき同一發聲音字は總て基礎文字を以て普通に綴る事と致しました。

□「ヒョ」に應用するもの「ヒョ」の次に「ヒ ヘ ホ」の各縮字即ち第二、第三、第五の各段縮字を綴れば「ヒョヒ」「ヒョヘ」「ヒョホ」となるのは縮字法通例の活用法であります、換言すれば「ヒョヒ」「ヒョホ」は普通に縮字致しまして、「ヒョヘ」は清音波行に於ける「ヒヘ」「フヘ」の場合と齊しく第四段縮字の代りに第三段縮字を充用したものであります是れ畢竟するに「ヒョ」に對して母韻字「エ」を楕圓環にしたものを附するよりは寧ろ基礎文字の「ヘ」を綴つた方が數等優つて居りますのみならず、縮綴の不便も亦忍び難いものがあります、されば第四段縮字の應用を止めて下の如く除外例を設け第三段の縮字を代用して「ヘ」となし運筆上並に字形上に於て基礎文字の「ヘ」よりも優秀ならしめた次

第であります。

應　用　例

ヒョヒ　ヒョヘ　ヒョホ



■注意　唯だ「ヒョヒ」「ヒョヘ」「ヒョホ」としたのみでは何等用をなさぬ樣でありますが、是等各縮字は聽て表皮、豹變、標榜、標本等に活用さるゝのであるから學習を等閑にしてはなりませぬ。

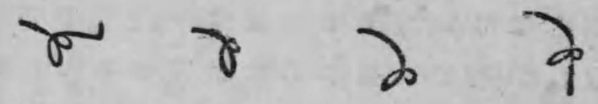
□「ミョ」に應用するもの「ミョ」に對しては殆んど縮字法應用の必要はありませぬが「マ」を除きたる「ミ ム メ モ」の四音字のみは縮綴するも左程の利害はありませぬから此音字のみを應用する事と致したのであります、されど綴合すべき後字の如何に依つて便、不便がありますから巧みに應用せないと却つて弊害を伴ひます。

□「リュ」「リョ」に應用するもの兩者亦良行清音各字を縮綴應用すれば宜しいのでありますが「ミョ」と同樣便、不便がありますから能く其好惡の如何を考へて應用せねばならぬ。而して又變則の應用として清音字「ロ」の尾端下方に第五段縮字を連ねて「ロリョ」と致します、言を換へて言ふな

らば「リョ」の斜曲線の部分丈を長くしたるもの即ち「ロ」と同一斜曲線にしたものでありまして「ロリョ」は轉て「ローリョク」(勞力)等に應用せらるるのであります。

應用例

流落　流離　閭里　兩立



■注意　「流落」「流離」の「リュ」は兩者共正變兩体何れを使用して縮字を應用しても差支はありませぬ、「兩立」の「リャウ」は暫く「リョ」を用ゐて「リ」の縮字を應用し、「ッ」を連綴して練習すれば宜しいのであります。

第九章　別樣の縮字法

第一　變格の縮字法

以上述べ來れる所のものは總て子音省略の法則に依つて各字發聲を同うする時其後に連綴せらるゝものゝ發聲を省きて母音字のみを接續し之れを圓環若しくは橢圓となして前字と同一發聲を有する各音字を代表せしめたものでありますが、尙ほ此外に加行第三段に屬する「ク」の縮字を「サタナハマヤラシャ チャ ニャ ミャ ヒャ ~~ニャ~~ リャ」の各音字に接續して「サク」「タク」「ナク」「ハク」「マク」「ヤク」「ラク」等と讀ましむる方法があります、這は前述の縮字が總て發聲を異にするに隨つて縮綴せられたる母韻字の讀方を異にせるに反し、發聲字を異にするも後に縮綴さるゝ加行第三段「ク」の縮字のみは自己の聲音を失はざるものなるが故に前者を正格と稱するに對して變格と呼ぶのでありまして此縮字法に左の十九種が御座います。

直音應用例

サク　タク　ナク　ハク

ソク　トク　ノク　ホク

マク　ヤク　ラク

モク　ヨク　ロク

■注意　「サク」「ソク」はサ及びソの正体に、「タク」「トク」はタ及びトの變体に各々第三段縮字を應用したものでありまして、變体の「サ」「ソ」及正体の「タ」「ト」を用ゐて「サク」「ソク」及「タク」「トク」と書く時は基礎文字を以て綴るのであります、之れ要するに變体の「サ」及「ソ」又は正体の「タ」及「ト」に「ク」を接續するのは便利であるけれども正体の「サ」又は「ソ」及變体の「タ」又は「ト」に「ク」を連綴するのは不便であるが故に用例の如き活用を爲さしめたのであります、而して「ソトノホモヨロ」は「サタナハマヤラ」の各倍長大のものでありますから「サク」に於ける斜曲線の部分丈を長くすれば「ソク」となるが如く「タク」「ナク」「ハク」「ヌク」「ヤク」「ラク」等皆其單線

の部分丈を長くすれば「トク」「ノク」「ホク」「モク」「ヨク」「ロク」となるのであります、尙ほ該變格の縮字は正格に於ける各音字の第三段縮字と混同するの虞れあるが如く思惟せらるゝでありませうが、各々其用所を全然異にするが故に斯かる懸念は杞憂に過ぎませぬ。

例題

櫻(サクラ)	即死	足跡	側目	速力			
巧み	卓落	智德	特發	特筆			
特色	督促	伯樂	白露	北陸			
北斗	枕(マクラ)	目視	費目	約束			
役目	八雲	抑留	慾得	抑遏			

■注意　「即死」「足跡」等の如く同行文字の中間に變格縮字の存する場合と雖も運筆上正格縮字の應用を便とする時は變格縮字を隔つる前字に隨伴して應用する事が出來ます、假へば變格縮字を應用したる「ソク」の次に小圈を結合すれば即ち佐行に對する第二段の縮字「シ」を縮綴した譯になるのでありますから「即死」となり。又「足跡」は同じ「ソク」の次に第四段の縮字を附して更らに基礎文字の「キ」を連綴するが如きものであります、而して縮字法は正格なると變格なると

將又後節述ぶる所の別格なるとに論無く總て基礎文字の連綴し惡きものに對し、該文字と混乱錯誤せざる範圍内に於て可及的運筆を輕快迅速ならしめんが爲めに制定したる所以のものは前節既に述べたる通りでありまして、苦痛を忍んで迄も悉く應用するの必要はありませぬ、要は唯だ基礎文字に於て連綴し難き場合にのみ應用するものと心得て居れば宜しいのであります、例題に付て言ふならば「智德」は「チ」に「ト」を縮綴して「ク」を書くも「チ」の次に變格縮字の「トク」を應用するも大なる利害はありませぬ、然れども約束及慾得の如きにありては約束は變格縮字の「ャク」に基礎文字變体の「ソ」を連ねて「ク」を綴り、又「慾得」は「ョク」を變格縮字に依りて綴りたる上正体の「ト」を用ゐて「ク」を接續したる方が遙かに優秀であります。又「即死せり」の如く縮字が三つ重なる時は「ソ」に「ク シ」を縮字したる後ち變体の「セ」を用ゐて「せ り」と綴るか、若しくは變体の「ソ」を用ゐて「ソ ク」と書きたるのち正体の「シ」を連ね、「セ」を縮綴したる後「リ」を綴合しなければなりませぬ、而して兩者の優劣を比較すれば後者の方が幾分優れて居るかの感があります。

拗音應用例

シャク　チャク　ヒャク

ミャク　リャク

脈絡　百尺　歸着　略歷

■注意　「シャク」はシャに正体ウ字形の縮字即ち縦の第三段縮を右側に結合して應用しても宜しいのである、而して此場合正格縮字の「シャシュ」と混讀するの憂ひは全くありませぬ。

例題

策略　落着　伯爵　百日　氣脈

杓子　六尺　脈絡　着手　附着

■注意　策略と綴るに「サ」を規則正しく四十五度の角度に書く時は頗る連綴し惡いものでありますから斯くの如く他の文字と紛はしくないものに對しては臨機應變の措置を採り正体「サ」の上方筆端を少しく下方に下げて六十七度

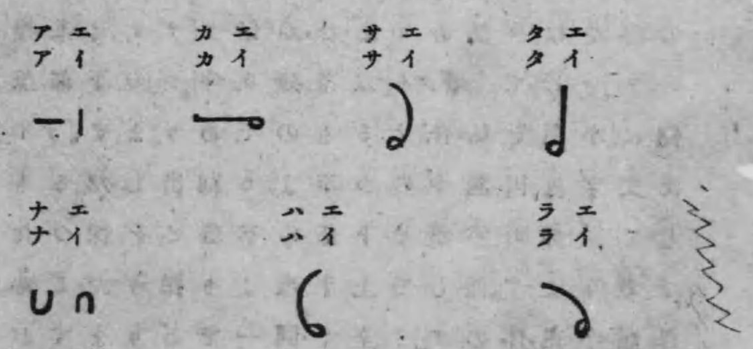
半の鈍角となし變格の縮字を應用して「ラク」と連ねても宜しいのであります。尙ほ用例中に「ニャク」を除いてありますが這は其用語極めて少ないから「蓮蒟」等の場合には矢張「ニャ」に「ク」の變格縮字を使つても差支へはありませぬけれども「ニャク」と發音せらるゝものは寥々たるものでありますのみならず基礎文字を以て綴るも些したる相異はありませぬ。

尙ほ變体の「タ」及「ト」に變体の「ウ」を楕圓形にしたる第三段縮字を應用して「タク」及「トク」と爲す事が出來る要は唯だ後字の方向如何に依つて使分くれば宜い、假へば德川の如き場合には變体「ウ」字を楕圓にしたる第三段縮字の活用を最良の方法と致します。又「チャ」に對し變体「ウ」字楕圓形の第三段縮字を應用し得るは「トク」「タク」の場合と同一でありますが六十七度五分の斜直線に變体「ウ」字形の楕圓を附するも必らずしも不可能にあらざれども斯くする時は縮字の眞髓を沒するの忌ふあるが故に第四段の縮字を借りて上方に活用するのである。而して「チャテ」と書く時は縮字を應用せず基礎文字正体の「テ」を以て綴るを良法と致します。

第二　別格の縮字法

前述の縮字法は發聲の異なるに依つて縮綴されたる文字の音を異にし又は發聲音字を異にするも縮綴したる音字は同一でありまして兩者共一定の格式に從つて應用したるものであるけれとも本節に於て述べんと欲するものは發聲を異にするに從つて其字形も亦異り其間に一定の格式が存しませぬから之れを前者に對して別格の縮字法といふのであります、而して別格の縮字は單劃文字の次に母韻字「イ」又は「エ」の連綴さるゝものにして最も多く活用せられ、其綴り惡きものに限りて特定したる文字であります。

別格文字

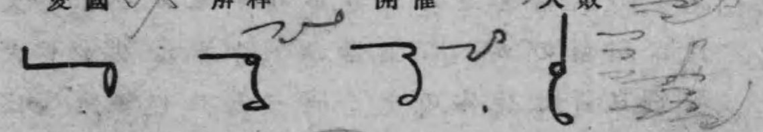


■注意　「アイ」は母韻字の「ウ」の正變兩体を以て充當したるものにして二字制定の理は「ウ」と同一であります「カイ」は「カ」に第二段の縮字法を應用したる「カキ」と同一文字でありまして、一寸見まするど礎基文字で書いた方が有利の樣でありますけれども、正体の多行各字、變体の佐行各字、波行各字並に波行拗音各字、佐行拗音の「シャ」等の連綴さるゝ時は極めて綴り惡いのでありまず、されば是等の不便を避けんが爲めに斯かる文字を特定したのでありますから以上各行音字以外の文字の綴合さるゝ場合には別格の縮字を應用するの必要は勿論ありませぬ、其他の「サイ」「ナイ」「ハイ」「ライ」等も亦同一理由に依つて定めたのでありますから基礎文字を以て綴るも何等運筆上支障無き場合には別格縮字活用の必要は全然ありませぬ。偖て「サイ」は基礎文字の「ス」を以てし、「タイ」は基礎文字「ツ」の下部筆端左側に小圈を結合せるものでありまず、「ナイ」は速記文字成因圖中の小環より割出したるものにして上部の半環と下部の半環とを採つたものでありまず、而して上半環より採りたるものは母韻字正体の「ア」と全く同一でありますが下部

半環より採りたるものは母韻字變体の「ア」と二十二度半の差が御座いまず、尙ほ詳しく言ひますれば變体の「ア」は左端が二十二度半水平線よりも高きに反し右端は水平線より二十二度半下がつて居るものでありますから右左兩端は傾斜の度を有して居るものでありますが別格の文字は左右兩端が水平を保つて居るのでありまず、又「ハイ」は基礎文字の「フ」、「ライ」は同じく「リ」と同一文字でありまして之れ等各字も亦當該基礎文字と混乱するの憂れなきは吾人從來の經驗に依つて確証致しまず、唯だ一言特に注意して置きたいのは、人名、地名等の場合には必ず基礎文字を以て書く事を心掛けねばならぬことでありまず。

應用例

愛國　解釋　開催　大敗



■「愛國」は縱の「アイ」に「コク」を連綴したるものでありまず「解釋」は「カイ」に「シャク」を連ねたものでありまして、若し別格の「カイ」を應用せずして基礎文字を以て書く時は「イ」に「シャ」を接續する場合

に少なからず不便を感ずるのみか筆勢に依つてどうしても「シャ」が「ハ」に變じて間々誤りを釀すものでありますから斯かる場合には是非用例の如くにしなければなりませぬ、之れに反し「開催」は別格の縮字を應用せざる方至便であります、又「大敗」は「タイ」に「ハイ」を連綴したものであります。爾餘は各自至利至便の綴字法に從つて巧みに應用するのが最も肝要であります。

例題

束帶	再開	此の際	會內	排斥
胚胎	懷中	鬟鬟	哀訴	畿內
內閣	會則	內職	來會	妻帶
改廢	內密	再來	禮拜（ライハイ）	記載

■例題中「束帶」は變格の「ソク」を書かずして基礎文字變体の「ソ」に「ク」を綴りて「ソク」としたる後ち「タイ」の別格を連ねた方が利便であります。又「會內」は別格の「カイ」に正体の「ア」を連ねて「カイナイ」とし「哀訴」は變体の「ウ」と同一の「アイ」を使へば變体の「ソ」を、正体「ウ」と同一の「アイ」を用ゆる時は正体の「ソ」を以て綴るのであります、「畿內」は「キ」に變体の「ア」と同樣の「ナイ」を、「內閣」「內密」及「內職」は共に何れも正体と同樣の「ナイ」を用ゐるのであります。

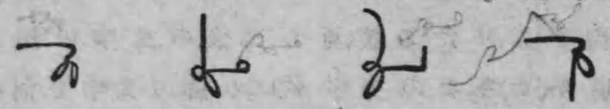
第三　「い」を隔つる縮字法

「海國」及「甲斐絹」等の如く或文字の次に母韻字「い」の連綴せられたる後、更らに他の文字の綴合さるゝ場合、「い」の次の文字が「い」の前の文字と同一發聲なる時は正格の縮字法を應用する事が出來るのであります、假へば「海國」は「カイ」の次に第五段の縮字と第三段の縮字とを併び應用して「い」の前字「カ」と同一發聲である所の加行第五段の「コ」及同行第三段の「ク」を代表せしめて「カイコク」てふ一名詞を作るが如く其他悉く「い」の前字に隨つて後字を縮綴するのでありまして「い」の次に應用さるゝ縮字は總て角を附する事に留意しなければなりませぬ、尙ほ「い」以外の母韻字「アウエオ」並に半母韻字「ワ」に對しても亦同一方法に依り應用し得らるゝのでありますけれども、這は應用の範圍極めて少ないばかりでなく却つて縮字の連綴を不便と致しまするが故に「い」のみに對して應用する事と定めたのであります。

此趣旨に依り前節に於ける別格縮字は何れも「い」の音を有するを以て各其行に隨伴して更らに正格の縮字法を應用して宜しいのである。

應用例

開國　大敵　細則　解決



■注意　「大敵」は「タイ」に第四段縮字を用ゐて「キ」を綴り、「細則」は「サイ」に第五段縮字を應用して「ク」を連ね、又「解決」は「カイ」に第四段の縮字を綴りて「ッ」を接續したものであります。

例題

區域	妻子	細說	催促	拜披
配付	敗兵	大地	回顧	敗北

■注意　上掲中「拜披」「配付」「敗兵」等は「ハイ」の次に基礎文字を用ゐた方が利益であります、又「敗北」は「ハイ」に第五段の縮字を連綴して「ホ」を代表せしめ、「ク」を接續するも「ハイ」「ホク」兩者共縮字を用ゐるも大なる等差はありませぬ。

第十章　濁音の書方

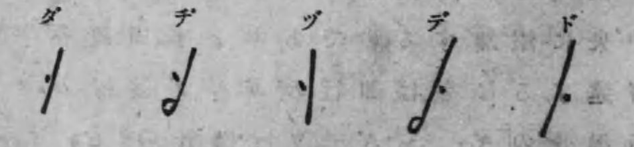
濁音には加行、佐行、多行、波行の二十音並に加行拗音、佐行拗音、多行拗音、波行拗音の十二音とがありまして從來の我が國字に於ては假名文字の右肩に二点を附加して濁音を代表せしめ來つたのでありますが、迅速を本旨とする速記にありては二点を附加するのは極めて煩雜にして迂遠の嫌ひあるを免れませぬから一点を減じて一点のみを附する事と致したのであります、而して其加点の方法は如何にすべきかといふに、速記文字成因圖の中環より割出したる文字に對しては左方又は上方中央に加点し、大環より割出したる文字に對しては右方又は下方の中央に添加するのであります、尙ほ各字に付て詳述するならば加行の「ガ ギ グ」波行の「バ ビ ブ」加行拗音の「ギャ ギュ ギョ」、波行拗音の「ビャ ビュ ビョ」の十二字は上部中央に加点し、加行の「ゲ ゴ」、波行の「ベ ボ」の四字は下部中央に加点するものでありまして、佐行の「ザ ジ ズ」、多行の「ダ ヂ ヅ」、佐行拗音の「ジャ ジュ ジョ」多行拗音の「ヂャ ヂュ ヂョ」の十一字は

左方中央に附し、佐行の「ゼ ゾ」、多行の「デ ド」、及佐行拗音「ジャ」の五字は右方中央に一点を添加するのであります、今下に之れが加点方法の一班を具体的に示しませう。

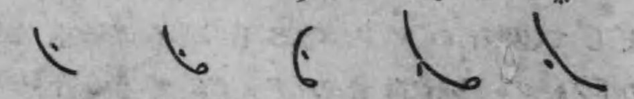
加行濁音字

佐行濁音字

多行濁音字



波行濁音字

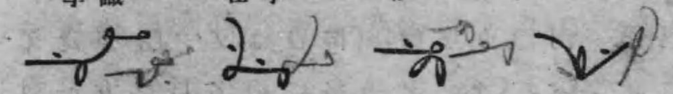


佐行拗音の濁音字

■注意　佐行及多行は共に正體に對する方法のみを示したのでありますが變体にありても同一であります、尙ほ加行拗音、多行拗音及波行拗音、各字に對するものも掲げませぬが其方法は上述せる所に依つて十分諒解せられた事と思ひます。尙ほ正格の第一、第二、第三、第四、第五各段縮字、變格「ク」の縮字は何れも圓環若しくは楕圓環に一点を加へ、又別格縮字の「ヶイ」は上方に、同「サイ」及「タイ」は左方に同「ハイ」は右方に各々一点を加へて「ガイ」「ザイ」「ダイ」「バイ」等の濁音に變化せしむるのであります。

應用例

學識　在學　疑獄　駱駝



掠奪　虐待　爆裂　開闢

即座　弱者　賣國奴　毒殺

■注意　「疑獄」は「キ」の基礎文字並に第五段縮字「ロ」に加点して「ギゴ」となせる例であります。又「駱駝」の「ダ」は正体の「タ」に加点しても大なる差はありませぬが變体を用ゐた方が運筆が自然であります。「即座」は別格縮字の「ソク」を用ゐ「サ」を縮綴して其圓環に加点しても宜いのであります、「賣國奴」の「ド」は正体を用ゐた方が正確に書けるかの感がありますけれども何れにても差閊はありませぬ、併し毒殺は用例の如くした方が得策で御座います。

例題

測度	束縛	俗役	俗務	俗語
嫡女	學僕	玉露	迫害	爆破
武具	附隨	牧畜	絶大	擴大

■注意　例題中「束縛」及「俗役」は「ゾク」を基礎文字にて書き「バク」「ヤク」を變格に縮字した方が利便であります、又「絶大」は「ゼッ」と基礎文字にて書き「ッ」の左側に第一段の縮字を附して「イ」を接續し縮綴されたる「タ」に加点して「ダイ」となすのであ

ります。

此加点法も亦二文字を書くと同一の手數を要する次第でありますれば理論上より言ふ時は簡明迅速を貴ぶ速記の眞髓に悖戻し迂遠迂極の法則たるの誹りあるを免れませぬ、然れども既に總說に於て述べたる如く元來速記文字は記臆力の補充を爲す方便でありまして之れを應用せんと欲するには充分の學術と腦力とを具備せなければならぬのでありまして、言語、文章にも亦自ら規矩準繩の備はれるものありて痴者狂者の言語文章にあらざる限り或特殊の場合を除くの外は前後の關係に依り推讀し得らるゝものでありますから遂には清濁を區別するの必要を認めざるに到るのであります、併しながら茲に一顧を要すべきは所謂偉人にあらざる普通一般人の腦力及學力には自から制限の存するものでありまするが故に如何に卓越せる學識、强健なる腦力を有するものと雖も未知の地名、人名、固有名詞若しくは速記の際自己の腦力にて解し能はざる難解の熟語又は外國語其他前後の關係に依つて判讀に困難なる言語又は熟語に對しては清濁を確實に區別し

置くの必要を切實に感ずるのであります。假へば「金貨」と「銀貨」「人民」と「臣民」等の類にありては前後の意味脈絡にては其何れの音に屬するやに狐疑し遂には「金貨」を「銀貨」と誤譯して天下の嗤笑を買ふ事無きを保し難いのであります、而して又速記文字が記腦力補塡の方便なりとは言へ思想感情を有形に現はす方便たる記載語と等しく一種の寫言的學術でありますから、相當の學力を備ふるものと雖も速記の術に熟達せざる間は容易に清濁を判讀し難いものであります、されば初學の時代は必らず濁点の添加を怠らずに能く練磨し「金貨」と「銀貨」等の如き場合に遭遇するも咄嗟に濁点を附加し得るの程度に達せしめ置かねばなりませぬ、若し最初より加点の法則を等閑に附して練習を怠つたならば成業の曉懸河の辯を速記するに際し前述の如く自已の腦力を以て判讀し能はざる語句に遭遇したる場合、濁点を附せんと欲するも徒らに周章狼狽して自已の欲する文字に加点するを得ざるのみならず之れが爲めに筆力に澁滯を來して折角の速記に瑕瑾を附するの悔あれば當初の裡は多少の苦痛を忍んでも必らず

濁音の法則に從つて練磨する事に注意しなければならんのであります。

第十一章　長音の書方

長音とは「カー」「キー」「クー」「ケー」「コー」「バー」「ビー」等の如く各音尾の長く引きて發せらるゝ聲音でありまして其多くは字音にのみ存して居るのであります、而して文部省所定の假名遣法に於ては音字の異なるに依つて其假名遣を別にし來つたのでありまするが速記文字にありては既に假名遣の節に於て述べたるが如く從來「かふ」「かう」「こう」「こふ」「くわう」と遣分けられたるものと雖も其音が等しく「コー」と聞ゆる以上は其聞ねたる音の儘に書いて宜しいのであります、然れども初學者の中には往々にして生徒(セート)を「せいと」、總裁「ソーサイ」を「そうさい」と書くものゝあるのを見受けますが速記に於ては次の如き長音符號なるものを制定して或特殊のものを除くの外は總て基礎文字に添加して其長音を示す事と致したのでありますから必らず此法則に遵つて書かねばなりませぬ、尤も長音符號なる

ものは濁音の場合と同じく基礎文字の上又は下に附加するものでありますから寧ろ「せいと」と書いて「セート」と爲した方が便利である樣にも感ぜられますが、長音なるものは各音母韻の部分即ち「アー」「イー」「ウー」「エー」「オー」と引音さるゝものでありまして「オ」「ウ」等の長く引かれたる場合は差程不便でもありませぬが「ア」「イ」等の長く引かれたる場合には綴字上に不便を感ずるのみならず時に或は各母韻字と紛乱誤讀するの虞れがありますから斯かる書き方は絶對に排斥しなければなりませぬ、而して長音符號も亦初學のうちこそ文字が未だ能く腦に親しまざる爲め速記文字を書くにのみ齷齪として文意語味を解するの腦力に餘裕なければ從つて反文譯讀の際に當り短長兩音を區別判讀するに苦しみ誤讀謬譯するの嫌ひが御座いますけれども漸く技術の練熟するに從つて腦の働きに充分の餘裕を生じ悼々として文章、言語の意味を理解し大概ね其幾分を記臆し得るに到るものでありますから遂には「歩兵」と「砲兵」の如き或は「大澤」と「小澤」等の如き前後文語の關係に依つて解し難き特殊の場合を除くの外は全然省略

しても何等誤謬を來さざるに到り漸次應用の數を減少するものでありますから實地應用の場合に當つては決して煩瑣に堪へざるが如き憂れはないのであります。

第一　基礎文字と長音符

基礎文字に應用すべき長音符號に第一長音符、第二長音符、第三長音符の三種が御座います、第一長音符は点を以て充當したるものにして、第二長音符は母音字正体の「オ」と同一線狀を用ゐたのであります、又第三長音符は母音字正体の「ウ」字と相等しき線を以て代表せしめたのであります。

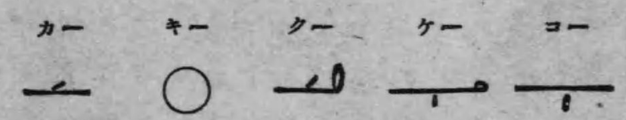
第一長音符	第二長音符	第三長音符
＼	／	｜

■注意　長音符號應用の説明に先立ち音韻と速記の章に於て説き漏したるもの並に更らに繰返して説明をなし特に注意を促すの必要あるものに對して一言致します、直音の「シ」と拗音の「シュ」とは「クヮ」と「カ」との關係に於けるが如く已に大半は「シュ」と「シ」とを混用するに到り急速に

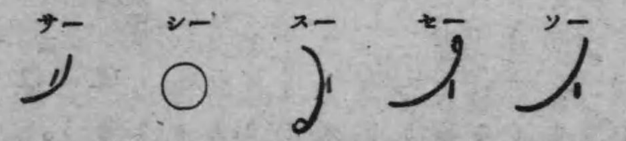
發音する時は其間殆んど區別し難き狀態にありますから「技師」と「技手」の如く混用を許さざるものを除くの外は最も近き音の文字を用ひて宜しいのであります、唯だ此見地よりして「シ」「シュ」の長音は「シー」よりも「シュー」に近い音でありますから「シュ」に長音符號を附して應用する事に一定致して置きます、又五十音圖中の第二段に屬する「キチニヒミリ」の六音字は拗音同段に屬する「キュ」「チュ」「ニュ」「ヒュ」「ミュ」「リュ」等を以て充當する事とし全然之を長音符號應用より除外する事と致します、尙ほ加行乃至也行の第三段に屬する「クスツヌフムユ」及良行第四段「レ」の八字並に拗音字中の「キャ」「シュ「シャ」「チャ」「ニャ」「ミャ」「ヒャ」「リャ」「ヒョ」「リョ」「キョ」「ミョ」の十二字も長音符の應用より省きまして該二十字に對しては別個の方法に依る事と致します、即ち「クヌムレヒョリョ」の六字は尾端に結合されたる「ウ」及「オ」字形の橢圓環の部分を倍長大にし、「キョ」は尾端に附したる小環を橢圓形にして長音なる事を示し、又「スツフユキャシャシュチャニャミャヒャリャ」の十二字は何れも單線の部分を倍長大のものとなして短音文字と區別するのであります。偖て各

符號に付て詳說しますれば第一長音符は小環より割出されたる母音字の「アイウエオ」並に半母韻字の「ワ」に加へて「アー」「イー」「ウー」「エー」「オー」「ワー」を表はすのであります、第二長音符は中環より作成したる五十音中の「カサタナハマヤラ」の八字並に拗音字中「ショチョニョ」の三音字に對しては各文字の上方又は左方に添へて其長音なる事を示し、第三長音符は大環より案出せられたる五十音圖中加行乃至也行の第四段に屬する「ケセテネヘメ」の六音字及同第五段に屬する「コソトノホモヨ」の七字並に良行第三段の「ル」同第五段「ロ」の二字に對し各字の下部又は右方に附して短音文字と區別するのであります。

加行長音符應用例



佐行應用例

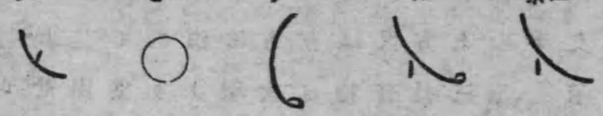


多行應用例

ター　チー　ツー　テー　トー

波行應用例

ハー　ヒー　フー　ヘー　ホー



ナー　ニー　ヌー　ネー　ノー

マー　ミー　ムー　メー　モー

ヤー　ユー　ヨー

ラー　リー　ルー　レー　ロー

■注意　奈行、末行、也行、良行各音字に對する長音符應用の樣式も同一であります。

拗音長變應用例

シュー　キョー　チョー　ヒョー

■注意　「キャー」「シャー」「ショー」「チャー」「ニャー」「ミャー」「ヒャー」「ショー」「ニョー」等は用例の示す所に倣つて各自應用する事が出來るでありませう。

安行應用例

アー　イー　ウー　エー　オー

■「ア」「ウ」の變体及「ワ」に對しても亦同樣加点して其長音なる事を表示するのであります。

第二　縮字と長音

基礎文字に付ての長聲音表示の方法は以上の説明に依つて諒解せられたであらうと思ひますが尙ほ縮字の場合には如何にすべきかといふに縮字は總て圓環若しくは楕圓環を以て制定したるものでありますから「クー」「レー」の方法と同じく普通の縮字即ち楕圓環を倍長大のものとなして普通短音の縮字と區別し其長聲音なる事を示すのであります、併しながら第二段縮字は基礎文字に於けると同樣第三段に屬する當該の拗音字を充用するのでありますから長聲音と區別するの必要は全くありませぬ、又第一段縮字の長聲音は其小環圓に第一長音符を應用しても宜しいのでありますが、該縮字の應用せらるゝ場合の長聲は極めて稀薄であります

から殆んど應用の必要無しと言つても宜しい位であります。今次に基礎文字の長音と共に應用例を示しませう。

應　用　例

■注意　「砲兵」は「ホ」の下方に長音符を附して「ヘー」の縮字を倍長大のものとして「ヘー」を表はしたものであります、又「光景」「傾向」は「コ」並「ケ」の下部に長音符を附して縮字されたる「ケ」「コ」を倍長大にしたる例であります、「不法」は「フ」に縮綴されたる「ホ」を倍長して「ホー」を表はし「捜索」は「ソ」に、「政局」

は「セ」に第二長音符を附し、又「大久保」は「オ」に加点して長音なる事を示し、「ホ」の下方に加点して濁音を表はしたのであります、「交渉」は「コ」に第三長音符を「ショ」に第二長音符を附たるものであつて、「慷慨」は「コ」に第三長音符を附し、「コ」の尾端に第一段縮字「カ」の圓環を結合して環内に濁点を附して「ガ」となし「イ」を綴りたる例であります、「励行」は「レ」の尾端に附せられたる橢圓形の部分を倍長して「コ」に第三長音符を附し、「籠絡」は「ロ」に、「警告」は「ケ」に何れも第三長音符を附して當該の長音を表はし、「葬送」は「ソ」に長音符を付し、尾端に縮綴されたる「ソ」を倍長したるものであります尙ほ「修築」は「シュ」を倍長して「チク」を連綴し、「拾集」は「シュ」を倍長大にしたる後「シュ」の縮字を同樣倍長したものである、又「頭痛」は「ト」に第三長音符を加へて「ツ」の縮字を長くしたものであります。

例　題

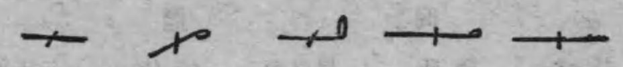
大阪	公け	大隈	交友	港外
綱紀	行程	公報	報告	窮命
廣告	留學	夕刻	鑛業	効果
臥床	傾聽	傾注	脅迫	興敗
相續	子弟	集輯	勝負	命令

第三 濁音の長聲

暴徒、强盜、贈位の如く濁音の長聲なる場合には以上述べたる各長音符を基礎文字に交叉して其長聲の濁音なる事を表示するのであります而して其樣式は普通音に對する加点法と齊しく中環より割出されたるものに對しては第二長音符を交叉し、大環よりせるものに對しては第三長音符を交叉して各當該文字の濁長聲なる事を示すのであります、更に言を換へて詳述しますれば直音の「カ キ ク」「サ シ ス」「タ チ ツ」「ハ ヒ フ」並に拗音の「キャ キュ キョ」「シャ シュ ショ」「ヒャ ヒュ ヒョ」に對しては第二長音符を交叉し、又「ケ コ」「セ ソ」「テ ト」「ヘ ホ」に對しては第三長音符を交叉して長濁聲を表はすのであります、尤も上述の內直音中第三段に属する「ク ス ツ フ」には各倍長大にしたるものに濁点を附しても差閊ひはありませぬが第二長音符と交叉の樣式に倣つた方が幾分優秀の感があります今次に應用例の一班を示しませう。

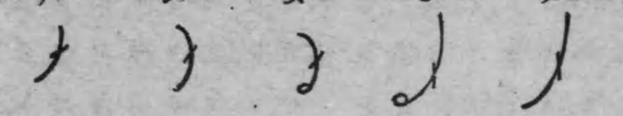
加行長濁音

ガー ギー グー ゲー ゴー



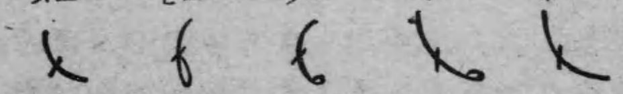
佐行長濁音

ザー ジー ズー ゼー ゾー



波行長濁音

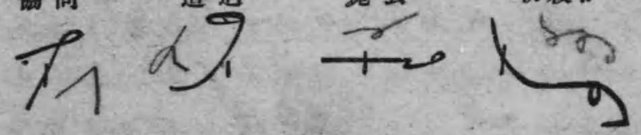
バー ビー ブー ベー ボー



■上掲の中「ギー」「ジー」「ビー」は「キ シ ヒ」の各字に長音符を應用せずして拗音の「キュ シュ ヒュ」に對して第二長音符を附したる例を示せるは清長音に於けると同一理由であります。

應用例

協同 遭遇 蔑去 防穀令



■注意 遭遇の如く縮字の濁長音なる時は該

楕圓環を倍長したる上、濁点を添加するのであります。

例題				
凝結	動物	暴風雨	僥倖	行幸啓
手車（テグルマ）	道德	僧惡	北條	鳴動
藝妓	帽子	强奪	稅制	遊說

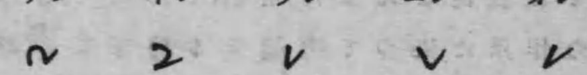
第十二章　撥音表示法

撥音とは混沌(こんとん)恬淡(てんたん)等の如く鼻腔の作用に依つて生起する聲音なるが故に鼻音とも稱するのであります、而して此音は何れの場合に於ても獨立する事無く必らず或言語の次に附隨して始めて一の聲音を成すものでありまして從來字音に於ては片假名の「ン」平假名の「ん」を以て充當し又國語音に在りては「む」又は「ぬ」等を使ひ來つたのでありますが速記文字に於ては次の如く各文字の尾端を上方に撥ねて其鼻音なることを現示するの方法を採用したのであります、されば寫言の學術に在りては「明日さへ春雨降らば若菜摘てむ」並「我身は如何樣になりなぬ」に於けるてむ及なむは「てん」及「なん」に又「ありませぬ」のせぬは「せん」に書いて宜しいのである、即も齊しく鼻音の「ん」に聞ゆるものは在來の假名遣法に於て「むぬ」等に區別せられたるものと雖も矢張聲音の耳朶に響きたる儘を書くのであります、然れど飜譯の場合に際しては文典の定むる所に遵つて書かなければ

ならぬのは前述の通りであります。其一班を示せば次の如し。

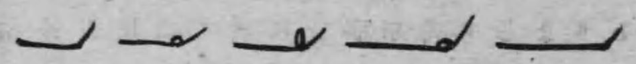
安行の例

アン　イン　ウン　エン　オン



加行の例

カン　キン　クン　ケン　コン

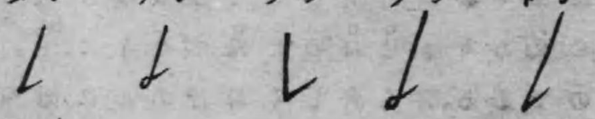


佐行の例

サン　シン　スン　セン　ソン

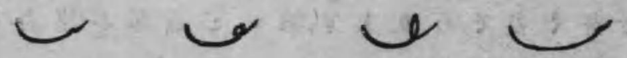
多行の例

タン　チン　ツン　テン　トン



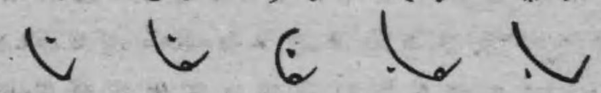
奈行の例

ナン　ニン　ヌン　ノン



波行の例

パン　ピン　プン　ペン　ポン

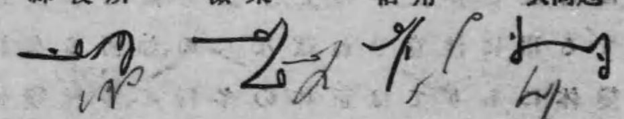


■他は總て示例致しませぬが其方法は皆同一でありますから上掲の用例に依つて推測應用し得るであらうと思ひます。而して佐行及び多行は綴字の關係上萬已むを得ざる場合を除くの外は可成正体文字の止筆点を撥ねて撥音を表示する事に注意せねばならぬ、如何となれば佐行變体にありては正体の多行と、多行變体にありては佐行正体と紛乱するの嫌ひがあるからである。尙ほ撥音の次に發せらるゝ音字にして正變兩体を有する文字は何れを使用すべきかといふに佐行は變体を、多行は正体を、也行は變体を以て良法と致します、然れども是れ兩文字間の關係でありまして、以上三行の次に更らに他の文字の連綴せらるゝ場合、即ち撥音の次に書くべき佐行に更らに連綴すべき文字が奈行波行、巴行各文字並に「ス」「ツ」「ワ」及び佐行、多行、奈行、波行各拗音字なる時は佐行を正体に、多行の次に綴る文字が奈行、波行、巴行各字並「ワ」及び佐

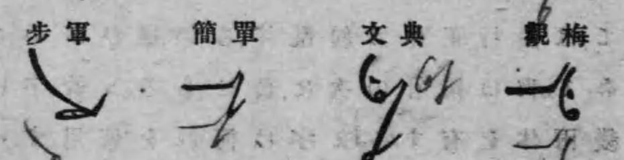
行、奈行拗音なれば多行の變体を、又也行「ヤ●ヨ」の次に接續する文字が加行、波行、巴行各字並「ワ●イ●ス●ツ」及び「シャ」「チョ」「ニャ●ニュ●ニョ」「ヒュ●ヒョ●ビャ●ビュ●ビョ」なる場合には也行の正体を應用せねば他行文字に變化するの憂れがありますから能く注意して其活用を誤らぬ樣に努むべきである。

應用例

郡役所　檢束　信用　大問題



歩軍　簡單　文典　親梅



撥音　促音

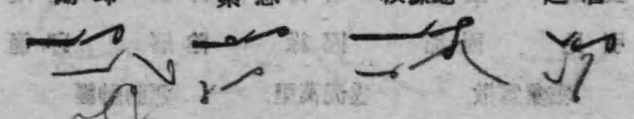
ありませぬ　若葉摘てむ

■注意　檢束、簡單、文典等の如き其他總て撥音の次に連綴すべき文字は可成人爲的反動に依

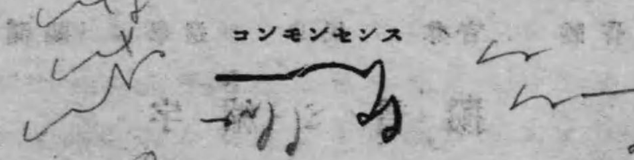
つて逆に書くの良法なるは前述の如くであるが末行各字並に加行、末行兩拗音各字、及「チャ」等にありては如上の良方法に依つて綴字すること能はざるを以て連綴上不便ではありますけれども之等に對しては諸子が熱心なる練磨の原動力に依り不便を化して便ならしむるの外はありませぬ、今下に其綴字例を示しませう。

綴字例

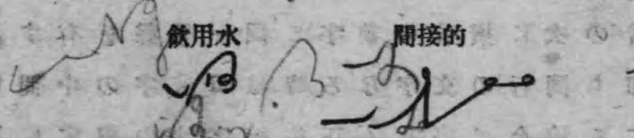
閑却　緊急　根據地　延着



コンモンセンス



飲用水　間接的



飲用水、間接的は共に「エンヨウ」、「カンセ」のみなればヨ又はセを變体に書いた方が便利ではあるけれども更らに「ス」又は「ツ」の如く下方に書き下ぐる文字を連ぬる時は縱に長き文字となりて速記面を醜ならしむるばかりでなく、運筆上

にも少なからず不便を來します、されば斯かる場合には「ヨ」又は「セ」を正体に書いて多少の不利を忍んでも後に連ぬべき文字綴合の利便に依つて補ふ事が出來ますから結局正体を用ゐた方が運筆上好都合なるのみならず、速記面の美觀を保つ事が出來ます。

例題

宛然	完全	沿道	圓轉	艦長
安樂	安心	暗夜	印紙	因業
引見	因循	因緣	陰暦	印籠
雲集霧散		雲泥萬里	運動神經	
昏睡	官尊	民卑	選擧	觀測

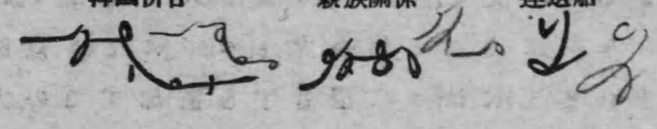
撥音と縮字

撥音の次に撥音の前字と同一發聲を有するもの即ち同行の文字なる時は母音字の中間に介在する場合と齊しく正格縮字法の規定に遵つて縮字を應用する事が出來るのであります。假へば官憲は撥音の次に發せらるゝ「ケ」が撥音を喚起したる「カ」と同一發聲を有するものであるから第四段縮字を應用すれば則ち「ケ」を代表し更に其尾端を撥ぬれば「ケン」となるが如きもの

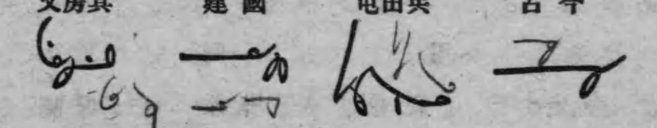
であります。而して撥音の次に縮字を綴る場合には必らず字首にッノを附して書く事を心掛ねばならぬのである。次に應用例を示して具体的に其方法を一層明かに致しませう。

應用例

韓國併合　親族關係　運送船



文房具　建國　屯田兵　古今

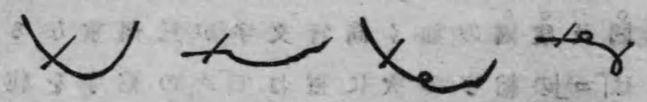


■韓國及建國の如く同行文字が三個重なる場合には「コ」の縮字の次に重ねて「ク」の縮字を使用するも然らざるも大なる差はありませぬが韓國併合の如く更らに尙ほ次に他の文字の連綴せらるゝ時は用例の樣にした方が運筆が自然でありますから從つて幾分優秀であります。尙ほ以上述べたる外に一種の撥音字添加法なるものがあります、這は鼻音を含める或語を綴るに當り撥音字を書かずして直ちに次の文字を連綴したる場合に該文字を再び書き直すのは頗る不便でありますから其鼻音を含める文字

に對して撥音字即ち上方に向つて片假名「ン」の上部の点を除きたるものと同樣上方に撥ねたる文字を附加するの方法であります。假へば困難を「コナン」と書過れる時鼻音を含める「ナ」に對し撥音字を附して「コン」となすが如きものでありまして、奔走を「ホソー」と書きたる時は「ホ」に、文字を「モジ」としたる場合(尤も「モジ」にても意味は通ずれども)には「モ」に撥音字を添加するの方法であります。

用　例

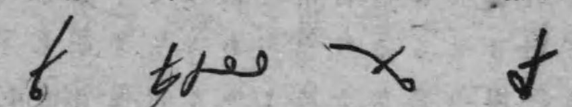
奔走　観音　辨難　近隣



撥音表示の方法は、撥音が主たる聲音に促されて生ずるが如く、撥音に促されて主たる文字の筆端を撥ぬるに依つて自然に該音を代表すべき文字が出來るのでありますから理論と實地活用に適へる最良の方法と言ふべきであります。されば誤記したる場合を除くの外は總て普通撥音字の書方に從つてせねばなりませぬ、併しながら是れ基礎文字綴字上の定則でありまして基礎文字撥音の次に縮字法を應用せらるる場合には却つて撥音字添加法を利便とする事がありますから斯かる時には例外として應用しても差支はありませぬ、次に二三用例を示して參考に供しませう。

應　用　例

頓智　單刀直入　論理　探偵



縮字法應用の場合と雖も撥音字添加法を使用するを便とするものは多行を除くの外は餘り多くはありませぬ、又「困難なる」の樣に同一方向の文字が三個以上連る上に撥音字の二個以上用ゐらるゝ時は用例の如く或一音に對して撥音字を附加した方が幾分利益であるが强ひて斯かる應用を爲すの必要もありませぬ。

例　題

金庫	金閣寺	銀婚式	軍國	官海
官紀	原稿	今後	嶄新	參政權
山積	山賊	新式	診察	申請

第十三章　促音表示法

聲音は總て氣息と發音機關との作用に依つて生ずるものでありますが、又氣息の發せらるゝ時、急に舌唇喉等の密閉に依りて中斷され暫くにして發音せらるゝ事があります、而して其中斷する機關の異なるによりて舌促音(腦中)、唇促音(失敗)喉促音(發行)等の區別は御座いますけれども何れも其中斷が恰も音の詰まれるものゝ如くなるを以て是れを詰音とも稱するものでありまして、此の音は何れの時に在りても決して獨にて成立する事無く必らず他音の中間に介在し氣息中斷の作用に因つて生起するものであります、されば言語發音を其儘書寫する中斷音を以て本能とする速記に於ても亦發音の中斷して其間に促音の存在する事を表示したのでありまして、其方法に三種御座います、其一は促音を喚起すべき音字を切斷するが如くにして文字と文字とを交叉して其間に促れる音の存在する事を示す文方法でありまして其二は促音を喚起すべき

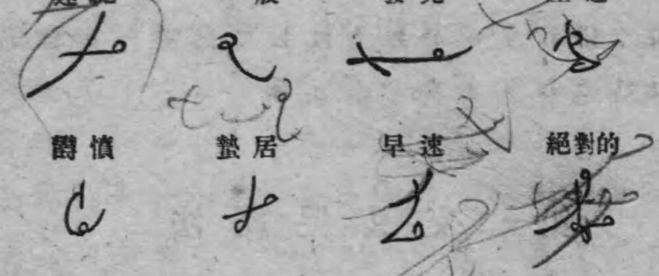
字に次の文字を併行せしめ其間に促音の含める事を表す方法であります又其三は交叉するが如く併行するが如くにして促綴するもの即ち夫れであります。

第一　交叉促綴法

先づ交叉の方法より説明せんに文字と文字とを交叉するの方法とは促音を喚び起すべき聲音を代表する文字と次に發せらるべき聲音を表示する文字が各其方向を異にし若しくは字形を異にせる場合前字即ち主たる文字に對して後字即ち從たる文字を交叉するものであります、假へば築港と書くに當り「チ」は促音を喚起すべき主たる文字でありますから之れに對し「コ」即ち從たる文字を以て「チ」を切斷するが如くにして交叉すれば其間に促れる音の存在なる事を意味するものでありまして更らに「コ」の下部第三長音符を添加すれば則ち「チッコー」となるの方法であります、今次に數種の用例を示して其方法を一層明瞭に致しませう。

應用例

速記　一般　發見　壓迫



鬱憤　蟄居　早速　絶對的

■注意　中斷交叉に依つて促音を表示する方法は用例の示す所によりて充分諒解せられたらうと思ふが尙ほ正變兩体を有する佐行、多行、也行各音字は其應用の方法に因つて好惡を生じ運筆上に至大の關係が御座いますから各其應用法に付き一々詳細の説明を試みませう。

例題

壓搾　あつさり　壓死　遁れ　壓制

暖か　斡旋　あつち　あつと　壓伏

■注意　促音が「ア」と「サ」との中間に存する時は「ア」の正体に對し「サ」の正体を以て交叉した方が便ではありますが壓搾、あつさりの如き場合には變体の「ア」に「サ」の變体を用ゐて交叉するのを得策と致します又「ア」が前字にして多行各字が後字なる時は「ア」の變体に對して正体の多行各

字を用ゐた方が至便であります。

尙ほ也行各音字と安行各音字との中間及び促音の次に安行各音の發せらるゝ事は絶對にありませぬから全然之れに對する説明の必要を認めませぬ。

正變兩体を有する前者三行の外は總て前字に對して後字を交叉すれば宜しいのでありますけれども、母音字即ち「アイウエオ」は最小の文字でありますから之れに對して後字を交叉するのは少しく不便の嫌ひあるを免れませぬ、されば斯かる場合は應用例に示せる一般の如く、母字の尾端に極めて小なる圈環を作る樣にして後字を綴るか、然らずんば鬱憤に示せる如く母音の筆端を其線に從つて中程迄逆に戻す樣にして後字を連ぬるのが良法であります。

例題

一角　一擧　一回　一見　逸す

一札　一週間　一切　一層　一体

一杯　一旦　一致　一片　一服

■注意　「い」に對する各音は正變兩体何れを用ゐるも差異はありませぬが促音の次の音が撥音を伴ふ時は佐行、多行共に正体を用ゐた方が

文字を正確に書き得るの利益があります。

又例題中○の印を附したるは別格の縮字法を應用すべきものを示したので御座います。謁見悅服、越權、越中島等は「い」と混同しても誤謬を來すの憂はありませぬ、又之等は第四節に述ぶる促綴の別法に依つて書いても宜いのである、假へば「謁見」はイの下にケの首端を併行するが如くし、悅服はフの首端を以てイを圍繞するが如くにして促綴するのであります。

例　題

うつかり　鬱結　うつすり　鬱積　訴へ

■注意　訴へは變体の「ウ」に對して別格の「タイ」を交叉するのでありまして、他は總て正体の「ウ」を用ゐた方が宜しいのであります、佐行各字が正体の「ウ」に對する時は正体を、變体に對する時は變体を用ゐ、又多行各字が「ウ」の正体に對する時は變体を、變体に對する時は正体を用ゐる樣にしなければならぬ。

而して又「ス」は正体の「ウ」に「ッ」は變体の「ウ」に交叉するのであります。

例　題

喝采　合戰　合体　勝手　割烹

合併　吉辰　切手　屈指　屈折

屈託　決死隊　決心　缺席　缺点

■注意　佐行各字を以て加行各字に中斷交叉するには正變兩体何れを使つても等差はありませぬが佐行「サ・ソ」の次に更らに加行各字の綴合せらるゝ場合、假へば「結束」、「合作」の如きに在りては「サ・ソ」の變体を以て加行各字を切斷した方が便利であります。多行各字が加行の文字に對する時は總て正体を用ゐるのが良法であります。

例　題

雜記　雜居　殺菌劑　雜則　雜多

雜駁　雜草　雜費　雜沓　擦過傷

實見　失脚　實驗　實際　失体　執達吏

嫉妬　すつと　接觸　設置　折衷法

■注意　佐行各字に加行、末行、並に奈行各字を交叉する時は佐行の變体を用ゐた方が幾分利便であります、同じく多行、波行、也行(變体)並に良行各字を以つて中斷交叉する場合には佐行文字を正体に書いた方が遙かに優つて居ります又佐行に拗音文字中の「キャ キュ キョ チャ」の促綴さるゝ時は必らず佐行を變体に書く事に注意せ

ねば運筆上頗る不便であります。尚ほ多行變体の文字を以て佐行に促綴する時は是非共佐行を變体に書かねばなりませぬ。

例題

脱監	脱却	達識	達者	脱走
窒息	脱線	撤去	撤回	鐵柵
鐵血	鐵橋	鐵石	德利（トックリ）	喘嗟

■注意　應用例に示せる藥局の如く「ャュョ」に對して加行、佐行(正体)、多行(變体)、末行各音字並に「キャ キュ キョ チャ シャ ミュ ミョ」等の促綴さるゝ時は也行の變体を書かねば甚だ不便であります然れども上述以外の各音字を促綴する場合には也行正体を用ゐる樣に努むるのが肝要であります。

尚ほ加行、奈行、末行及び「ワ」の十六字に對して佐行の「サシセソ」の四字を促綴する場合には交叉促綴の方法に依るも差して不便ではありませぬが後節に述ぶる促綴の別法に依つて促音を表示した方が遙かに便利であります。

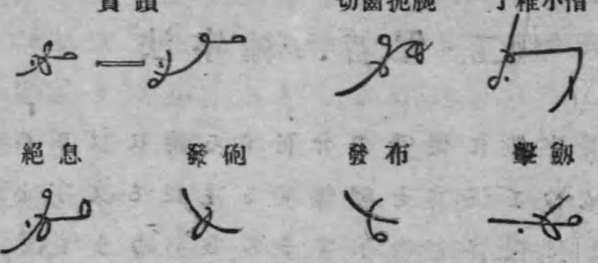
第二　促音と縮字法

同行音字間に促音の介在する時には正格縮字法に依つて促音を喚起する主たる文字を切斷交叉して促音を表示するのであります、然れども中には主たる文字と其方向を同うするものは促綴が不便であるから縮字法の應用をなさず、後節の併行促綴法に從ふ事と致します、各行に就て說明しますれば多行に在りては第五段の縮字即ち多行に對する「ト」は其方向相等しきを以て之れを後節に讓り、又波行の「ホ」を除く「ハ・ヒ・フ・ヘ」の各縮字、也行に於ける第五段縮字「ヨ」良行に對する第四段の縮字「レ」(佐行に對する「ソ」を除く)等であります。而して縮字を以て促綴する場合には其字首にッノを附して書くのを良法と致します、次に其一班を示して應用の方法を明かに致しませう。

應用例

中等學校	學期	學科目	刷新

實蹟　切齒扼腕　丁稚小僧



絶息　發砲　發布　擊劍

注意　第一、第四、第五各段縮字は皆楕圓環若しくは少しく大なる圓環文字でありますからツノを附せずとも些して不便も感じませぬが刷新、切齒、學期に於ける第二段縮字は極めて小なる圓環でありますから之れを以て促綴する場合には用例の如くツノを附して書かなければ不便此上もありませぬ、されば第二段縮字を以てする時は必らず字首にツノを附して書く事に氣を付けねばなりませぬ又實蹟の如きは縮字法を應用するも基礎文字を以て書くも些したる懸隔はありませぬ、尙ほ第三段に屬する「クスツヌフムユル」等を以て促綴する場合には縮字法を用ゐず、基礎文字に依りて前字に交叉するか若しくは後節の併行方法に據るか二者其一を應用した方が遙かに策の得たるものであります。

例題

黠頑	結構	骨格	滑稽	雜稚
さつさと	出席	接戰	率先	徹底
突堤	取つて返す	八方睨み	第方	出征

第三　併行促綴法

併行促綴の方法とは同一方向の文字と文字とを併行せしめて其間に促音の存する事を表示するの方法であります、換言すれば促音を喚起すべき聲音を代表すべき主たる文字と促音の次に發せられたる聲音を代表すべき從たる文字が同一方向の文字なる時、從たる文字を主たる文字と併行促綴するもの假へば拮屈(きつくつ)と綴るに當り先づ促音を喚び起すべき主たる文字の「キ」を書き之れに對して、促音の次に發せらるゝ「ク」の聲音を代表する從たる文字を「キ」の下部に併行して綴り、然る後「ツ」を接續連綴するが如きものであります、而して促音を含める文字が縱線なる時は縱に又横線文字なる場合には横に併行促綴するの方則であります、以下應用例を示して詳しく解說を試みませう。

應用例

切掛　拮屈　滅切　日光

■注意　促音の次に發せらるゝ聲音を代表する文字を前字の上部に促綴するも差支はありませぬが其多くは下部に併行して書いた方が幾分優秀であります、さて加行各文字間に促音の存する場合、從たる文字が「カ キ ク」なる時は「基礎文字」を以て併行促綴し「ケ コ」なる時は「縮字法」を應用して交叉促綴の方法に從ふ事と致します滅切、日光等は共に主たる文字が從たる文字と其行を異にするが故に交叉の方法に依る事も出來ますけれども併行の方法に依るを便宜と致しまするが故に是等同一方向の文字は總て併行の方法に從ふ事と致します。

例題

奇怪(キツカイ)	崛起	結果	閣下	國家
決行	缺陷	缺勤	結婚	こつく
日勤	日課	熱血	乘切(ノツキリ)	眞甲
眞暗	抹香	勿怪(モツケ)	呑(モツコ)	むつくり

■例題中○印の附したるは縮字を應用すべき

ものを示したのであります、又加行各字を奈行各字に對して促綴する時は總じて下部に併行促綴するのを便と致します。

應用例

颯々	失策	執奏せり	拙作
脱黨	貴ぶ	黜陟	鐵中の錚々
取縣	逼迫	半被	頗邊

■注意　佐行各文字間に存する促音を表(アラハ)すには縮字法若しくは正變兩体を以て交叉の方法を應用するも又は併行の促綴法を用ゐるも差支なく要は唯だ各自の便宜に從つて活用すべきであります、多行に在りては第四段「テ」を縮字法に依りて交叉の方法を應用するの外、他は大概ね併行の方法に據るのが良法であります、波行も亦第五段「ホ」の縮字を以て交叉の方法に從ふの外、他は總て基礎文字を以て併行した方が

至便であります、而して是等縱線文字に屬するものは悉く主たる文字の右側に併行せしむるのを原則と致します。奈行、末行、也行、良行、安行等のは同行間に促音の發せらるゝ事は殆んとありませぬ。

例題

疾走	失踪	颯爽	折損	脫兎
嫉視	八方	發表	別派	別嬪
勃發	ちつと	徹頭	手取（テツトリ）	膃肭獸（オツトセイ）

■例題中○印を附せるは縮字に依るも基礎文字を以てするも二者其宜しきに從つて應用すべきものを示したのであります。

第四　促緩の別法

以上說述せるものは促音の前字と後字とが互に其方向を異にせる場合若しくは各其方向を同うせるものに對する促緩の方法でありましたが今茲に述べんとするものは促音を喚起すべき音と促音の次に發せらるゝ音字とが角度に於て二十二度半の相異ある場合又は同一角度の曲線なる時に應用するものでありまして

前二者を折衷したるが如きもの假へば國境(こつきやう)に於ける「コ」と「キョ」とは其間二十二度半の等差でありまして交叉、併行共に少なからず不便でありますから、之れが促緩に當り先づ「コ」を書き、「キョー」を以つて「コ」の右筆端を摩する樣にして斜めに交叉するが如く、併行するが如くする方法である、故に是れを名付けて促緩の別法といふのであります。

應用例

■注意　加行が主となり加行拗音が從となりて其間に促音の存する時は應用例の如く加行拗音を以て加行の筆端を摩するが如くにして書くのであります、又末行各字に對して「チャ」及

佐行の正体を以て促綴する場合には交叉の方法に據るも必らずしも不可とは申しませぬが、這は矢張別法に從ふのが得策である。而して出所、着港、物品、熱狂等は前者と反對に後字の首端を前字に摩するが如くにしたるは畢竟するに前字の角度を正確ならしめ、且つ運筆の輕快を期せんが爲めに外ならぬのであります。尤も熱狂は「キョ」を「ネ」の上下何れにするも些したる差異はありませぬ。

例　題

割據	學級	拮据	喫驚	屈曲
屈強	血球	穴居	却下	逆行
抹殺	日給	積極的(シヤキョク)	滅却	着荷

茲に初學者に對して特に注意せねばならぬのは我が國の記載語即ち假名文字に於ては鼻音を滿足に表示するに足る文字の制定無く唯だ纔かに五十音中の「ツ」及「ク」を用ゐて鼻音を表すべき文字の下部左脇に比較的小さく書きて促音を代表せしめつゝあるのでありますが詰音とは氣息の中斷されて詰れるが如きものを指して特に聲音と同一に取扱ひ來れるものでありまして該音の性質が「ツ」又は「ク」と全然異なれ

るものなる事は自から明かであります、併しながら世人の多くは因襲の久しき慣習に捉はれ「ツ」又は「ク」を以つて促音文字なるかの如くに思意せる結果、速記文字を連綴するに當りても亦學校を「ガクカウ」、折角を「セツカク」と連綴して促音に充てられたる「ツ」及「ク」を恰も普通聲音字を綴合する如く基礎文字を以て書く者のあるのを見受けますが斯かる書き方は速記の本旨に戻る惡法にして絕對に斥けなければならんのである、速記文字に在りては前節述べ來れるが如き完全なる促音表示の方法があるのでありますから從來の假名遣ひ法の如き舊套を墨守するの必要はありませぬ、蓋し是れ速記文字が在來の文字に比し聲音を有形に表示する点に於て完全の域に到達せるものと言ふべきであります。

第十四章　略綴法

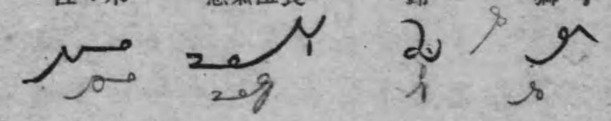
略綴法とは同一音字の相重疊する時又は或二三乃至五六音字の次に連綴さるべき二三乃至五六の音字が前語と同一語なる場合、之れを略綴するの方法であります、假へば父(ちち)は「ち」の音が相重疊せるものでありますから之れを連綴するに當り前の「チ」字のみを書きて後の「チ」を略綴するの方法であります、尤も斯かる場合には前節に述べたる縮字法なるものありて殆んど其の必要を認めない樣でありまするが中には縮字法よりも遙かに優れるものもありますから決して習字を等閑に附してはなりませぬ、是れを名付けて一音略綴法と言ふのであります。又「コレ〜」「思ひ〜」の如く二音以上の相重疊せる場合、前の部分だけを基礎文字にて連綴し後の部分を略綴するの方法を二音以上の略綴法と稱し、之れに使用する符號を略綴標といふのであります、而して兩標共に正變兩略か御座います、即ち次の如くである

一音略綴標		二音以上略綴標	
正略	變略	正略	變略
∪	∩	⌣	⌢

正略は母音字の「エ」に變体の「オ」を、變略は同じく變体の「オ」に「エ」を連綴したるが如きものでありまして一音略綴標は極めて小さく書き又二音以上の略綴標は疊呼の音數に從つて比較的大きく書くのであります、尙ほ濁音、長音、撥音(促音は略綴標に無關係)表示の方法は總て基礎文字に於けるものと同一でありまして該標は必らず(撥音の次に連なる時は矢張、離して書くのである)略綴すべき前字に接續して綴合するのであります、先づ順序として一音略綴標より說明せんに、加行に於ける「カ、ケ」及び「コ」は縮字法に依るを可と致しますが「キ」及び「ク」は略綴標を善しとする時がありますから能く考へて使ひ分けねばならぬ、又佐行は「セ」を除くの外他は總て場合に依りて頗る利便とする事があります就中「ササ」の如きは略綴を優れりと致します、次に應用例を示して解說致しませう。

應用例

佐々木　喪沮氣意　鈴　獅子



■佐々木、沮喪の如きにありては縮字の應用よりも簡易なるのみならず「サ」を正確に書き得る点に於て優秀なる事數等であります、又鈴の如きは單に相重疊せる場合には略綴を可と致しますが、進むの如く更らに他の文字の綴らるゝ時は縮字の應用を便と致します。多行に在りては「チ」及「テ」に對して略綴法を用ゐるの外他は總て縮字法の應用が良法であつて、奈行亦然りであります、されど波行、末行、也行、良行に在りては大いに異り單線文字に對するものを除くの外は總じて略綴標に依るを可と致します

應用例

平々凡々　日比谷公園　不服

耳を蔕さず　縷々　銘々

■注意　平々凡々の「ヘー」に對する略綴標並に銘々の「メー」に對する略綴標は共に長音の前字を略した譯であるから之れに長音符を附するの必要はないのである、而して凡々に於ける略綴も亦矢張前字の「ボン」を略したるものであるから其尾端を撥ねなくとも宜しいのであります。

例題

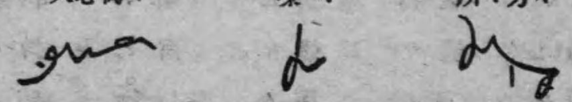
比々	硯箱	夫婦	頻々	萬般
麗れしく	蹇々	爛々	面々	紛々
年々	戀々	悶々	風物	喃々

■面々、年々等は一音に更らに撥音の添はりたるものでありますから已に二個の音ではありますが、元來撥音は或音に附隨して發せらるゝものでありますから特に一音略綴の部に掲げたのであります、偖て例題中風物の如く長音の次に發せらるべき聲音が長音ならざるものと雖も其音を同うする時は略綴して宜しいのであります、而して其方法は如何にすべきかといふに先づ「フ」を倍長大にしたるもの即ち「フー」を書きて略綴標を連ね其尾端に「ッ」を綴り、然る後略綴標に對して濁点を加へるのであります。

以上は直音文字に對するものにして其應用法は連綴さるべき文字前後の關係に依りて好惡を來すものであるから縮字と略綴とを巧みに應用せねばなりませぬけれども拗音文字に在りては「シュ」を除くの外同音字を縮字するの方法がありませぬから他は悉く略綴標を應用する事と致します。

應用例

人心惚々　　喋々　　所々方々



■注意　略綴標は人心の如く撥音の次に連なる時は總て正略を用ゐるのが機宜に適したるものであります、尤も更らに惚々の如き殆んど同一方向の文字を綴る場合には變略を以てした方が利便の樣でありますが實地は想像と反對の結果を齎らすものでありまして「ジン」の次に變略を用ゐて綴る不便は正略に「キョ」を連ぬる利便よりも其不便甚だしいのであります、されば幾分不便の方法を採りて應用例の如くしたのでありまして正略の次に「キョ」を綴るには其首端に極めて小なる「ウ」字形樣の勾曲を附し

て書く時は餘程不便を避くる事が出來ます、而して前にも說明したる所なるが單線文字を綴るには角度の最も少なき方向に從つて書くのを良法と致すのでありまして即ち略綴標は單線の二個集合せるものでありますから之れを書くには角度の少なき方向に從つて書かねばならぬ、今惚々の綴字に就て詳說せんに「キョ」を略綴する場合、正略を用ゆれば筆勢に依りて前字の「キョ」が曲線に變ずるか、略綴標が灣線に化するか二者其一が曲線又は灣線に變化して正確に書けぬのである、從つて字劃の正確を期し難き書き方は惡法と言はねばなりませぬ、今理論及び實地上より得たる經驗に基きまして各字に對する略綴標を區分しますれば「キャ●チャ●キャ●ヒュ●ミュ●リュ(變体)●ショ●チョ●ミョ●リョ」の重呼さるゝ時は正略を「シャ●ヒャ●ミャ●リャ●チュ●ニュ●キョ●ニョ●ヒョ●」は變略を、又「キュ」は正變兩略を其前字に從つて應用するを良法と致します。

例題

仲々　隆々　寥々　渺々　少將

ちゃ〜　洒々　妙々　凜々しき　汲々

二音以上の略綴標は前にも述べたる如く假へ

ば東西々々は三音の相重疊せるものでありますが故に「トーザイ」の一語(三音)を普通に直音文字を以て連綴し、後者の三音を悉く書くの煩を避け二音以上の略綴標を以て代表せしむるの方法であります、而して正變兩略は一音略綴標の應用と同一原理に基き略綴標の連綴さるべき音字の角度方向の如何に依つて用法を異にせねばならぬ、次に應用例の一班を示しませう。

應　用　例

例　題

呉々	各々	如何に々々	續々	冴々
再々	海外	嘖々	快々	樂々
謹聽々々	立派々々	年々	歲々	贊成々々

第十五章　速記文字に就て

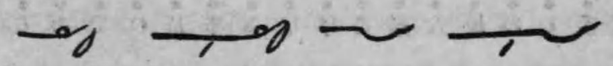
長音表示の方法に就きて再説せんに高等、總計、農工商等の如く二音乃至三音の相重なりて長聲の發せらるゝ場合、一々長音符を附するは甚だしく手數を要し何等か特種の方法を制定して之れが長聲音を一時に表示するの必要あるが如く思惟せらるゝものもあるであらうが前章にも述べたる如く濁音及長音は技の漸く進むに連れて或特殊のもの假へば當地と同地「ソーシテ」と「ソシテ」第何號と第何項等の如く推知判別に困難なるもの若しくは未知の地名又は耳新らしき難解の熟語等に對して應用するの外殆んど無用の長物たるの感をさへ起すに到るものである、是れ諸君が他日成業の曉、切實に感せらるべき所にして徒らに抽象的説明の必要はないのであります、されば之れが全部應用を必要とするのは初學時代のみでありまして完全なる速記者となりて能く其本能を發揮し得る時代に至らば自から應用の數を減少し來るものであります、而して三音以上長聲の連重

するものは寥々たるものでありますから一々添加するも運筆上大なる影響はありませぬ、若し長聲を含める語句の連ね發せらるゝ場合に際し各字に對して加点するの煩に堪へざる時は語中の一音に對して加点法を應用し置けば初學時代と雖も大抵は推知し得るものであります。

尙ほ大環より割出したる文字と中環より割出したる文字とは長短の差ありて區劃は整然と立つて居りますけれども急湍の如く舌端迸る口演を速記するに際しては筆勢に依りて長文字が短文字となり短文字が長文字となる事のあるのは決して珍しくはないのでありまして其多くは前後の關係に依りて推知し得るものでありますから決して不便は感じませぬが、權衡と均衡の如く意味を同うして其音を異にするもの又は清國の省名に於ける河南省と湖南省の如く前後の意味關係に依りて判讀する能はざるものがあります、尤も是等判別に困難なるものも一演說、若しくは一文章中に一二語位ならば記臆力の助けに依りて補充し得るゝ時は河南、湖南の如き五六回連ね發せらるゝ

如何に强健なる腦力を有し如何に豊富なる學力ありと雖も遂には其音の何れに屬せしかを痴疑し誤譯する事無きを保し難いのである、されば萬一の誤謬を防がんが爲め豫め是れが區別を劃然たらしめ置くの必要あるに依り次の如き特異の加点法を制定して大環より作成せる文字即ちケコセソラトネノヘホメモヨルロ各音字の下部に添加して中環文字と區別する事と致したのであります其一例を示せば次の如くである。

應用例



■注意　此大環文字表示の標は讃字の「オ」と同一形狀であつて必らず大環文字の下部に添加するものでありますが該標は普通平易の熟語、地名、人名等に對して一ゝ應用する時は却つて紛乱を來し不測の弊害を來すものであるから應用例に示せる如く特殊のものに對してのみ應用するを得策と致します。

以上二百餘頁に亘りて吾人が使用する言語を

遺憾無く書寫するに足る一切の文字即ち直音、拗音、濁音、長音、促音、撥音等の文字を講述し終れり、而して諸君も亦能く敎ゆる所に遵つて記臆せられたる事と信ずるのである、故に次章より愈々綴字法の講述に入り如何にせば書き善きか、如何にせば運筆を輕妙ならしめ得べきか、如何なる方法に依つて練習すれば速記の術に成功し得るかを講明し、然る後逐次熟語的速記文字の解說に移る事と致しませう、終りに臨んで前言を繰返して特に注意をせんと欲せば須く基礎を堅立するの最大緊要事なる研究を積むべきである。

第十六章　綴字と練習

第一　練習は如何にするか

如上十數章に亘つて講述せるものは即ち速記的假名文字の割出方法、文字の方向及び書方等に就て講述したに過ぎないのであります、されど唯だ速記文字のみを會得暗記せる丈にては速記の本能を充分に發揮する事は出來ないのであります、速記の要は吾人人類の言語を發音と同時に遺漏無く書き得るに至て始めて効果があるのである、之れが効果を充分に現はさんと欲せば是非共練習の力に俟ねばならぬのであります、而して速記文字にも亦吾々が現在使用しつゝある文字と齊しく以上の假名文字の外に誠に、今日、即ち、大臣、併しながら等の熟語を一字にて表示する所謂熟語的速記文字なるものがあるのでありますが、是等熟語的速記文字を法學、經濟學、理學、化學、工學、哲學、兵學、數學、敎育學、植物學、動物學、物理學、醫學、文學、其他の專門的術語及地名、人名等に對して悉く制定する時は無慮幾十萬の多きに上るか知れない、故に是等

に對しては最も多く人口に膾炙せるものに限り制定したのであります、從つて吾人の使用する言語の多くは速記的假名文字を以て描寫せねばならぬのであります、然り而して敏腕なる速記者たると否とは此假名的速記文字を巧妙に使用すると否とに依つて岐るゝのは勿論であります、彼の正宗、村正の名刀と雖も兒童の翫弄物となす時は何等の効用をも爲さず、鈍刀と雖も宮本武藏の樣な達人が使用すれば能く村正、正宗以上の効果を現はし得るが如く、將又正宗、村正が同じ鋼鐵にして能く鋼鐵を切斷し得る所以のものは一に鍛錬の原動力に依つて成れるに外ならざるが如く、速記の術則が如何に嶄新にして優秀なりと雖も練磨せなければ何等の効用をもなさんのであります、此「練磨」の二字こそ速記の術に熟達せんと欲するものの一瞬時も忘る可からざる最大格言であります。

若しも修學者にして此格言を忘却し練習を等閑に附するが如き事あらば速記文字其ものを知覺せるのみに止まり終生速記の利便に浴する事は出來ないのであります、現今我國に於て

速記の職に在る者即ち速記專門家にして複雜多劃なる舊式(新舊兩式比較對照の項參照)を使用しつゝある者過半數を占め居る狀態であるが敏腕の聞ある者のゝ少なからざる所以のものは唯だ多年練磨に練磨を重ねたる結果に外ならんのであります。故に練磨は能く複雜多劃をして簡單少劃ならしめ、不便を化して便ならしむるものでありますから諸君が一旦速記の學に志したる以上成功の域に達し、其利便に浴する迄は撓まざるの覺悟と決心とを以て練磨しなければならんのであります。

從來速記文字を敎ゆる者も矢張此練習といふ事を說いて居るのでありますが、皆悉く其練習材料として新聞、雜誌、小說講談等を採用し其文章に從つて練習すべしと敎え或は傍らにて他人に新聞、雜誌等の雜報を朗讀せしめ其音聲に從つて練習するを最善の方法なりと說いて居るのであります、尤も私とても如上の方法を以て惡法なりとは言ひませぬ、齊して其良方法なる事を認識して居るものであります、然れども直接敎授換言すれば通學生に對する練習敎材としてはいざ知らず通信敎授換言すれば獨學

生に對する練習教材として前二者の方法のみを教示するは迂愚の誘あるを免れませぬ、如何となれば新聞なり雜誌なりを見ながら速記文字の綴字を練習するといふ事は二重の勞苦を要する譯でありますから從つて夫れ丈時間と腦力とを消磨することが甚だしいのでありますされば練習する事、幾何ならずして忽ち怠惰の念を生じ。又傍らにて他人に朗讀せしめて練習する時は世人の多くが未だ速記學なるものは一定の文字を覺ゆれば如何に速かに發音する言語と雖も書寫し得るものと誤解して居るが故に意の儘に讀去り、若し朗讀發音程度の緩やかならん事を依賴すれば餘り緩漫に過ぎ少しく時を經れば再び素の急激なる發音となりて到底自已速記力の程度と隨伴せず遂には何等得る所無きに終るものである然かのみならず我國に於ける文体には口語体あり、漢文直譯体あり、演說体あり、落語体あり其他何々、一々枚擧に遑あらざる程であつて是等は皆な其文体に依りて綴字法を異にせなければならない、而して又專門的學術の用語所謂術語なるものを合算する時は幾億語の多きに上るか量り知る

事が出來ますまい、故に是等多數の言語に對する綴字を悉く何等澁滯する事なく發音と同時に書き得る迄に熟達するの期は或は畢世來ないかも知れませぬ、現に演說速記に於ける敏腕家として稱揚せられつゝある速記者が會々新聞記事的速記に從事して思はざる失敗を招き、嗤笑の種となりし實例の少なからざる所以のものも亦朗讀傍記方法に依り其練習資料を演說体にのみ採りし結果である、故に私は前二者の練習方法を最初より敎示するの不可なるを說くのでありますが乃ち之れが弊害を除去し、如何なる文体、如何なる綴字に遭遇するも支障なからしめんが爲め特殊の練習例題を設けて、短時日に最も有効に最も輕妙に運筆を自在ならしむるの方法を採つたのでありまして、而して該方法は直音及拗音の各字を必らず前後に二回綴合するの方法でありまして該綴字を幾個か併せ連綴すれば如何なる熟字と雖も悉く綴り得るの組織であります。其詳細は各字に付て述ぶる事と致しまして先づ茲には大体に付て說示する事と致します。

綴字例は總て最も書き良き方法のみを示した

たべ述して繰返し幾度か前にも申ますが、練習は如何にするかのであります、正變兩体を有するものは兩樣の綴字を練習し、徒らに進むをのみ欲せず順を逐ひ序に從つて漸次其歩を進め、一綴字必らず三百回以上の練磨を積み綴合の惡しきものに對しては幾百回にても自由自在に書き得る迄繰返々々練習を續くる事に努めなければなりませぬ。特に注意す、速記文字は總て單線又は單線に少しの技工を加へたる單線同樣の線に依り錯雜を來すの虞から、中に無き範圍に於いて制定したもの然るの結果で、あるは書惡しき文字の存するは當然の結果で、あるは二三書惡しき文字あるを見て嗟嘆喪失し、言葉に放ち惡方式なりと速斷して志氣を沮むものとは甚だしの誤れるを怠るが如きは慎まねばなりません。

直單線文字と直線文字の連綴又は「ハマナ」の如き單線文字を綴合する時、及單曲線文字の次に單直線文字を綴るには可成、角度の少なき方向に從ひ。

「ヲチ」の如く單線に小環又は橢圓環を附したる文字の次に綴合すべき文字は可成、其筆端の方向に依つて連綴するのを最良の方法と致します。然れども語句に依り或は正變兩體を有する文字を三行相綴合する場合には悉く如上の良方法にのみ從つて綴字する事の出來ない事がある、例へば魂(たましい)は正体の「タ」に「マ」を綴りたる上正体の「シ」を連ぬるは上述の良法に適合せる方法ではありますが「イ」を正体の「シ」に綴合するは不便此上もありませぬけれども「マ」に變体の「シ」を綴る時は筆力に依りて「マ」と「シ」との區劃を不分明ならしむるの嫌ひあるを以て字劃の正確を欲すれば從つて「マ」に正体の「シ」を接續し正体の「シ」に「イ」を綴る不便は之れを忍ばねばならぬ樣なものであつて良方法のみに依り綴字する能はざる事が多くあるのであります、故に書き惡しき綴字法に對しては一層の練習を積み以て該綴字を能く手指に親ましめねばなりませぬ。

以下練習例題を課して之れに第一、第二の番號を附し尙正變兩体を有する文字と文字との綴字に對しては其頭に○●○▪等の符標を附し

て其綴字方法の好惡を示す事と致しました而して。ロを正体符標・■を變体符標と稱するのであつて正体符標は正体文字を、變体符標は變体文字を代表せしむるものでありますが兩符標共二個を有して居ります、其表示方に付ては抽象的の説明よりも具体的の解説を爲した方が分り易いでありませうから次に表示用例を示して説明致します。

表　示　用　例

第二位	ロ	■	……「カ」に變体の「オ」を綴る方法は豫め練習し置くの必要あり。
第一位	ロ カ	ロ オ	……「カ」に「オ」の正体を應用綴合するものを良法とす。
第二位	■	■	……變体の「タ」に變体の「サ」を綴る方法は豫め練習し置くの必要あり。
第一位	ロ タ	ロ サ	……正体の「タ」に正体の「サ」を綴合するを可とす。
第二位	●	○	……變体の「ウ」に正体の「タ」を綴合する方法は第一位綴字法に次での良法である。
第一位	ロ ウ	■ タ	……「ウ」の正体に變体の「タ」を綴る方法は運筆上並字割の正確を期する上に於て最良の方法と致します。
第三位	■	ロ	……變体の「シ」に正体の「ヨ」を綴合するものは豫め練習を必要とす。
第二位	○	●	……正体の「シ」に變体の「ヨ」を綴るものは第一位綴字法に次ぐ良法である。
第二位	ロ シ	ロ ヨ	……正体の「シ」に正体の「ヨ」を綴るのを最良の方法と致します。

正變兩体を有せざる文字に對しては總て□○符標即ち正体符標を附する事とします、偖て各

符標の表示方法に付て説明せんに□(正体文字を代表する符標)■(變体文字を代表する符標)の最下部即ち假名文字のすぐ上部に附せるものは最も書き善き方法を示したもので更らに該符標上部にあるもの即ち假名文字の上部第二位に■ロ符標の存する時は豫め練習し置くの必要あるものを示したものであつて、上部第二位に●○符標の存するものは第一位符標に次で書き善き方法を示せるものである、即ち第一位符標が十のものならば七八分位の割合である、其他は上述の方法に從ひ第三位符標は第二位に又第四位符標は第三位符標に對する比較割合を示せるものであります。更らに之れを各用例に付て詳説しますれば「カ(ロ)オ(ロ)」と綴るには第一位に示せる方法即ちロロ符標は正体文字を代表せる符標でありますから「カ」に正体の「オ」を連綴するのを良法と致し、第二位に示せる方法即ち■符標は變体文字を代表する符標でありますから「カ」に變体の「オ」を綴る方法は豫め練習し置くの必要ある方法を示したのであつて、「タ(ロ)サ(ロ)」は「タ」の正体に「サ」の正体を連ぬるのを良法とし、變体の「タ」に變体の「サ」を綴る方法は練習を爲して萬一に

備ふるを要とするものを示したのであります。又「ウ▪タ」は「ウ」の正体に「タ」の變体を連綴するを最善の方法とし、變体の「ウ」に正体の「タ」を連綴するものは第一位即ち前者の方法に次いで善しとするものを示した例であります、尙ほ「シ▫ヨ」は正体の「シ」に正体の「ヨ」を連接するのが最も良法であつて、「シ」の正体に「ヨ」の變体を應用連綴するの方法は「ウタ」の場合と等しく幾分優秀の方法にして變体の「シ」に正体の「ヨ」を連ぬるものは豫め練習を要とするものを示した用例であります。尙ほ以上各符標を總括して換言すれば該符標は正變兩体を有する文字と文字との綴字上に於ける好惡を說明するに一々「タ」に「サ」を綴るには「タ」の正体に正体の「サ」を用ゐるを可とし變体の「タ」に變体の「サ」を綴るのは惡方法ではあるが前後の文字方向の如何に依つて應用せねばならぬ場合があるから豫め練習し置くの必要がある等の說述を爲すの煩を避けんが爲めに設けたるものにして▫。の符標は正体文字を▪▪符標は變体文字を代表せしむるものである、而して▫▪符標が假名文字のスグ上部にあるのは良方法を示せるものにして同符標が更ら

に其上部に附せられたる時は惡方法を示せる符標に變化するのであります、然れども該惡方法の綴字と雖も前後文字方向の如何に依り是非共應用せざる可からざる場合あるを以て豫め練磨し置くの必要あるものを示した符標になるのであります又。•符標は何れの時に於ても第一位即ち假名文字のスグ上部に附する事なく必らず第二位若しくは第三位に附して各當該正變兩体文字を代表せしめたるものであつて這は第一位の▪▫符標に次いで書善き方法を示したものである、故に修學者は各例題に付き符標の附しあるものは第一位▫▪符標並に第二位•。符標の示す所に從ひ、符標の附せざるもの即ち正變兩体を有せざるものは各其綴字法に從ひ自由自在に書き得る迄反覆練習の功を積み然る後、第二位▫▪符標の附しあるものは各其示す所に從つて豫め練磨せねばならぬ。即ち聽て來るべき一文章一談話、一講話の連綴活用を爲す準備として一日一題乃至三題に對し暫くの苦痛を忍んで二字若しくは單語の綴合練習を繼續せねばなりませぬ、若しも修學者にして斯かる單純なる反覆練習さへ爲

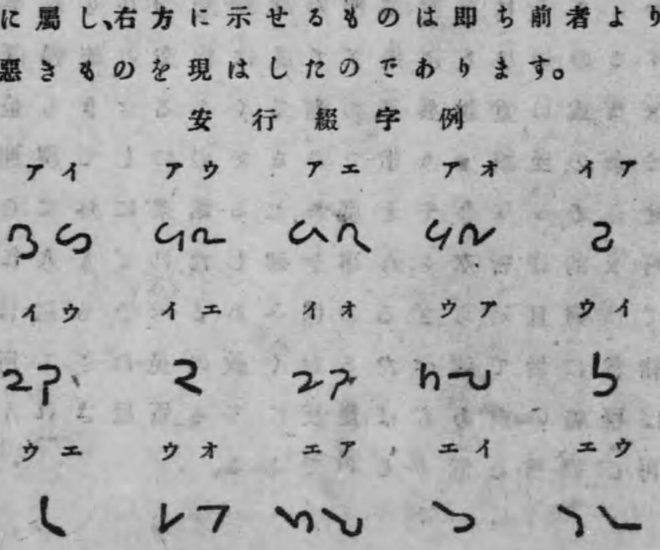
す事能はず、或は無味淡白なる練習に早くも怠惰の念を生じ或は單調なる反覆練習を屑とせずして徒らに前途を急ぐの餘り一文章、一演說の綴字を爲さんと欲するが如き野心を起し之れが準備を等閑に附するが如き事ありとせば开は思はざるの甚だしきものにして却つて熟達の期を遲延せしめ遂には廢學するの悲運に遭遇すべきは自明の理である、諸子よ思はずや、彼の間斷なき泉滴が能く岩石に洞空を作り得る偉大なる能力あるを、又思はずや、彼の堤を潰裂し或は人畜を死に至らしむるが如き恐るべき勢力を有する驚瀾怒濤と雖も其急激なるものは決して永續するものにあらざる事を、然り而して啻に速記學のみならず、總ての學術技藝なるものは驚瀾の夫れの如く急激なる進歩を爲すものに非らずして漸次自然の道程を經て其目的地に達するものなるが故に泉滴の夫れの如く間斷無く徐々として練磨を怠らざるものが終に目的地に到達して月桂冠を得るに至るのである、蓋し是れ成功する最大要訣でありませう。而して又何種の學術、技藝なるとに論なく無味淡白なりと言へ、有趣味なりと言ふは唯

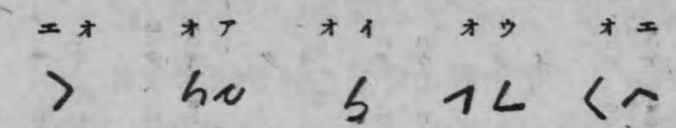
だ各人が或ものに對する精神狀態の如何に依りて岐るゝ問題であつて無趣味と思ひし時は即ち懶惰の念を生せし兆である、又之に反して有趣味なりと思念せし時は即ち未來の成功を意味するものである、故に諸子は速記の術に熟達し其利便に浴せんと欲して一旦斯學の門に入りたる以上何等か其間に面白味を發見し常に有趣味の念慮を以て學修練磨する事に努めねばなりませぬ。偖て以下漸次一二應用例を示し各例題に付き各文字綴合の好惡を說明致しませう。尙終りに豫め修學者の寬恕を請はざる可からざるは解說、講明の詳細懇切ならん事を欲するの切なるに過ぎて或は行文の流暢優麗を缺き或は重說疊解の點多くあるべきも是れ素と余の至誠より出でたるものにして誤解謬釋せらるゝなきやを虞れたる結果に外ならず、又可及的詳密ならん事を期したれども人に依りては尙且足らざるの憾みあるべきも這は既に緒言に於て述べたる如く數の免れざる所なれば疑義の点あらば幾度にても質疑されん事を再び繰言し置くものである。

第二　安行と安行の綴字法

速記文字成因圖中の小環より割出したる安行各字及び半母韻字「ワ」との綴字即ち小環より割出したる文字と文字との綴合は速記文字連綴上最も書惡いものである、併し之れは前にも述べたる通り已む可からざる所であるから、諸子は宜く練習の功を積んで此不便なる綴字をして、自在に書き得る樣に努めねばならぬ、而して綴字例は安行に限り特に好惡兩樣の方法を示したのであつて、左方に示せるものは書好きものに屬し、右方に示せるものは即ち前者よりも書惡きものを現はしたのであります。

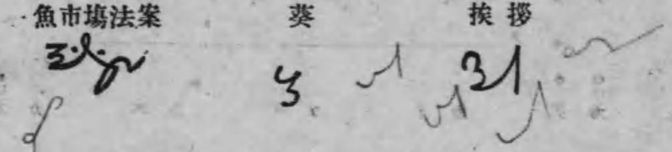
安行綴字例





連綴例

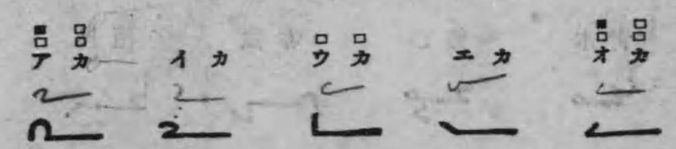
魚市場法案　葵　挨拶

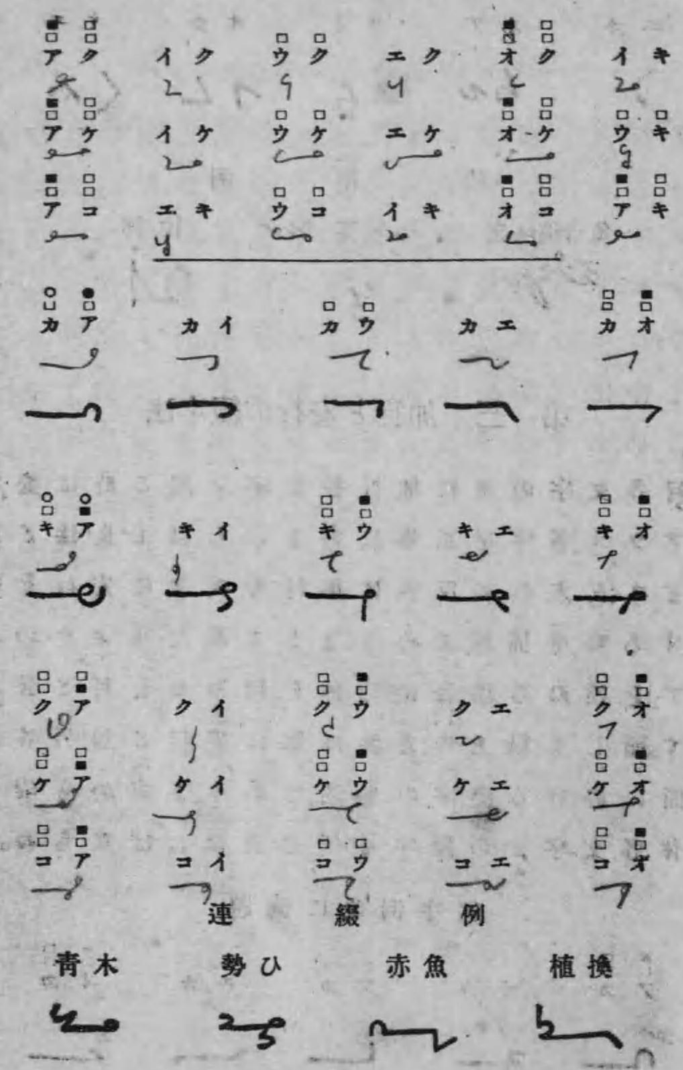


第三　加行と安行の綴字法

安行各文字の次に加行各文字を綴る時は安行の「アウオ」各字を正体に書くのを以て良法と致します、又之れと反對に加行の次ぎに安行を接續する時も同樣でありまして唯だキクケの次に「ア」を連ぬる場合に變体を用ゐるを可と致します。而して以上の方法は單に安行と加行各文字間に於ける綴字の良法でありますから安行變体各文字との綴字も併せ習はねばならぬ。

綴字例並に例題

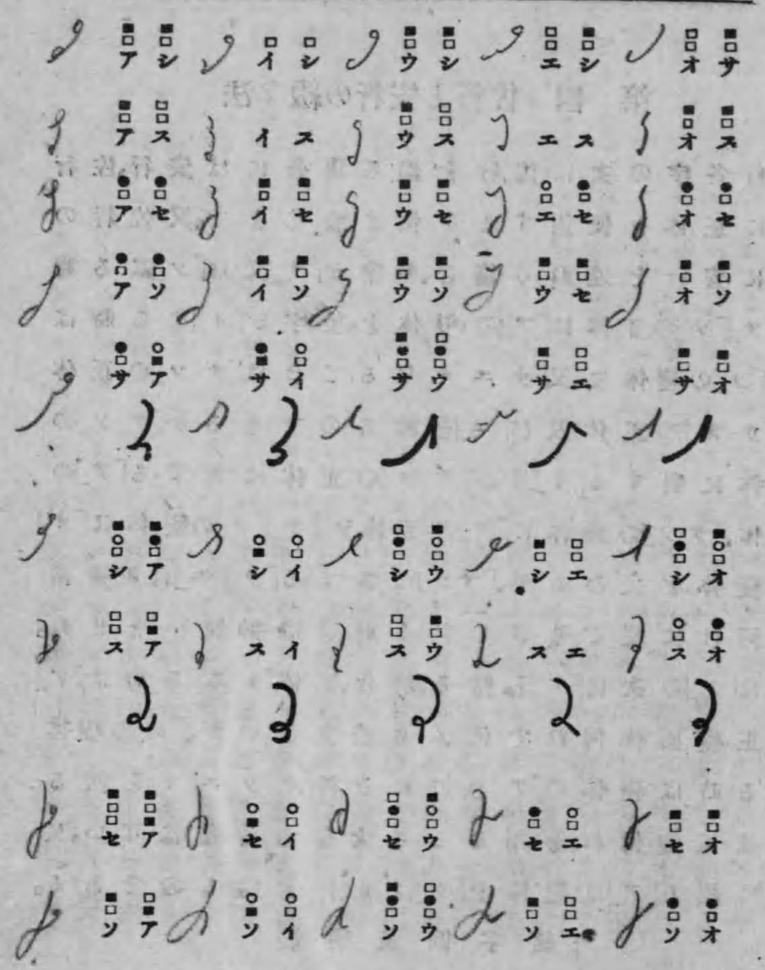




第四　佐行と安行の綴字法

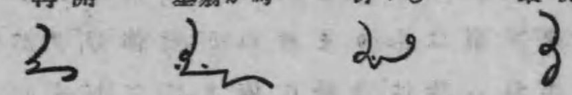
安行各字の次に佐行を綴る場合には安行、佐行共に正体を使用するを便と致します、又佐行の次に安行を連ぬる場合、前字が「サ」又は「ソ」なる時は「サ」「ソ」の正体に「ア」の變体を、後字が「イ」なる時は「サ」「ソ」の變体に、又「ウ エ オ」なるときは「サ ソ」の正体に「ウ オ」の正体及び「エ」を綴るのであるが「サ ソ」の變体に對する「イ」及び「サ ソ」の正体に對する「ア」の變体、「サ ソ」の變体に「ア」の正体を、「サ」「ソ」の變体に「オ」の變体を使ゐる外、「サ ソ」に對する「ウ」「エ」は正變兩体何れに綴るもさしたる好惡は御座いませぬ。尙ほ「シ」の次に「ア」を綴る場合、正体「シ」なる時は「ア」の正變兩体何れを使ふも差支ないが、「シ」の變体なる時は變体の「ア」を連ぬる外「イ ウ エ オ」を綴るには正變何れを用ゐるも大なる等差はない、又「ス」に綴る「ア」は變体を「ウ」は正体を綴るのである。

綴字例及例題



綴字例

再開　塞翁が馬　冴々し　最初



□「さい」は變体の「サ」に「イ」を綴合したるものを用ゐるも別格の「サイ」を應用するも速記力には大なる影響はおりませぬけれども「塞翁が馬」冴々し「初最」の如き場合は是非共別格の縮字の應用を便と致します、而して又「サイ」の應用に付て再度注意を促して置かねばならぬのは地名、人名其他餘り人口に膾炙せざる熟語の場合例へば「齋藤」の如きにありては別格の縮字「サイ」を用ゐる時は「首藤」とも讀み得るを以て往々誤謬を來すの虞れがありますから必らず變体の「サ」に「イ」を綴合して書く事に留意せねばならぬ。

尙ほ正變兩体文字に付き一言注意を加ふるならば正体文字は變体文字よりも優秀なのでありますから少し位の不便ならば正体を應用する方が得策であります。

例題

最高顧問　財政窮乏　在職　最終
採掘　齋戒沐浴　紗綾　在任

■注意　前掲中「紗綾」は變体の「サ」に正体の「ア」を綴りたる後正体の「ャ」を連ぬるも運筆上少しも滞滯を來す事はありませぬが、變体の「サ」に正体の「ア」を連ぬる時は筆勢に依りて「ア」が「イ」に變ずる嫌ひがありますから斯かる場合には正体「サ」に變体の「ア」を綴りたる後、變体の「ャ」を連ねた方が得策であります。

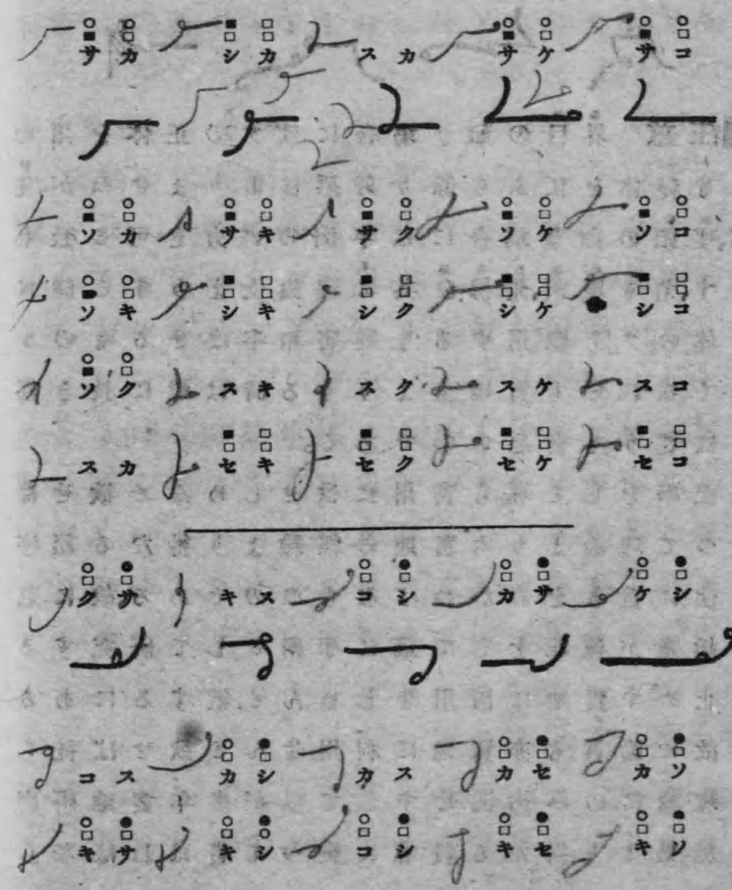
第五　佐行と加行の綴字法

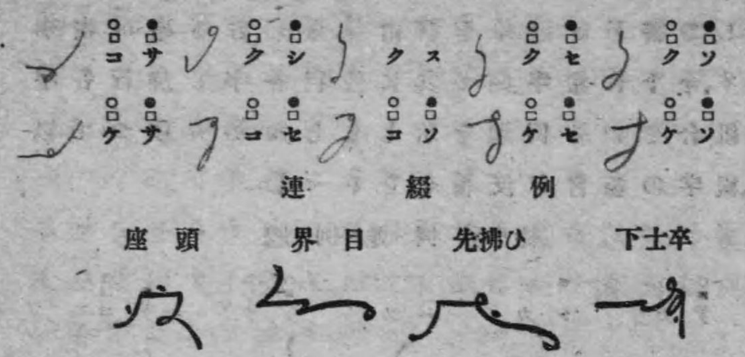
佐行各字の次に加行各字を綴合するには正變何れを應用するも運筆上に大なる差異は御座いませぬが、前に注意せしが如く正体の佐行各字に加行各字を綴合する方幾分優つて居る事は言ふ迄もありませぬ、就中變体の「シ」に加行各字を連綴する時は「シ」が「ス」と同一文字になる事がありますから能く注意せねばならぬ。

又加行各字の次に佐行各字を連綴する場合も前同樣正体文字の應用を可とするのは勿論であるが「カ」「コ」等の單線文字に正体の佐行を綴るは運筆上頗る不便を感ずるものであるから斯かる場合には「カ」「コ」の止筆點に佐行各字の起筆點を綴合する際佐行各字の起筆點を少しく勾

曲して書けば運筆を自由ならしむる事が出來ます、今下に綴字例と共に佐行各字と加行各字を組合せたる例題を示しましたから依つて以て、綴字の練習を反覆せらるべし。

綴字例並例題





■注意　界目の如き場合には「サ」の正体を用ゐるも變体を使ふも餘り好惡はありませぬが、先拂、座頭の如き場合には字例の書方を可と致します、尤も座頭、先拂ひ共に理論上よりする時は變体の「サ」を應用するも利害相半ばせるものゝ如くなれども實地上よりする時は縱に長き綴字はどうも書惡いのである。

速記學をして專ら實用に供せしめんと欲せば從つて理論よりも實地の經驗より得たる綴字方法に重きを置かねばならぬのである、故に私の趣意が速記をして單に學術として研究するに止めず實地に活用せしめんと欲するにあるが故に諸君も亦實地に利用せんと欲せば徒らに理論にのみ拘泥せずして私が多年實地研磨の結果より得たる敎導に從つて貰はねばならぬ、以下總て三四の應用例を示したる後例題を課する事と致しますから連綴上並に運筆上忍ぶ可からざる不便あらざる限り可成、横に連綴する事に注意し應用練磨して貰いたいのであります、而して以下例題の頭に□印の附したるものは訓讀すべきものを示したのであります。

例題

俄然	華族	佳節	さかしま	酒代
策源地	先立ち	鎖國	叫ぶ	下札（サゲフダ）

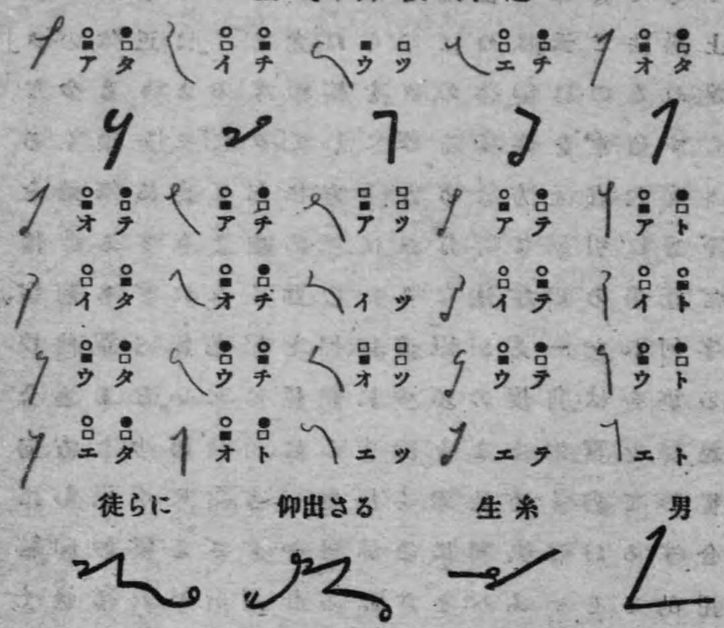
■注意　上掲中「俄然」は「ガ」に正變何れの「せん」を用ゐるも運筆上の好惡はありませぬが華族は「カ」に變体の「ソ」を用ゐて「ク」を綴り、佳節は「カ」に正体の「セ」を用ゐて「ツ」を連るのが得策である、又「さかしま」は「サ」の變体に「カ」及び正体の「シ」を連綴するのであります、尙ほ酒代は「サ」の正体に「カ」を「カ」に別格の「タイ」を綴り、策源地は變格の「サク」に「ゲン」を接續し、下札は正体の「サ」を用ゐて「ケフ」と書き正体の「タ」を連續するので御座います。

第六　多行と安行の綴字法

安行各字の次に多行各字を連綴する場合、(ア)が前字なる時は變体の「ア」に正体の多行各字を綴るか又は正体の「ア」に變体の多行各字を連ぬるも共に良法であります、「イ」が前字なる時は變体の多行各字を用ゐ、又前字が(ウ)なる場合、變体の「ウ」なる時は正体の多行各字を用ゐ、正体なれば變体の多行各字を用ゐるのである、「エ」なる時は正体多行各字を應用するのでありて、「オ」が前字なる場合、變体の「オ」なる時は正体の多行各字を、正体なる時は變体の多行各字を使用するのであります、而してッの前に綴るべき「ア」「ウ」及び「オ」は共に變体を用ゐるのを以て良法と致します。然れども綴字法としては最良の方法なりと雖も前段屢々述べ來れる如く數語連綴の場合は必らずしも此良法にのみ依る能はざる事あれば豫め他の綴字法に依つて練習し置くの必要がある假へば(到る)の如きにありては(イ)の次に變体の「タ」を連ぬる時は「タ」に「ル」を綴る場合、急速に書けば「タ」は筆勢に依りて正体の「ヤ」と同様の斜曲線となり、之れが正確を期すれば自然の結

果として運筆の澁滯を來す事となるを以て綴字上惡法と云はねばならぬ、尤も「イ」に正体の「タ」を連ぬるのは變体の「タ」を接續するよりも少なからず留意を要する譯にして「タ」に「ル」を續くるにも亦た右上方より左下方に向て走る筆端を右下方に引返す譯なれば理論上よりする時は甚だ迂愚の綴字法なるかの如くなれども前字、後字何れか一方が單直線(但し單曲線と單曲線との場合は角度の多少に關係せない)なる場合の連綴を實地上より論ずるに、角度の少き方向に從つて書く方法即ち反對の方向に引返して綴合する時は其間に言ふ可からざる靈妙(神祕作用的ともいふべきか)なる作用行はれて快く筆を走らする事が出來るのであります、是理論と實地の相異せる點である、斯如く全體の上より考査する時は「タ」の變体に「ル」を連ぬるものよりも「イ」に正体の「タ」を綴る方幾分優れて居るから後者の方法を以て良法とせねばならぬのである、斯かる綴字上の關係は決して珍らしくないのでありますから、理論上惡法なりと雖も練習を忽緒に附してはなりませぬ。

綴字例及例題

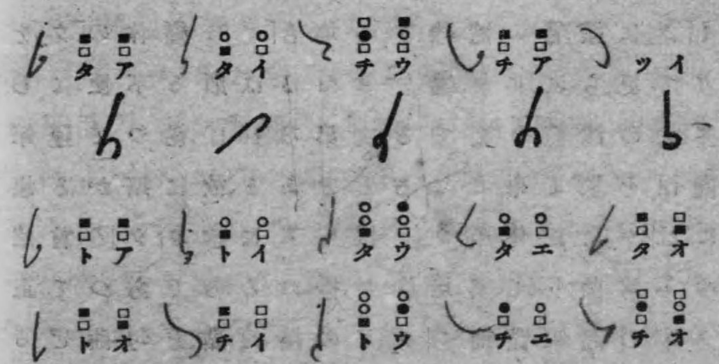


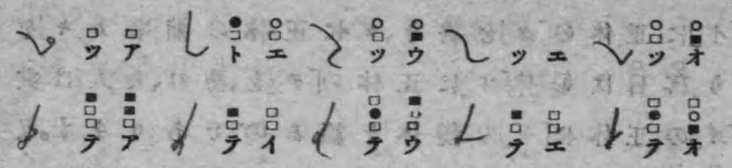
御歌會　内海　歌袋　鬱物　板垣
閲歴　穏やか　落目　訪れ　大人

注意　内海は(ウ)の變体に(チ)の正体を、「チ」に「ウ」の正体を書きたる後「ミ」を綴るのでありまして、歌袋は「ウ」の正体に「タ」の變体を、「タ」に「フクロ」と連綴するのであります、鬱物は「ウ」の變体に「ッ」を接續したる後「ボッ」を綴るも、正變の「ウ」に佐行の「ス」を書きたる後「ボッ」を連綴するも差したる好悪はありませぬが後者の方法が幾分優秀である。板垣

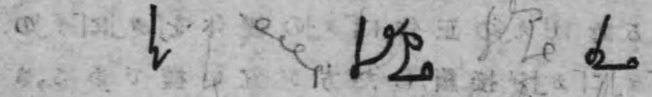
は「イ」に正体の「タ」を書き、タに正体の縮字「カキ」を綴り。落目は變体「オ」に正体の「チ」を、訪れ、大人は共に「オ」の正体に「ト」の變体を綴るのであります。又穏やかは「オ」の變体に「タ」の正体を、「タ」に正体の「ヤ」を、「ヤ」に「カ」を綴るのでありますが、之れ亦理論上よりする時は「オ」の正体に「タ」の變体を「タ」に「ヤ」の變体を「ヤ」に「カ」を接續した方が宜い樣である、されど實地にありては變体の「ヤ」に「カ」を連ぬる時は「カ」が「マ」と同一曲線文字となりて正確を期する事が出來ないから悪法と言はねばならぬ、而して前者の方法は後者の方法よりも優秀ではあるけれども頗る書悪い綴字であるが斯かる特殊のものに對しては唯だ練習の力に待つより外に途はないのであります。

綴字例及例題





通運　對清政策　地域



■注意　多行各字の次に安行各字の連綴さるる場合は正体多行の應用を得策と致します今各字の關係に付き再説しまするならば正体「チト」の次に接する「ア」は正体を、「ウ」は變体を、「オ」は變体を連ね、「チテ」の次に接續すべき「ア」は正体を「ウ」も正体を「オ」は正變何れを用ゐるも差支はない。又「ッ」に連るには「ア」の正体を「ウオ」は共に變体の活用を以て良法と致しますが應用例中通運の如く「ウ」に撥音の隨伴する場合「ッ」に變体の「ウ」を綴りて更らに其尾端を撥ぬるは頗る不便にして多大の注意を要する次第なれば從つて運筆の圓滑を缺く事となるのである、故に斯かる場合には「ッ」に正体の「ウ」を接するに當り「ウ」の首端を少し勾曲して其尾端を撥ぬるのであつて正体「ウ」字の起筆點即ち「ッ」との接續點を勾曲せる

手數は撥音表示の輕快に依つて充分補ふ事が出來ます。

而して「タ」の變体に「イ」を續くる時は用例の如く直ちに「タ」の筆端を引返して「タイ」となすか又は別格の縮字「タイ」を用ゐるもの共に良法である、然れども之れ亦前述せる各綴字法と同樣變体多行各字に安行各字の連綴を必要とする場合があるから豫め充分練習の功を積んで運筆を自由ならしめ置くの必要がある、即ち變体「タト」の次に綴る「ア」は變体を、又「ウオ」は共に正体を用ゆるのであつて變体「チテ」に接する「ア」は變体を、「ウ」及「オ」は共に正變兩体何れを使用するも宜しいのであります。

例題

大惡　大意　大雨　駄馬　絶ゑず
絶間　大慾　大部　態度　大膽

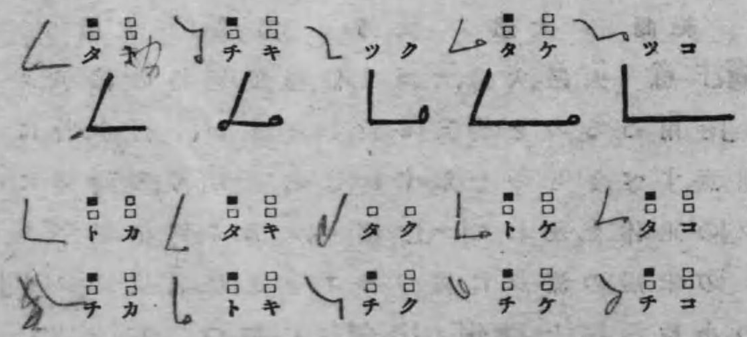
■注意　大惡、大意、大雨其他總て別格の縮字「タイ」を用ゐるのを得策と致しますが、上掲中特に注意すべきものを擧ぐれば駄馬は「ダ」の變体に「ウ」の正体を連ねて「マ」を綴り、大部は別格綴字「タイ」の筆端の流れに從つてフを連ね、態度は「タイ」の小環筆端を變体「オ」の角度に從つて右上方に

書上げ、更らに其筆端を相當の點より左下方に引返して正格第五段の縮字即ち「ト」の縮字を縮綴するのである、又大膽は「タイ」の筆端を上方より下方に廻して第一段の縮字即ち「タ」の縮字を作り其筆端を撥ねて撥音を表示するのであります。

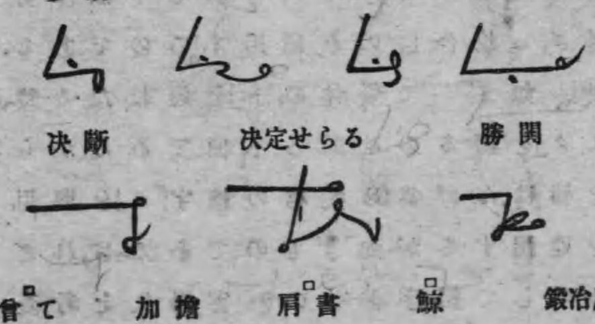
第七　多行と加行の綴字法

多行各字に加行各字を連綴する場合は多行各字が前字なると後字なるとを問はず、正体文字を以てするを良法と致します併しながら之れ亦變体多行各字と加行各字との綴合練習を怠ろ可からざるは前述のものと同様であります、今次に其應用例と共に例題を掲示致しませう。

綴字例及例題



連綴例並例題



喝采	家督	北風	靴墨	宮内省
血脈	蹴飛	蹴手繰	誇大	遅刻

注意　上掲中勝関は「カ」に正体の「チ」を書き、「チ」の下部に附せられたる小環筆端を母韻字變体「オ」の方向に從つて右上方に書上げ相當の所より下方に引返して「ト」の縮字を作り其筆端にキの首端を綴合するのである、鍛冶屋は「カ」に正体の「ヂ」を、「ヂ」に「ヤ」の正体を續け喝采は別格縮字の「サイ」を以て「カ」を切斷するが如く交叉して「カ」と「サイ」との間に促音の存する事を表示するのである、家督は「カ」に正体のトを書きて「ク」を接續するのでありますが、修學者中には「カ」に變格の縮字「トク」を應用せんと欲するものもありませうが正格、變格、別格三樣の縮字なるものは補助文字でありまして其應用範圍は即ち是等縮字の活用を利益なりとする場合若しくは筆勢上已むを得ざる場合にのみ應用するのである、假へば、「絲車」の如く「イ」に變体の「ト」を連ねたる時、變体の「ト」に「ク」を綴るのは頗る不便であるから其不自由を補はんが爲め變格の縮字「ク」を應用して「ルマ」を連綴するが如きものである。されども或は說を爲して綴字全体の利害得失を考査し少

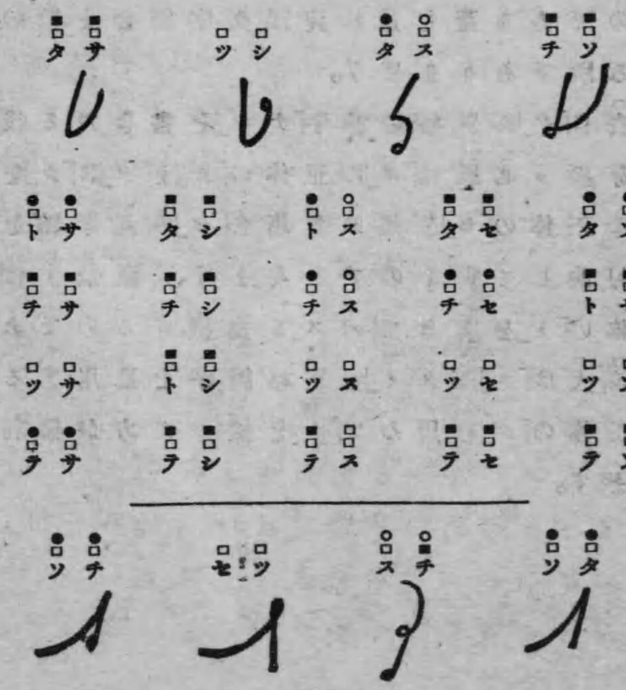
しの不便を忍んで「イ」に正体の「ト」を書くときは變格の縮字は無用の長物たるに過ぎずと言はるゝものもあるでありませうが是れ實地上の經驗を有せざる愚者の囈語といふの外はありませぬ、如何となれば早急の場合に際して綴字全体を考究するが如き事は到底夢想だに及ばざる所であつて自然の筆勢として後字は前字に對して書善き方向に從つて正變兩体を書き分け第三の文字を綴るに頗る惡しき事が往々あるのである蓋し是れ速記文字綴合上數の免れざる所でありませう。

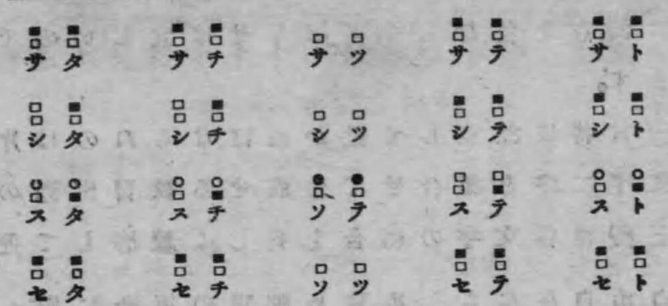
宮内省は「ク」に別格の縮字「ナイ」を書きたる後「ショー」を綴り北風は「キ」に正体の「タ」を「タ」に「カ」を綴り、「カ」に正体の「セ」を連ぬる場合「セ」の起筆點を少しく勾曲して書くのであります、又蹴飛すは「ケ」に變体の「ト」を書きて「バス」と連綴するのである。尙ほ誇大は「コ」に「タイ」の別格縮字を應用するよりも正体の「タ」を用ゐて「イ」を綴つた方が便利であります。

第八　多行と佐行の綴字法

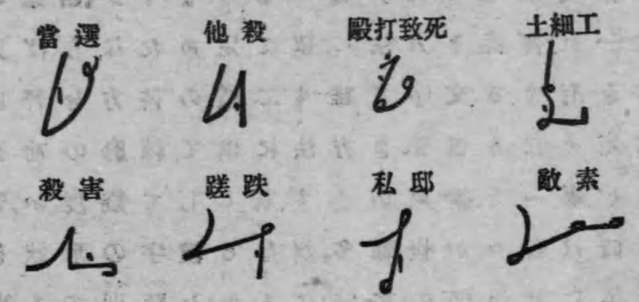
多行各字が前字にして佐行各字が後字なる時は兩行共正体文字を用ゐ。佐行各字が前字にして多行各字が後字なる時も亦同様兩行共正体の活用を以て最良の方法と致します。併しながら之れ亦豫め變体と變体との練習を怠つてはなりませぬ。

綴字例並例題





連綴例並例題



通俗　確かに　蛇足　知識　治水
通信　鐵板　鐵柵　鐵道　手探

■注意　通俗、蛇足共に變格の「ゾク」「ソク」を用ゐ、確かには正体の「タ」及「シ」を書きて「カニ」を連綴し、知識は「チシ」共正体を用ゐて「キ」を綴り治水は正体の「チ」に「スイ」を接續するのである、又鐵板及び鐵道は共に變体の「テ」に「ッ」を連綴して應用するを可と致します、手探りは正体の「テ」に「サク」の變格縮字を活用して「リ」を連ねたる後縮綴したる

「ク」に濁点を附加して「グ」となせば宜しいのであります。

尚一言特に注意して置かねばならぬのは片假名文字二字を組合せて作成せる練習例題の時は正變兩体文字の綴合を齊しく練磨して運筆を自由自在ならしめ豫め咄嗟の場合に備へ置くの緊要事なるは勿論でありますが、熟語の綴字は一旦書善き方法に依て定めたならば正變兩体を有する文字と雖も二樣の書方を習はず最初定めたる書善き方法に依て練磨の功を積むのが專一で御座います、斯くして幾度か習練する時は吾々が複雜多劃なる漢字の形狀を見て直ちに其の何の文字なるかを甄別(クンベツ)する事が出來ると同じく自然其熟語の綴字を一目して識別し得るの利益があります。

第九　奈行と安行の綴字法

奈行各字が前字にして安行各字の後字なる時は「アウ」の變体を活用するの外他は總て正体の應用を良しと致します。之れに反し安行各字が前字なる時は「ア」と「ウ」とは變体を用ゐ「オ」も亦變体の應用を善しと致しますが正体を使用する

も運筆上澁滯を來すが如き事はありませぬ。

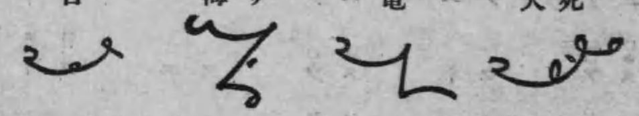
綴字例及例題

■注意「ナ」に「イ」を連ぬるには「ナ」の筆端を應用

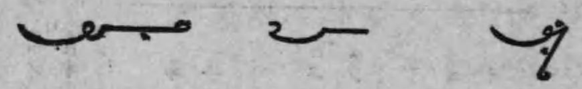
例の如く直廻(スグ マハ)して接續の線を「ナ」と「イ」とに活用し又「イ」を「ニ ネ ヌ」等に綴る時には小環若しくは楕圓環の筆端を少しく勾曲したる儘「イ」を連ぬれば宜しい、尙ほ「イ」の次に綴る奈行各字は最も書惡しくして能く活用せらる綴字であるから充分指手に親ましめ置くの必要がある。

連綴例並例題

古　侮り　電　犬死



値上げ　田舎　二王立



二王門　昼　姉貴(アネキ)　嘶く　鰻(ウナギ)
頷(ウナヅ)く　榎木　鬼板　おのづと　內閣
荷揚げ　値打ち　寢牛　寢汗(ネアセ)　野遊び

■注意　上掲中二王門の場合は正体の「オ」を用ゐ、嘶くは「イ」に「ナ」を連ね次の「ナ」を縮字して「ク」を續け、鰻は變体の「ウ」に「ナ ギ」を綴り、たのづとは「オ」の變体に「ノ」を、「ノ」に「ッ」を書きて「ト」を縮綴するのである、又値打の「ウ」は正体を用ゐ寢牛の「ウ」は正体の活用を可と致します、尙ほ野遊びは「ノ」に變

体の「ア」をアに正体の「ソ」を「ソ」に「ビ」を連綴するのである。

第十　奈行と加行の綴字法

奈行、加行共に正變兩体の文字を有しませぬから唯だ前字の尾端と後字の尾端とを連綴し反覆練習すれば宜しいのである。

綴字例及例題

ナカ　ニキ　ヌク　ナケ

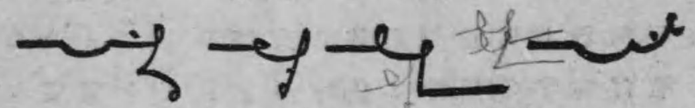
ノカ	ナカ	ナキ	ナク	ノコ	ナコ
ノキ	ニカ	ニキ	ニク	ニケ	ニコ
ノク	ヌカ	ヌキ	ヌク	ヌケ	ヌコ
ノケ	ネカ	ネキ	ネク	ネケ	ネコ

カヌ　キネ　クノ

カナ	カニ	カヌ	カネ	カノ	コナ
キナ	キニ	キヌ	キネ	キノ	コニ
コノ	クニ	クヌ	クネ	クノ	コヌ
ケナ	ケニ	ケヌ	ケネ	ケノ	コネ

名古屋甚句　投出す　泣聲

金鎖　絹地　國造　金澤



彼方　神奈川　實に　金撞堂　可能
幾内　氣長　砧　絹糸　國境
毛抜　眺め　嘆く　情　拭ふ

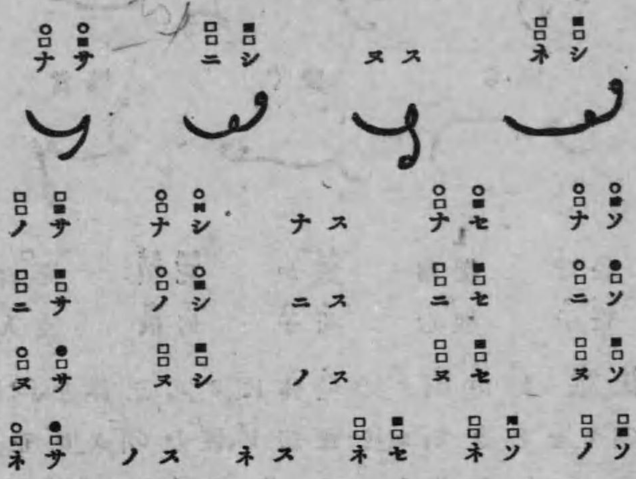
■注意　彼方、砧のタは共に正体を、金撞堂の「ト」も亦正体を用ゐ、絹糸の「ト」は變体を、情けの「サ」は變体を應用するのでありまして國境の「サ」は正体を以てするのを善と致します。

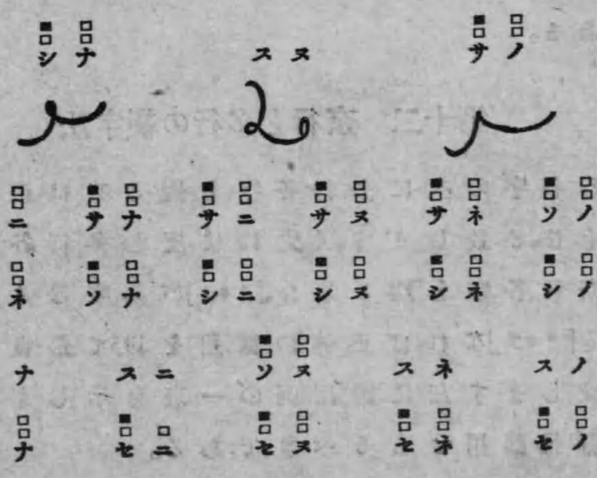
第十一　奈行と佐行の綴字法

奈行各字の次に佐行各字を綴る場合には正變何れを用ゐるも大なる等差はありませぬが圓環又は橢圓環を附したる「ニ●ト●ネ」に連るには佐行の正体を以て勝れと致します、而して「ナ●ノ」に佐行各字の正体を接續するには前掲應用例の如くに其首端即ち起筆点を少しく勾曲するのである、又佐行の次に奈行を連綴する場合には

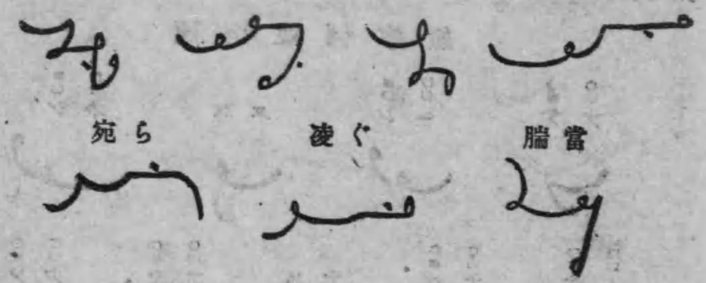
佐行正体を以てするを良法と致します、以下應用例と共に例題を掲げて練習用に供しませう。

綴字例並例題





連綴例並例題



佐野	指南	嬾か	死顔	忍ぶ
簀子	嫉む	茄子	何故	盜人

■注意　嬾かは「タ」の變体に「オ」の正体を、「オ」に正体の「ヤ」を書きて「カ」を連綴し、嫉むの「タ」は正体を何故の「セ」は變体を盜人の「ト」は正体を使ふるのである。

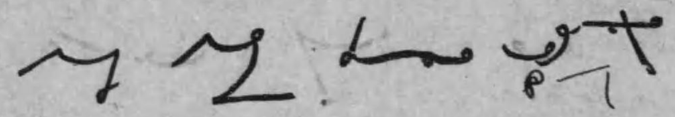
第十二　奈行と多行の綴字法

奈行各字の次に多行各字を綴る時は正体の應用を佳と致します、又之れに反し多行各字の次に奈行各字を綴る場合、「タ●ト」が前字なる時は變体を「チ●ラ」なれば正体の應用を以て最良の方法と致します左に應用例の一班を示しましたから類推應用せらるべきである。

綴字例並例題

連綴例並例題

店賃　谷底　因に　日進月歩



棚引　撫子　虹　二水　贋金
二度　喫驚　盗む　喉吭　立懶み
手綱　種板　樂み　繋ぐ　夙に

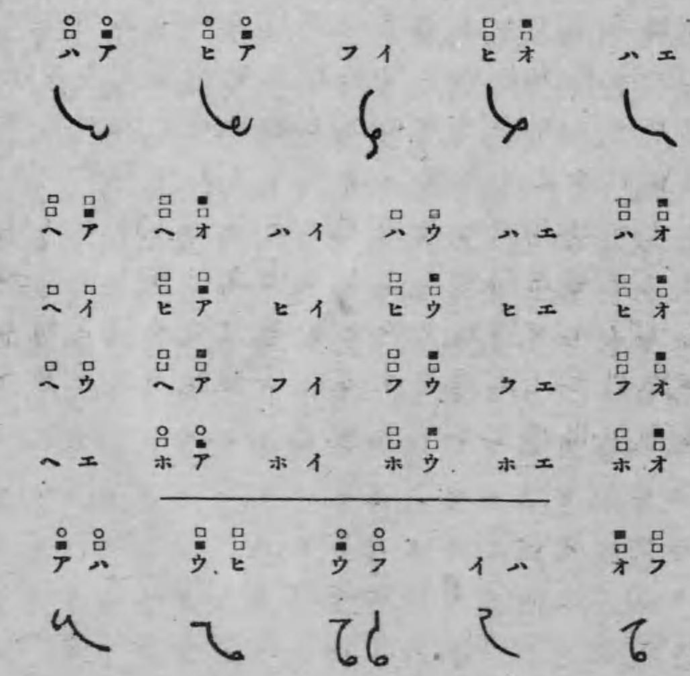
■注意　棚引の「タ」は變体を、撫子の「ヲ」は正体を、贋金は「セ」の正体を、二度喫驚の「ド」は變体を用ゐて「ビ」を連ね「ク」を「ヒ」の下部に併して促音を表示し「リ」を綴るのである、又立懶みは正体の「タ」に「チ」を縮綴して「ナ」を書き、「ナ」に變体の「ヤ」を、「ヤ」に「ミ」を連綴すれば宜しい。手綱は「タ」に「ツ」を縮綴して「ナ」を書き種板の「タ」は共に變体を用ゐ、樂むは「タ」の變体に「ノ」を「ノ」に變体の「シ」を、「シ」に「ム」を連續するを善しとす、夙には「ツ」に「ト」を縮綴して「ニ」を接續するのである、尙ほ喉吭喉輪等の如き場合に於ける「ト」に綴る「ワ」及「フ」は共に變体の「ト」に連ぬるを便と致しますが、「ノ」に綴る「ト」は正体の文字を以てするを可と致します、而して「ノ」と「ト」との連綴を便ならしめんと欲すれば「ト」と「ツ」又は「フ」と

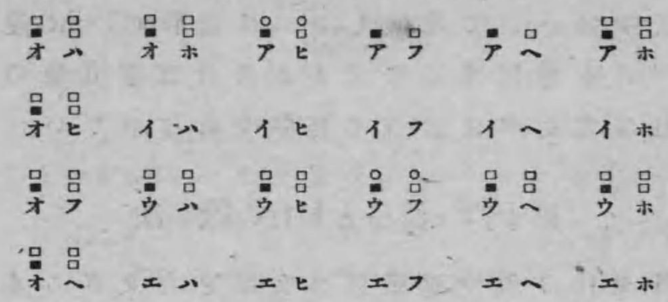
の接續が不便となり、「ト」と「フ」又は「ツ」との連接を善くせんと欲せば「ノ」と「ト」との連續惡しくして兩者其何れかを便ならしめ他の接續は少しの不便を忍んでも惡方法を用ゐねばならぬのである此場合理論上よりする時は「ノ」に變体の「ト」を連接して「フ」又は「ワ」を連ねた方が便なるものゝ如くでありますが實地上よりする時は「ノ」又は「ナ」等の單線文字に多行變体文字を綴るには是非其接續の場合に一旦筆を止むるが如くにして綴るのでありますが多行變体の文字は「ナ」又は「ノ」の惰力に依つて佐行文字に變化して、正確を期する事が至難である故に斯かる特殊の場合には少しく縱に長き綴字となるの嫌ひはありますけれども矢張「ノ」に正体の「ト」を綴りて「ワ」又は「フ」を連續するより外仕方がありませぬ而して「ノトブイ」は「フ」を比較的小さく書き而して「エ」を以て「イ」に代用する時は幾分不便を和らぐる事が出來ます。

第十三　波行と安行の綴字法

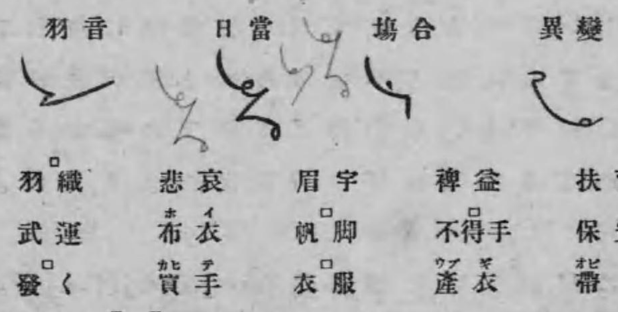
波行各字に對して安行各字を連ぬるには正体を用ゐ安行各字に對して波行各字を綴るには總て安行變体の應用を良法と致します。然れども書惡しき方法に依る練習を怠る時は熟語の綴字上不覺を取るの悔いある事を忘れてはなりませぬ。

綴字例並例題





連綴例並例題



羽音　日當　塲合　異變

羽織　悲哀　眉宇　裨益　扶育

武運　布衣（ホイ）　帆脚　不得手（ウヅテ）　保安

發（オビ）く　買手（カヒテ）　衣服　產衣（ウブギ）　帶

注意　悲哀は「塲合」と同じく別格の縮字を應用し眉宇は正体の「ウ」を活用するのであるが、斯くする時は兩者同一文字となりて誤りを來すの憂ありと懸念さるゝものもあるであらうが眉宇は「喜色眉宇に現る」等に用ゐ、悲哀は「悲哀なる境遇」等に使はれ共に名詞ではありますが自から其用所を異にして居りますから錯誤の憂れは全然ありませぬ、帆脚、保安の「ア」は共に正体の活用を可とす、又買手の「ヲ」は變体を不得手の

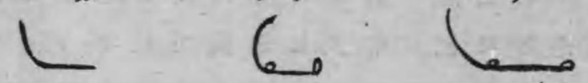
「ラ」も變体を以て連綴し、發(ハツ)く(ハク)は變体の「ア」に變格の「バク」を應用するのである尙ほ衣服其他の熟語は各其文字に從つて綴字すれば宜しい。

第十四　波行と加行の綴字法

波行加行の如く正變兩体文字を有せざるものは前字の止筆点と後字の起筆点とを連接すれば宜しいのでありますが波行各字に加行各字を綴合するは頗る不便でありますが是れ線狀文字の綴字上已むを得ざる所であるから諸子の熱心なる反覆練習の力に俟つより外ありませぬ。

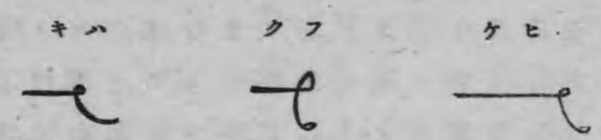
「ハ●ホ」に加行各字を綴る場合「ハ」及「ホ」を「バ」及「ポ」に書く時は餘程其不便を避くる事が出來ます而して兩者混用するも誤謬を來す事無きは吾人從來の經驗に依つて之れを確證致します。

綴字例並例題



ハカ　ハキ　ハク　ハケ　ハコ　ホカ
ヒカ　ヒキ　ヒク　ヒケ　ヒコ　ホキ

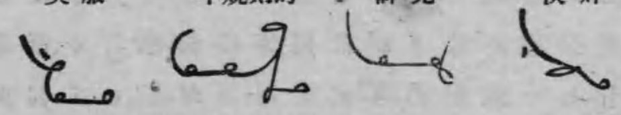
フカ　フキ　フク　フケ　フコ　ホケ
ヘカ　ヘキ　ヘク　ヘケ　ヘコ　ホコ



カハ　カヒ　カフ　カヘ　カホ　コハ
キハ　キヒ　キフ　キヘ　キホ　コヒ
クハ　クヒ　クフ　クヘ　クホ　コフ
ケハ　コホ　ケフ　ケヘ　ケホ　コヘ

綴字例並例題

美服　不規則的　僻見　僕婢



博學多識　葉書(ハガキ)　捗々(ハカハカ)しく　運(ロ)ぶ　引越(ヒキロシ)
比較的　日影(ヒカゲ)　蜚語　吹荒(フキスサ)む　覆審
各府縣　歩行　花瓶　氣風　欺騙

■注意　博學多識は別格縮字の「ハク」に正格縮字の「ガク」を連ねたる上正体の「タ」及び「シ」を書きて「キ」を接續し、葉書は「ハ」に正格縮字の「カキ」を、捗々しきは「ハ●カ」に正体の略綴標を用ゐて變体の「シ」に「キ」を連ね、引越は「ヒ」に「キ」を綴合したる上「キ」

に對して第五段の縮字即ち「コ」を連接して「シ」を續くるのである、又比較的は「ヒ」に正格の縮字「カク」を連ね「テ」の正体を用ゐて「キ」を綴合し、日影は「ヒ」に正格縮字の「カゲ」を、吹荒むは「フ●キ●ス」と連ね「ス」に對して第一段の縮字即ち「サ」を縮綴して「ム」を接續し覆審は「フ●ク」に正体「シ」を連ねて其尾端を撥ねるのである。尙ほ各府縣は「カ」に第二段の縮字を應用して「ク」となしたる後更らに「フ●ケ●ン」と連綴するのであります。而して應用例中の僕婢は別格の縮字「ホク」に對して波行第二段の縮字「ヒ」を縮綴する事も出來ますけれども速記の綴字も亦音樂に於ける音符が短音のみにして少しの抑揚もなき時は何等の興味なく、短音あり、長音あり、低聲あり、高聲ありて始めて其間に面白味を生づるが如く單線あり、圓線あり、楕圓線あり、直線あり、曲線ありて始めて綴字を便ならしむると同時に運筆をして輕妙快速ならしむる事が出來るのであつて大体に於て二個以上の圈環を連綴するの不利なるは既に縷述せる所である、されば三個以上の縮字應用即ち圈環三個以上連綴の不利なるは是を絕對に斷定し得るとするも方向角度の如何に依り二個迄

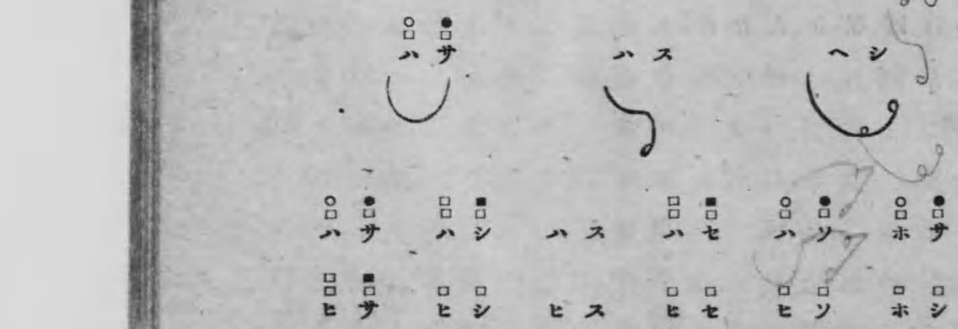
は極めて至便とする事があるから其應用方法の解釋を誤つてはなりませぬ。假へば化學、攻擊、激論の如き場合に縮綴を應用せずして普通文字を以てのみ綴るとせば攻擊の「キ」激論の「キ」は共に奈行第二段の「ニ」に變形するの嫌ひあるに依り縮綴の應用を可と致し又龍田の如き場合には縮字二個を應用するよりも正体の「タ」に對して「ツ」を縮綴し、第三次の「タ」は變体文字の應用を是とするが如きものである、而して是等綴字上に於ける好惡を敎導するは當に本講の目的ではありますけれども幾億を以て數ふる言語に對して一々指南するが如きは通信敎授に於てのみならず直接敎授と雖も不可能事に屬するものである、故に諸子は本講の敎ゆる一班に依りて他は總て其宜しきに從つて考究應用しなければなりませぬ。

第十五　波行と佐行の綴字法

波行各字に對して連綴すべき佐行各字は或特殊の場合を除くの外は波行各字の前に綴らるると後に連ねらるゝとに論無く正体の應用を以て良法と致し(ハ●フ∘ホに變体各文字を應用する特殊の場合を除く)變体の應用は之れを禁止して置きます。

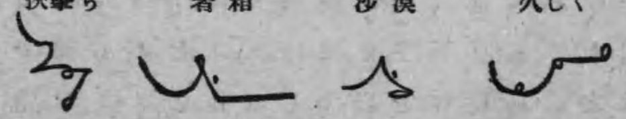
此兩行間の綴字に對しては變体應用の練習を爲し豫め有事の場合に備ふるの必要はありますけれども夫れよりは寧ろ正体の應用に向つて練磨に練磨を重ね後日一文章を連綴する準備をなすの肝要なる事を特に注意して置きます。

綴字例並例題



連綴例並例題

挾擊ち　箸箱　沙漠　久しく



破産	梯子	蓮田	塲末	土方
美人	不思議	不作	兵士	ペスト
捕捉	保全	細帶	捌き	寂しき
圖引具	素早く	是非	素朴	粗物

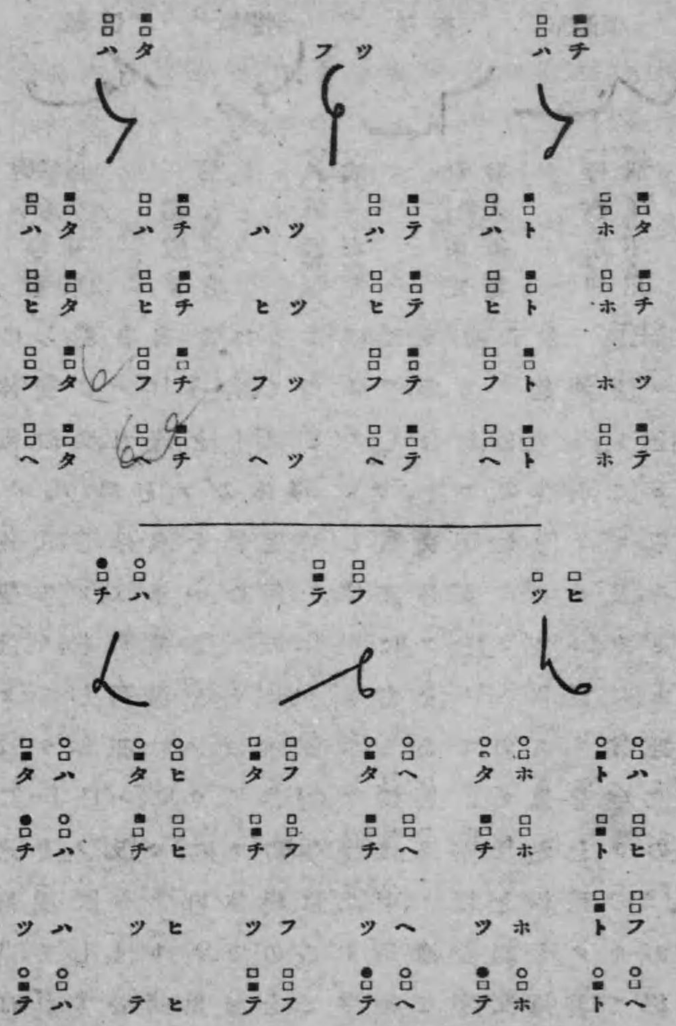
■注意　上掲中蓮田は「ハ●ス」に變体の「タ」を綴り。

不作は「フ」に別格縮字「サク」を綴るも「サ」の變体に「ク」を連綴するも大なる軒輊はありませぬ。ペストは「ペス」に變体の「ト」を接續し、細帯は「ホ」に正体の「ソ」及び正体の「オ」を連綴し、「オ」に「ビ」を接續する塲合其首端を少しく勾曲して綴合するのである、又圖引具は「ズ」に「ビ」を、「ヒ」に「キ」を「キ」に同行第三段の縮字「ク」を連續し、素早は「ス」に「バ」を「バ」に別格縮字の「ヤク」を連綴するを可とし其他は總て最良の綴字法に依つて連接すれば宜しい。

第十六　波行と多行の綴字法

波行各字と多行各字とを綴合する塲合波行各字が前字にして多行各字が後字なる時は總て多行正体各字の應用を可と致します、又多行が前字にして波行が後字なる時、「タ・ト」は總て變体を用ゐて波行各字を連ね、又「フ」を綴る前字の「チ・テ」は之れ亦變体を以てし其他の「チ・テ」は總て正体の應用を最良の方法と致します。然れども熟語の綴字に當つては如上説明以外の書方を必要とする事がありますから共に練習を怠つてはなりませぬ。

綴字例並例題



連綴例並例題

葉煙草　初秋　別働隊　田船

肌袴　發育　鳩杖　左　肘鐵砲
美德　人殺し　一筆　人違　普通學
不束　筆頭　別段　別殿　補塡
田畑　答電　禿筆　潰す　東北

■注意　肌袴は「ハ」に變体の「タ」を書き更らに「バカマ」を連綴するのであつて、鳩杖は「ハ」に變体の「ト」を「ト」に「ッ」を綴合したる後「イ」を連ね、又肘鐵砲は「ヒ」に正体の「チ」を、「チ」に變体の「テ」を綴り、「ボー」を以て「テ」を切斷交叉して促音を表示し、人殺しは「ト」及「シ」共に正体文字を用ゐ、一筆は「ヒ」に變体の「ト」を、「ト」に「フ」を「フ」に正体の「デ」を連綴し、人違ひは「ヒ」に正体の「ト」を書き「ト」に「チ」を應用して「カイ」を連接するのである、尙筆頭の「テ」は正体「チ」は變体文字を以てし、田畑は變体の「タ」に「ハ」を、「ハ」に正体のタを連ね禿筆は變体の「チ」に「ヒ」及「フ」を連ねて、「テ」の正体を綴り、東北は變体の「トー」に變格縮字の「ホク」を綴合應用するのでありまして其他は總て普通文字と縮字とを應用綴合すれば宜しいのである。

第十七　波行と奈行の綴字法

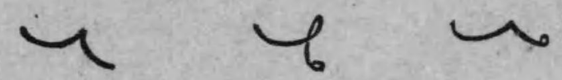
波行各字と奈行各字とを綴合するには其何れの行が前字なると後字なるとを問はず前字の尾端と後字の首端とを綴合すれば宜しいのである今下に應用例の一班と同時に例題を掲示して練習の用に供しませう。

綴字例並例題

ハナ　フヌ　ヒネ

ハナ	ハニ	ハヌ	ハネ	ハノ	ホナ
ヒナ	ヒニ	ヒヌ	ヒネ	ヒノ	ホニ
フナ	フニ	フヌ	フネ	フノ	ホヌ
ヘナ	ヘニ	ヘヌ	ヘネ	ヘノ	ホネ

ナハ　ヌフ　ノヒ

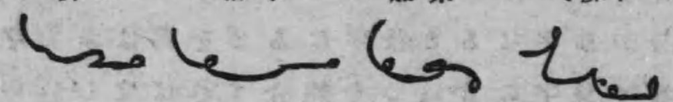


ナハ	ナヒ	ナフ	ナヘ	ナホ	ノハ
ニハ	ニヒ	ニフ	ニヘ	ニホ	ノヒ
ヌハ	ヌヒ	ヌフ	スヘ	ヌホ	ノフ

ネハ　ネヒ　ネフ　ネヘ　ネホ　ノ

連綴例並例題

鼻息　檜木　船乗　下靡く



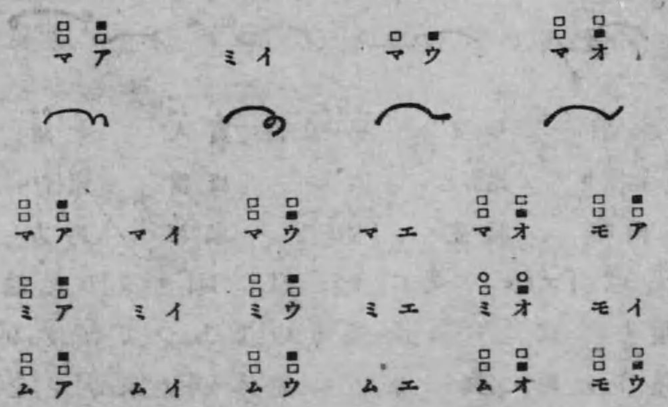
鼻紙　花火　埴輪　緋の袴　船底
船板　不能　不認可　へなぶり　紅革
北米　骨違ひ　臭はす　日本　奴僕

注意　上掲中船底は「フ●ナ」に變体の「ン」を書きて「コ」を連綴し、船板は「フ●ナ●イ」に變体の「タ」を連接するのである、又北米は變格縮字の「ホク」に「ベー」を、奴僕は「ヌ」に變格縮字の「ボク」を接續し、骨違ひは「ホ●ネ」に正体の「チ」を連ねて「カ●イ」を連綴するものであつて、臭はすは「ニ」に「オ」の變体を「オ」に「ワ」を「ワ」に「ス」を接續綴合するのであります。

第十八　末行と安行の綴字法

末行と安行とを綴合する塲合末行各字が前字にして安行各字が後字なる時、前字が「マ●モ」なれば「ア」は正体「ウ●オ」は變体を應用し、前字が「ミ●ム●メ」なれば「ア●ウ」は正体を「オ」は變体を活用綴字するのを可と致し、又之れに反し末行が後字にして安行が前字なる時の安行各字は總て正体文字の應用を最良の方法と致します、而して末行各字の前に綴合すべき「イ」は往々にして正体「ア」と同一形狀に變化する事がありますから能く注意して練習せねばならぬ、次に應用の一班を示しませう。

綴字例並例題



連綴例並例題

毎日　見上ぐ　無意識　戒め

毎回　毎度　眞一文字　實入　身請

見送り　見落し　無益　目當　雨押へ

雨傘　編笠　雨模樣　未だ　馬方

■注意　「マ●モ」の次に「イ」を綴には「マ●モ」の尾端を利用して直ちに「イ」を綴るのであつて毎度の「ド」は變体を用ゐ眞一文字は變体の「チ」及び「ジ」を應

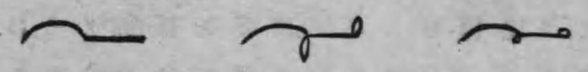
用して連綴し、身請の「ウ」は正体を、見送りの「オ」も亦正体を應用し、見落しの「オ」は變体を活用するのであります、又目當りは「メ」に變体の「ア」を、「ア」に正体の「タ」を、「タ」に「リ」を連綴し、雨押へは「ア●マ」に變体の「オ」を用ゐて變格縮字の「サィ」を連ね、雨傘及編笠の「サ」は正体を用ゐ、雨模樣は「ア●マ」の「マ」に同行第五段縮字の「モ」を下方に縮綴して正体の「ャ」を接續するのである。

第十九　末行と加行の綴字法

末行と加行とは其何れが前字なると後字なるとに論無く、前字の止筆点と後字の起筆点とを綴合すれば宜しいのでありますが單線文字と單劃文字の綴字即ち「マ●コ」と「カモ」との綴合は頗る書き惡しき綴字なれば、殊に能く練熟する事に努めねばならぬ。

綴字例並例題

マカ　ムク　ミキ



マカ　マキ　マク　マケ　マコ　モカ

ミカ　ミキ　ミク　ミケ　ミコ　モキ

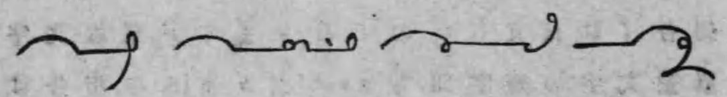
ムカ　ムキ　ムク　ムケ　ムコ　モク
メカ　メキ　メク　メケ　メコ　モケ

カミ　キミ　クマ

カマ　カミ　カム　カメ　カモ　コマ
キマ　キミ　キム　キメ　キモ　コミ
クマ　クミ　クム　クメ　クモ　コム
ケマ　ケミ　ケム　ケメ　ケモ　コメ

連綴例並例題

秣　捲上ぐ　見越　神様



間口　卷紙　幕内　負軍　未完
見返る　見事　無我無中　無限　無記名
惠み　鎌首　髪容（カミカタチ）　紙革　米麥

■注意　上掲中卷紙は「マ」に「キ」を連ねて「カ」を縮綴して「ミ」を綴合し幕内は變格縮字「マク」に變体の「ウ」を用ゐて「チ」の正体を連綴するのであるが、負軍の「サ」は正變兩体何れを應用するも些したる軒輊はない。又見返るの「ヘ」は「エ」の文字を以て

充當すべきではあるが「エ」に「ル」を連綴するは頗る不便であつて少しく急速に書寫する時は「カエル」三字間の區劃を色別し難く單に「カル」と變字するの嫌ひあるを免れませぬ、故に此場合に於ける「エ」は「イ」を以てするも誤りを來すの虞れは決してありませぬ、尙ほ髪容の「チ」は多行第二段縮字を應用するを善しと致しますが、米麥の場合に於ける「ム」は「メ」に末行第二段縮字を利用するも將た普通文字を以て綴るも速記力に等差はありませぬ。

第二十　末行と佐行の綴字法

末行各字に綴合する佐行各字は正体の應用を可とし、之れに反し末行各字の前に連綴すべき佐行各字は如何にすべきかといふに「サ」及「ソ」は變体、「シ」及「セ」は正体を活用して末行各字を連綴すれば運筆上頗る輕妙ではありますが之れと反對の綴字を必要とする場合に遭遇する事がありますから之れ亦練習を無視する樣な事があつてはなりませぬ。

綴字例並例題

マサ　マス　ムシ

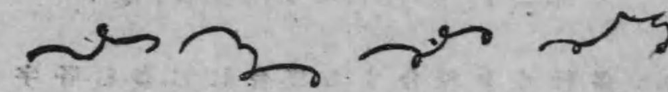
マ サ　マ シ　マ ス　マ セ　マ ソ　モ サ
ミ サ　ミ シ　ミ ス　ミ セ　ミ ソ　モ シ
ム サ　ム シ　ム ス　ム セ　ム ソ　モ ス
メ サ　メ シ　メ ス　メ セ　メ ソ　モ セ

サ ミ　シ メ　ス ム

サ マ　サ ミ　サ メ　サ モ　サ ソ　マ ミ
サ シ　サ シ　サ シ　シ モ　ソ シ　ミ ム
サ ス　サ ス　サ ス　モ ス　ソ ス　ム モ
セ マ　セ ミ　セ メ　セ モ　セ ソ　セ モ

連綴例並例題

呪禁　桝目　不見目　欝



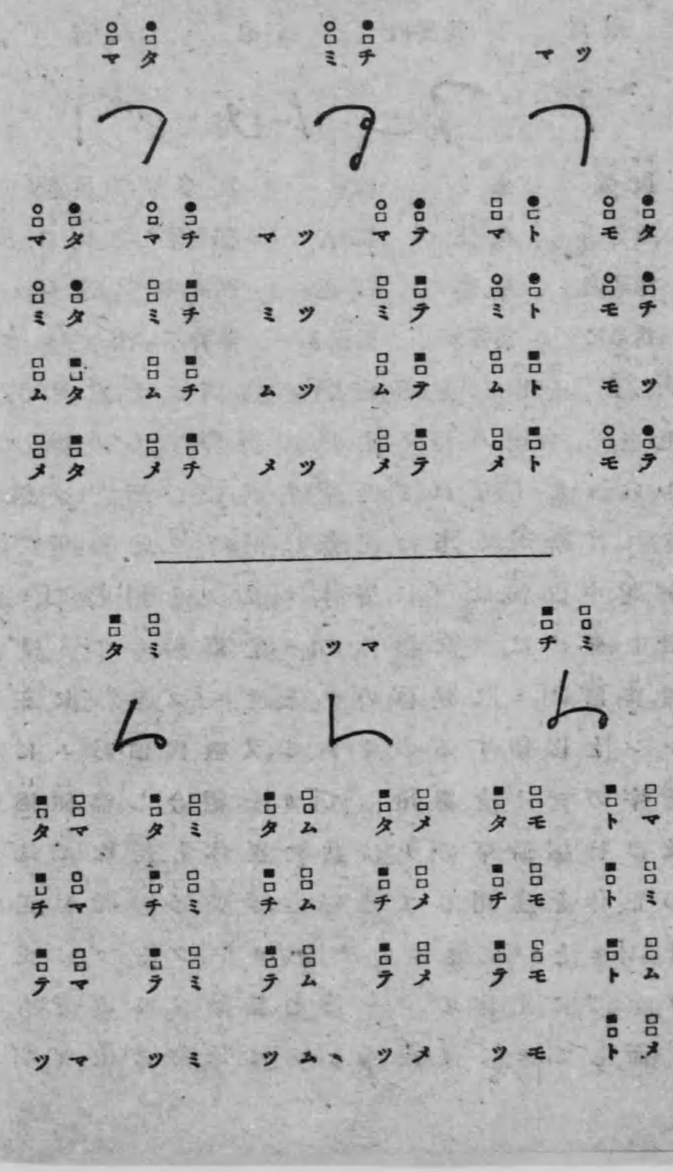
摩擦　眞面目　見定め　操　不見轉
鼷鼠　狢　虫眼鏡　娘　摸索
刺身　示す　諮問　墨染　背く

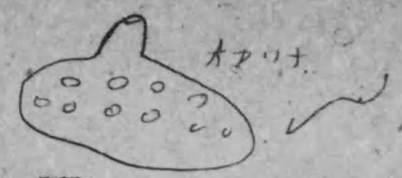
■注意　眞面目は「マ」に正体の「ジ」を用ゐて「メ」を連ね、不見轉は「テ」の變体を應用し其尾端を撥ねて鼻音を表示するのでありますが變体の尾端を撥ぬる時は間々其筆勢に依りて「セン」に變形する虞れがあるから特に注意を要します。又模索は「モ」に變格縮字の「サク」を綴り、鼷鼠は「ム」に正体の「サ」を連ね次のサは之れを正体に略綴して「ビ」を接續するのである、尙ほ刺身は正体のサに佐行第二段の縮字を應用して「ミ」を連續し、墨染は「ス●ミ」に變体の「ソ」を用ゐて「メ」を綴合するのである、又示す、諮問の「シ」は共に正体を、背くの「ソ」は變体の應用を以て可と致します。

第二十一　末行と多行の綴字法

末行と多行とを綴合する場合には多行各字が末行各字の前後何れに綴らるゝも多行は總て正体文字の應用を以て是と致します。而して又綴字の良法定義より論ずる時は末行に綴るべき多行は正体文字よりも變体文字の方、角度が少ない譯であるから變体の應用を以て良法と思惟せらるゝであらうが、前にも縷述せるが如く正体文字は變体文字よりも優秀のものでありまして、末行に正体の各行を應用綴合するも字劃を崩紛ならしむの憂ひなきは勿論運筆上何等の不便をも感せず彼此相對照して考査するに變体よりも正体の活用を以て幾分優れる点あるに依り如上の綴字法を以て良法なりと說いたのである、併しながら前後文字の關係上、上述と反對の綴字を非常に便とする場合、又は多少の不便を忍んでも綴字せざる可からざる場合に遭遇する事あるを以て惡方法なりとして綴字練習を等閑に附する事無き樣勉むべきは今更言ふを俟たんのである。

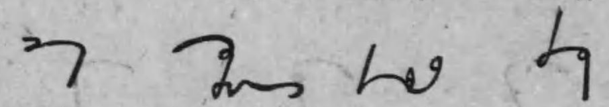
綴字例並例題





連綴例並例題●

未だ　道案内　玉串　綴密



復候　全く　睫　纏ひ　見違ひ

道普請　水杙　密告　無代價　徒口

無鐵砲　餅草　持越　持餘す　求む

爲めに　共稼ぎ　留置き　手持不沙汰

■注意　玉串は變格縮字「ク」に獨点を附せざれば「玉虫」とも讀み得るを以て誤釋するの嫌ひあるものゝ如くなれども兩者其使ひ所を全然異にすれば斯かる事は杞憂に過ぎませぬ。偖て上掲例題中復候は「マ」に變体「タ」及「ソ」を用ゐて「ロ」を連綴し、纏ひは「マ」に變体の「ト」を應用して「イ」を連ね、道普請は「ミ」に變体の「チ」を「チ」に「ブ」を、「ブ」に正体の「シ」を接續するのである、又無代價は「ム」に別格縮字の「ダイ」を應用して「カ」を綴合し無鐵砲の「テ」及び持越餅草の「チ」は共に正体を、持餘すは「テ」「ア」の正体を應用して連綴し、手持不沙汰は正体の「テ」に「モ」を、「モ」に變体の「チ」を、「チ」に「ブ」を「ブ」に正体の「サ」を、「サ」に正体の「タ」を連ね接續するのであります、而して「モ」に接續する「チ」は筆勢に依りて「シ」

に變形しますけれども這は「テモジ」と聞ゆる事もありますから少しも差支はありませぬ。

第二十二　末行と奈行の綴字法

末行と奈行とは兩行共に正變兩体文字を有せざれば唯だ前字の止筆点と後字の起筆点とを連綴すれば宜しい下に其應用の一班並に例題を示しませう。

綴字例並例題

マナ　ミヌ　マニ

マナ　マニ　マヌ　マネ　マノ　ミナ

ミニ　ミヌ　ミネ　ミノ　ムナ　ムニ

ムヌ　ムネ　ムノ　メナ　メニ　メヌ

メネ　メノ　モナ　モニ　モヌ　モネ

ネム　ナマ　ニモ

ナマ　ナミ　ナム　ナメ　ナモ　ニマ

ニミ　ニム　ニメ　ニモ　ヌマ　ヌミ

ヌム　ヌメ　ヌモ　ネマ　ネミ　ネム
ネナ　ネモ　ノマ　ノミ　ノム　ノメ
眞　娘　　組　　生意氣　　野豆

招く　磨滅　學ぶ　港　目拔き
水面　無能　棟上げ　物覺ね　物心
生魚　生覺ね　二枚板　眠る　呑込む

注意　應用例中組の「タ」を正体となせるに付ては少なからず疑ひを挾まるゝでありませうから特に説明致しませう、奈行の單劃文字即ち「ナ●ノ」と末行の單劃文字即ち「マ●モ」との綴字は速記文字綴合中最も輕快にて頗る圓轉滑脫のものでありますが、是等を三字以上連綴する時は餘り滑脫輕快に過ぎ却て筆勢を失するの慨がある故に「組」の場合に於ても「マナ」に「イ」を「イ」に變体の「ダ」を連綴する時は餘り滑脫に過ぎ却つて筆力を失し澁滯ならしむるの嫌ひあるを以て結局應用例に示せる如き綴字法を利便とするに至るのであります。

偖て例題中特殊のものに就て説明せんに物覺ねの「オ」は正体を生覺（ナマオボエ）の「オ」は變体を用ゐ而して

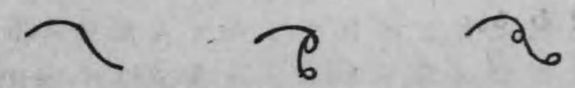
「オボエ」の「エ」は共に「イ」を假用するも誤謬を來しませぬ、生魚は「ナマ」に變体の「ウ」を用ゐて正体の「オ」を綴るを可と致します、又二枚板の場合には「イ」が二個相重疊するものであるから略綴法を應用すべきであるが小環より割出せる文字即ち「アイウエオワ」の文字は小圈又は点同樣のものであるから略綴法の應用よりも其音の疊呼に從つて二音重呼さるゝ時には二字、三音なれば三字を普通文字にて綴る方が得策である。

第二十三　末行と波行の綴字法

末行と波行の綴字も亦末行と奈行との場合に於けると同樣前字の尾端と後字の首端●を連綴練習すれば宜しいのであります。

綴字例並例題

マハ　ムフ　ミヒ



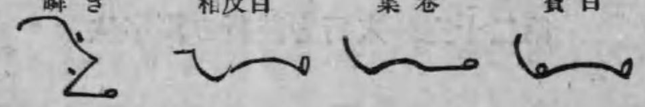
マハ　マヒ　マフ　マヘ　マホ　ミハ
ミヒ　ミフ　ミヘ　ミホ　ムハ　ムヒ
ムフ　マヘ　ムホ　メハ　メヒ　メフ
メヘ　メホ　モハ　モヒ　モフ　モヘ

フミ　ハム　ヒメ

ハマ　ハミ　ハム　ハメ　ハモ　ヒマ
ヒミ　ヒム　ヒメ　ヒモ　フマ　フミ
フム　フメ　フモ　ヘマ　ヘミ　ヘム
ヘメ　ヘモ　ホマ　ホミ　ホム　ホメ

連綴例並例題

瞬き　相反目　葉巻　費目



模範　駒牽き　豆の粉　身振り　見本
無比　無分別　目八分（メハチブン）　破滅　姫君
眉目　文面　誣罔　文箱　紅色

■注意　豆の粉は「マ」に「メ」を縮綴して「ノ●コ」を連ね、目八分は「メ●ハ」に正体の「チ」を連ねて「ブン」を綴るのである。

第二十四　也行と安行の綴字法

也行と綴合すべき安行文字は其前なると後なるとに拘はらず總て正体文字の應用を以て可と致します。

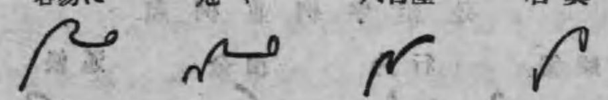
綴字例並例題

ヤア　ヤイ　アヤ　イヤ

■□ヤ　■□ア　□ヤ　□イ　□ヤ　□ウ　ヤエ　□ヤ　□オ　■□ユ　■□ア
■□ヤ　■□ア　□ヤ　□イ　□ヤ　□ウ　ヤエ　□ヤ　□オ　■□ユ　■□ア
□ユ　□イ　■□ユ　■□ウ　□ユ　□エ　□□ユ　■□オ　■□ヨ　■□ア　□ヨ　□イ
■□ヨ　■□ウ　□ヨ　□エ　□ヨ　□オ　■□ア　■□ヤ　□イ　□ヤ　■□ウ　■□ヤ
□□エ　■□ヤ　■□オ　■□ヤ　■□ア　■□ユ　□イ　□ユ　■□ウ　■□ニ　□□エ　■□ユ
■□オ　■□ユ　■□ア　■□ヨ　□イ　□ヨ　■□ウ　■□ヨ　■□エ　■□ヨ　■□オ　■□ヨ

連綴例並例題

容易に　危く　八百屋　右翼



養育院　八重　伊豫　紆餘　親指

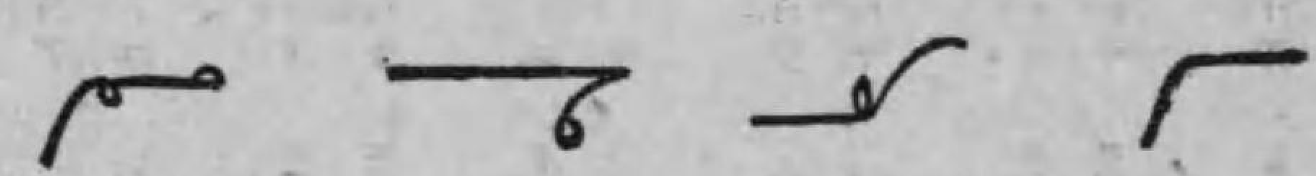
■注意　親指は「オヤ」の「ヤ」に對して同行第三段の縮字即ち「ユ」を應用して「ビ」を綴るのである。

第二十五　也行と加行の綴字法

加行各字に接續すべき也行各字は其前なると後なるとに別無く正變何れの文字を活用するも運筆上差支はありませぬけれども可成は正体文字を以てするを善しと致します。

綴字例並例題

ユキ　コユ　クヤ　ヤカ



ユカ　ヤカ　ヤキ　ヤケ　ヤコ　ユキ

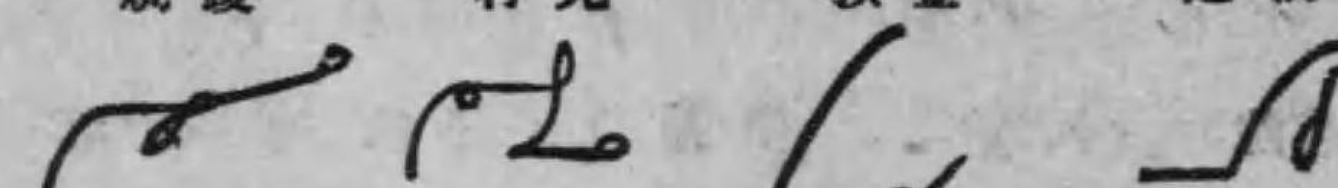
ユク　ユケ　ユコ　ヨカ　ヨキ　カヤ

ヨケ　ヨコ　キヤ　クヤ　ケヤ　コヤ

カユ　キユ　クユ　ケユ　コユ　カヨ

連綴字例並例題

燒饅　行先　預金　通帳



燒米　擁護　雪見　雪倒れ　揚言

容隊　蚊蟵　蚊除け　規約

供養　杞憂　蹴破る　小役人　小休み

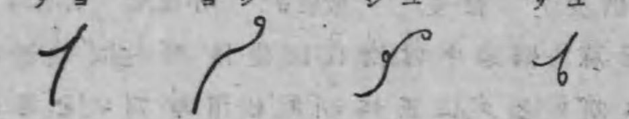
注意　例題中雪倒れは變体の「ユ」に「キ」を連ね、變体の「タ」を「タ」に正体の「オ」を用ゐて「レ」を連接し蚊蟵は「カ」に正体の「ヤ」を、規約は「キ」に變格縮字の「ヤク」を連綴するのである又供養、杞憂、蹴破る、小休みは何れも也行正体文字を以て綴字するのである。

第二十六　也行と佐行の綴字法

也行と佐行は兩行共正變兩体の文字を有して居りますから、前字が正体なる時は變体を變体に對しては正体を應用連綴するを以て善しと致しますが中には筆勢に依りて他の文字と混乱するの嫌ひあるもの假へば正体の「ヤ」に變体の「シ」を連ぬれば「ヤス」と變形するが如き特殊のものがありますから例題の頭に附したる標点に従つて能く練習せねばならぬ。

綴字例並例題

サヨ　ヨシ　シユ　サユ



連綴例並例題

よしんば　不自由　豫算　鞘卷

湯錢　休み　吉野紙　豫想外　餘所行

寄柱　輸卒　使用人　左樣　さふいふ

■注意　湯錢は正体の「ユ」に正体の「セ」を連ねて其尾端を撥ね、吉野紙は變体の「ヨ」に正体の「シ」を接續して「ノカミ」を連綴し、豫想外、餘所行の「ソ」は兩者共正体の「ヨ」に對して變体を用ゐ、又寄柱は變体の「ヨ」に正の「セ」を「セ」に「ハ」を「ハ」に正体の「シ」を

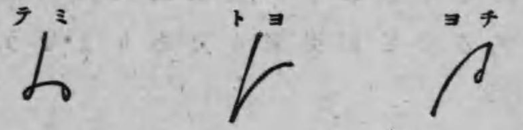
接して「ラ」を連綴するのであつて、輸卒は變体の「ユ」に正体の「ソ」を綴りて「ツ」を連ね、使用人は正体の「シ」に正体の「ヨ」を用ゐて「ニン」を綴合するのである。

第二十七　也行と多行の綴字法

也行と多行とを綴合するには兩行共正体の應用を可と致します。應用例の一班を示せば次の如くである。

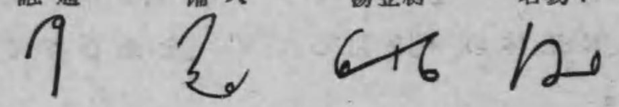
綴字例並例題

テミ　トヨ　ヨチ



連綴例並例題

融通　傭人　湯豆腐　容易く



東洋　矢立　宿屋　論達　委ね
優等品　豫定　餘德　動搖　多慾
知友　痛痒　氣强し　讓る　豊島

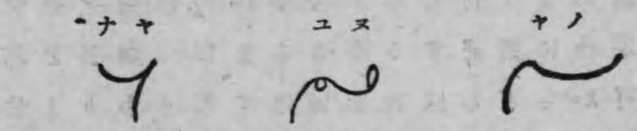
■注意　矢立は正体の「ヤ」に「タ」を綴合し「タ」に第四段縮字「テ」を縮綴するのであつて論達も亦正体の「ユ」に「タ」を連ねて「ッ」を縮綴するのである、委ね優等品に於ける「ユ」及び「ト」は共に變体を應用するを善しと致します、其他は彼此對照して類推應用することが出來るでありませう。

第二十八　也行と奈行の綴字法

也行各字に奈行各字を綴る時は也行の正体を用ゐ、奈行に對して也行を綴る場合前字が單劃文字即ち「ナ●ノ」なる時は也行各字は變体を應用し其他の「ニ●ヌ●ネ」なる時は正体文字の活用を以て良法と致します。

綴字例並例題

ナヤ　ユヌ　ヤノ



ヤナ　ヤニ　ヤヌ　ヤネ　ヤノ　ユナ
ユニ　ユヌ　ユネ　ユノ　ヨナ　ヨニ
ヨヌ　ヨネ　ヨノ　ナヤ　ニヤ　ヌヤ
ネヤ　ノヤ　ナユ　ニユ　ヌユ　ネユ
ノユ　ナヨ　ニヨ　ヌヨ　ネヨ　ノヨ

惱む　名寄せ　荷役　値安　根山
柳　築瀬　屋主　湯呑み　湯槽

■注意　惱むは「ナ」に變体の「ヤ」を用ゐて「ム」を綴

り、名寄せは「ナ」に變体の「ヨ」を「ヨ」に正体の「セ」を連ね、荷役は「ニ」に變格縮字の「ヤ ク」を用ゐ、根山は「ネ」に變体の「ヤ」を應用して「マ」を連續するのである、又築瀬は正体の「ヤ」に「ナ」を「ナ」に變体の「セ」を接するのである。

第二十九　也行と波行の綴字法

波行と綴合すべき也行は總て正体の應用を良法と致します併しながら變体の活用を必要とする場合に遭遇する事あるを以て練習を忽せにす可からざるは言を繰返す迄もありませぬ。

綴字例並例題

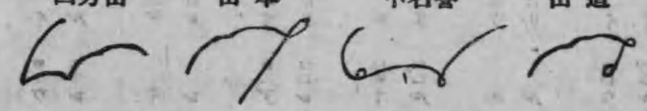
矢筈	咨	野卑	夜番	豫備金
夜更け	餘分	早く	早さ	林組

第三十　也行と末行の綴字法

末行各字に綴るべき也行各字は總て正体を用ゐ、也行に末行を綴合する場合の「ヤ ヨ」は變体を「ユ」は正体を應用するのが利便であります。

綴字例並例題

連綴例並例題



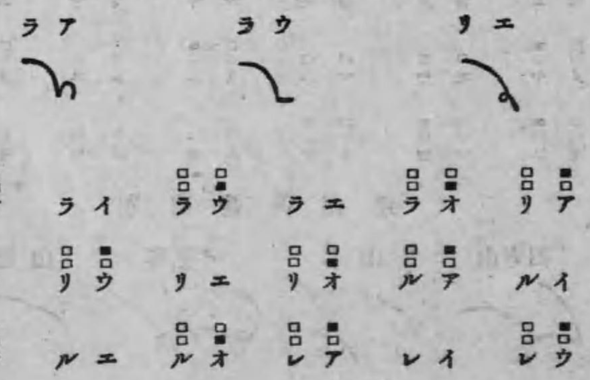
弓矢　山形　大和　山下　湯水
夜祭り　餘命　讀切　痲藥　瞞かす
都　土產　見易き　目脂　催す

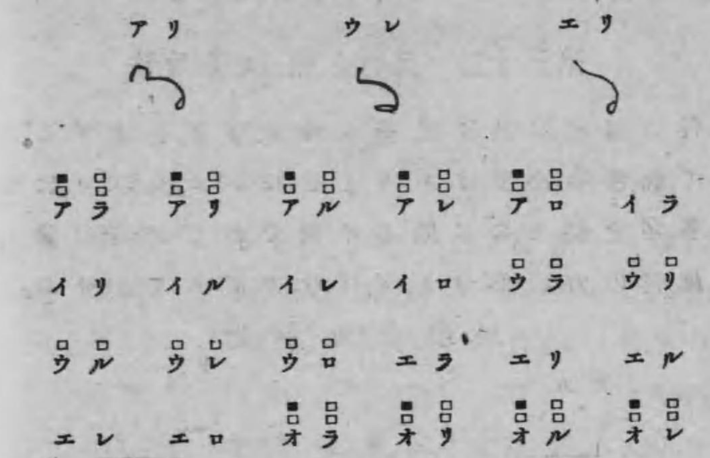
■注意　弓矢は正体の「ユ」に「ミ」を用ゐて、正体の「ヤ」を綴り夜祭りは正体の「ヨ」に「マッリ」を連綴し都は「ミ」に正体の「ヤ」を連ねて「コ」を接するのである他は類推應用せらるべし。

第三十一　良行と安行の綴字法

良行の次に綴る「ア」は正体を應用し「イ」は「ラ」の尾端を直廻して當該文字を作るのである、又「ウ」及「オ」は共に變体の應用を良しとす、而して安行が前字なる時は總て正体を用ゆるのである。

綴字例並例題





連綴例並例題

有觸れる　入物　色取る　賣拂ひ　賣出し
卸賣　不利益　漏洩　有ゆる　和蘭

■注意　有觸れるは正体の「ア」に「リ」を、「リ」に「フレ」を綴り「レ」に第三段縮字を應用し、色取るは「イロ」に正体の「ト」を用ゐて「ル」を連接し、賣拂ひ、賣出の「ウ」は正体を、卸賣の「オシウ」は何れも正体の應用を可と致します又有ゆるの「ア」及び「ユ」は共に正体の應用が得策である。

第三十二　良行と加行の綴字法

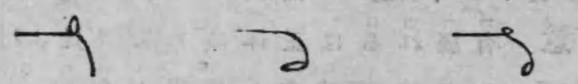
良行と加行は共に正變兩体文字を有せざるを以て説明の必要はありませぬが「カ」及び「コ」に良行各字を綴るのは頗る不便であるが這は諸氏が練習の力に俟つより外仕方がありませぬ。

綴字例並例題

ラカ　レキ　リコ

ラカ　ラキ　ラク　ラケ　ラコ　リカ
リキ　リク　リケ　リコ　ルカ　ルキ
ルク　ルケ　ルコ　レカ　レキ　レク
レケ　レコ　ロカ　ロキ　ロク　ロケ

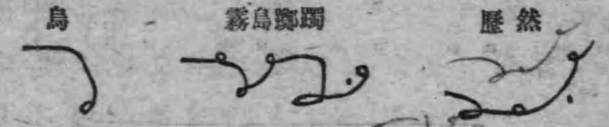
クラ　カレ　キリ



カラ　カリ　カル　コロ　カロ　キラ
キリ　キル　キレ　キロ　クラ　クリ
クル　クレ　クロ　ケラ　ケリ　ケル
ケレ　ケロ　コラ　コリ　コル　コレ

連綴例並例題

鳥　霧島躑躅　歴然



唐櫃　氣樂　嫌ひ　義理　切捨
規律　切拔通信　龜裂　苦樂　御苦勞
繰入る　繰延べ　苦しみ　久留米　黒燒
經歴　經綸　公論　行路　虎列刺（コレラ）
破落戸（ゴロツキ）　牢獄　陸軍　陸續　歴史

第三十二　良行と佐行の綴字法

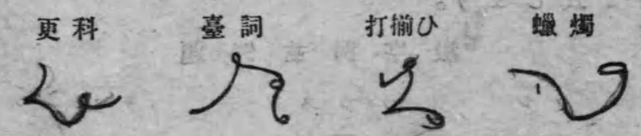
良行各字に對して佐行各字を綴るには正体を用ゐ、之れに反し佐行が前字の場合に於ける「サ」及び「ソ」は變体を「シ」及び「セ」は正体の應用を以て良法と致します。

綴字例並例題

ラシ　ラス　リソ

ラサ　ラシ　レソ　ラセ　ラソ　ラサ
リシ　リス　リセ　リソ　ルサ　ルシ

連綴例並例題



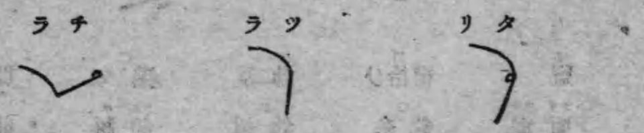
草履	操練	爭論	創立	騷乱
猿遣ひ	自立	調べ	印	司令官
支離滅裂	白砂糖		白無垢	世論
算盤	理想的	札	理財局	離散

■注意　上掲中特殊のものに就て説明するならば算盤は變体の「ソ」に「ロバン」を連續し、理想的は「リ」に「ソテ」の正体を應用して「キ」を接續し、理財局は「リ」に變格縮字の「ザイ」を用ゐて「キョク」を連結すれば宜しいのである。

第三十四　良行と多行の綴字法

良行各字に綴るべき多行各字は總じて變体を用ゐ、多行文字が前字なる時は正体の應用を以て最良の方法と致します。

綴字例並例題

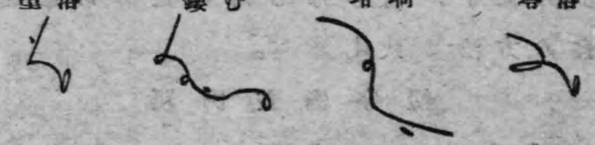


タラ　チリ　ツレ

タラ　タリ　タル　タレ　タロ　チラ
チリ　チル　チレ　チロ　ツラ　ツリ
ツル　トロ　ツロ　テラ　テリ　テル
テレ　テロ　トラ　トリ　トル　トレ

連綴例並例題

墮落　鏤む　坩堝　零落



盥　樽拾ひ　動乱　熟な　貫く
面當　釣糸　釣鐘　釣瓶　鼎立
低落　定例閣議　低廉　低落　鑪踏
照す　奴隷　燈籠　裸体　埒
利達　慄然　例題　冷淡　陋態

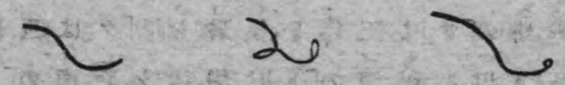
■注意　例題中盥より燈籠迄の多行各字は正体の應用を可とし、裸体、埒は共に多行變体を用ゐ、利達は「リ」に變体「タ」を連ねて「ツ」を連綴し、例題

は「レ」に別格の「タイ」を連ね冷淡は「レ」に正体の「タン」を陋態は「ロ」に變体の「タ」を用ゐて「オ」を連綴するのが良法である。

第三十五　良行と奈行の綴字法

綴字例並例題

ラナ　レヌ　ロニ



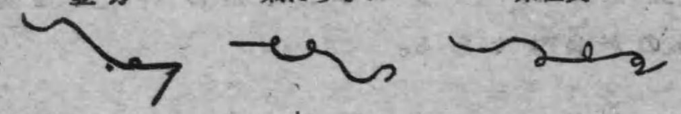
ラナ　ラニ　ラヌ　ラネ　ラノ　リナ
リニ　リヌ　リネ　リノ　ルナ　ルニ
ルヌ　ルネ　ルノ　レナ　レニ　レヌ
レネ　レノ　ロナ　ロニ　ロヌ　ロネ

ニラ　ナリ　ヌレ

ナラ　ナロ　ナル　ナレ　ニロ　ニラ
ニリ　ニル　ニレ　ヌロ　ヌラ　ヌリ
ヌル　ヌレ　ネロ　ネラ　ネリ　ネル
ネレ　ネロ　ノラ　ノリ　ノル　ノロ

連綴例並例題

並方　氣にらない　乘組員



成金黨	鳴物	韮崎	二輪車	塗物
狙擊ち	練糸	乘初め	乘換へ	濡らす
祝詞	理念	例年	玲瓏	邊行く

■注意　例題中特殊のものに對し説明を試みんに韮崎の「サ」は正体を、狙擊ちの「ウ」は正体を「チ」は變体を用ゐ、祝詞の「ト」は變体を、玲瓏の「ロ一」は普通文字を用ゐ、邊行は「ネリ」に正体の「ユ」を用ゐて「ク」を連綴するのであります。

第三十六　良行と波行の綴字法

綴字例並例題

ラハ　レフ　リヘ

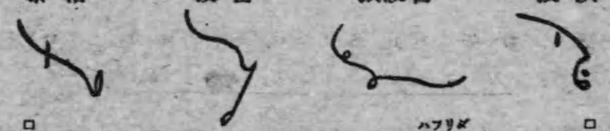
ラハ	ラヒ	ラフ	ラヘ	ラホ	リハ
リヒ	リフ	リヘ	リホ	ルハ	ルヒ
ルフ	ルヘ	ルホ	レハ	レヒ	レフ
レヘ	レホ	ロハ	ロヒ	ロフ	ロヘ

ヒラ　フリ　ヒレ

ハラ	ハリ	ハル	ハレ	ハロ	ヒラ
ヒリ	ヒル	ヒレ	ヒロ	フラ	フリ
フル	フレ	フロ	ヘラ	ヘリ	ヘル
ヘレ	ヘロ	ホラ	ホリ	ホル	ホレ

連綴例並例題

暴落　腹當　振假名　狼狽



原田	暴利	暴戾	放出す	波浪
腹立	腸	罵詈	馬力	腹卷
破裂	破廉恥	開く	非立憲	比類
披瀝	大廣間	腐爛	鰤	披露
古道具	附錄	兵乱	並列	緣取
滅す	徽醉機嫌	浪費	蠟引	禮砲

■注意　原田の「タ」は變体を、放出すは「ホーリ」に變体の「ダ」を用ゐて「ス」を連ね、腹立は「ハラタ」の「タ」に對して「チ」を縮綴し、腸の「タ」は正体を、大廣間の「オ」は變体を、古道具の「ド」は正体を用ゐ、緣取は「ヘリ」に「ト」の正体を應用して「リ」を連綴するのである。

第三十七　良行と末行の綴字法

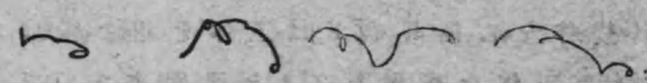
綴字例並例題

ラマ	ラミ	ラム	ラメ	ラモ	ソマ
リミ	リム	リメ	リモ	ルマ	ルミ
ルム	ルメ	ルモ	レマ	レミ	レム
レメ	レモ	ロモ	ロミ	ロム	ロメ

マラ	モロ	マル	マレ	マロ	ミラ
ミリ	ミル	ミレ	ミロ	ムラ	ムリ
ムル	ムレ	ムロ	メラ	メリ	メル
メレ	メロ	モラ	モリ	モル	モレ

連綴例並例題

生れ　差迫る　村雨　目論見



埋る	埋木	カメリオン	極り	煙
曇り	蹴鞠	困入る	取締	菫
無利	丸焼	牛乳	未練	無類
村役場	室町時代	鼻大小	目盛	無論

■注意　例題中取締は正体の「ト」に「リ」を、「リ」に正体の「シ」を接續して「マリ」を連綴するのである、又村役場は「ムラ」に變格縮字の「ヤク」を連ねて「バ」を綴り、目盛りは「メ」に同行第五段の縮字即ち「モ」を縮綴して「リ」を連綴すれば宜しいのである。

第三十八　良行と也行の綴字法

良行各字の次に也行各字を綴るには總て正体を用ゐ、也行各字に良行各字を連ぬる場合、前字が「ヤ」及び「ユ」なる時は正体を、「ヨ」なる時は變体の應用を以て可と致します。而して綴字上に於ける定義よりすれば正体の也行各字の次に綴る良行各字は其角度大にして、變体に據るものは其角度少でありますから變体の應用を可とするものゝ如くなれども正体の「ヤ」に良行各字を接續する時は往々にして多行と同一形狀となりて其正確を保し難きが故に正体の活用を善しとするのである、併し正体「ヨ」に良行各字を連

綴するの不便は變体に良行各字を連ぬるに要する注意よりも甚だしきが故に變体の活用を以て良法と致した次第である。

綴字例並例題

ヤラ　リユ　ヨリ

ラヤ　リヤ　ルヤ　レヤ　ロヤ　ラユ

リユ　ルユ　レユ　ロユ　ラヨ　リヨ

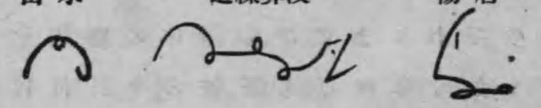
ルヨ　レヨ　ロヨ　ヤラ　ヤリ　ヤル

ヤレ　ヤロ　ユラ　ユリ　ユル　ユレ

ユロ　ヨラ　ヨリ　ヨル　ヨレ　ヨロ

連綴例並例題

由來　遣繰算段　陽暦



百合（ユリ）　理由（リユウ）　養老（ヤウロウ）　昨夜來（サクヤライ）　槍遣ひ（ヤリヅカヒ）

許す（ユルス）　小綴み（コユルミ）　寄集る（ヨリアツマル）　喜ぶ（ヨロコブ）　鎧（ヨロヒ）

注意　例題中昨夜來は變体の「サ」に「ク」を綴り

而して正体の「ヤ」及「ライ」を連綴し、百合、理由、許す及び小綴みの「ユ」は變体を用ゐ、其他の也行は變体の活用を以て善しと致します。

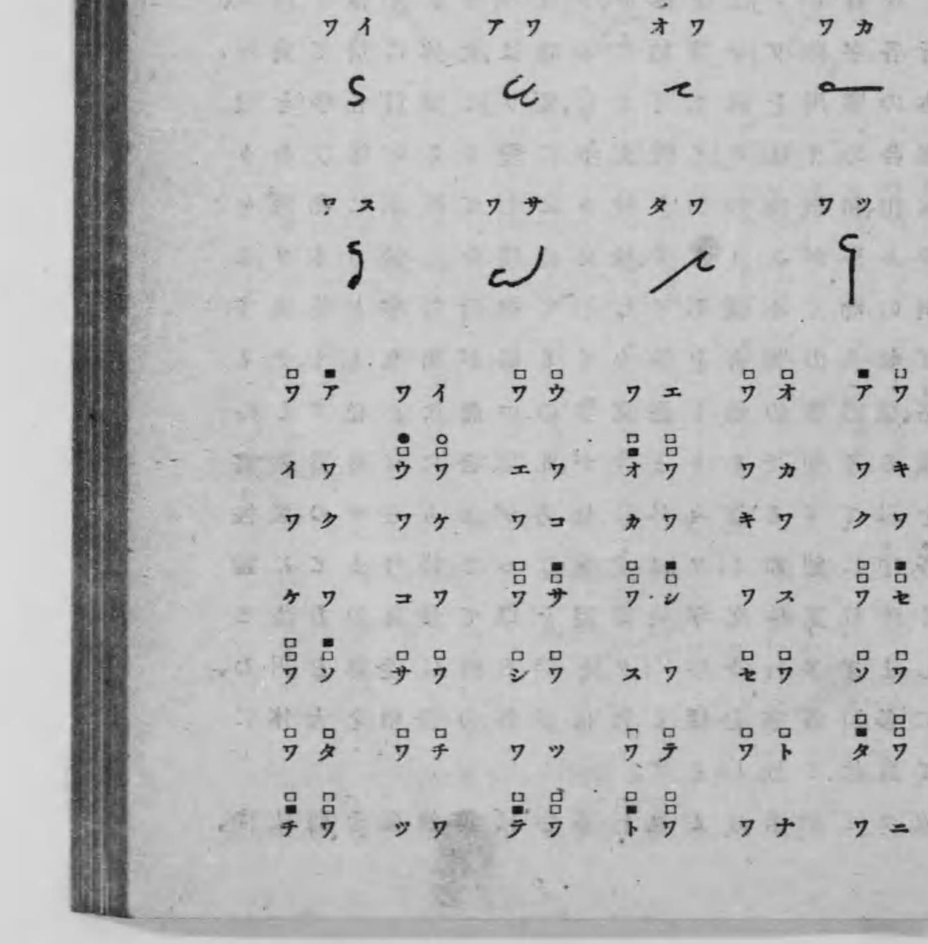
第三十九　「和」と他行の綴字法

「ワ」に連ぬる「ア」は變体を、「ウ」及び「オ」は正体を用ゐ、安行各字に「ワ」を接結する時は大体に於て安行變体の應用を以て可とし、又「ワ」に加行各字を綴る場合の「ワ」は「オ」と同文字に變するの嫌ひありて岡山、和歌山の如き往々にして甄別に困難を感ずる事があります、故に此場合に於ける「ワ」は用例の如く小圓形となして加行各字を連綴すれば如上の弊害を除去する事が出來ます、尤も迷惑、疑惑等の如く他文字の中間に存在する時は頗る不便でありますが、此場合には普通の書方を以てするより外に仕方がありませぬ、又佐行各字に連ぬる「ワ」は其前なると後なるとに論なく佐行正体文字の應用を以て最良の方法と致します多行各字に「ワ」を綴る時は變体を用ゐ、「ワ」に多行各字を綴るには正体の應用を大体に於て良法と致します。

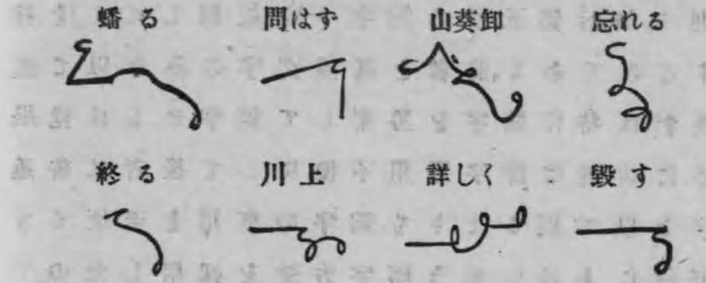
尙ほ「ワ」と綴合する也行各字は其前後を問はず、

正体の活用を可とし其他は總て前字の尾端と後字の首端とを結付れば宜しいのであります、次に應用例の一班と例題とを掲げて練習の資に供しましう。

綴字例並例題



連綴例並例題



若返る　我黨　我輩　和議　分目
和算　態々　渡塲　話頭　渡初
泡盛　周章　慌し　上塗　噂
御座ます　尾張　御變り　川風　川岸
川越　爲替　革足袋　皮細工　厠
川柳　極み　企　桑摘　蠱惑

■注意　例題中我輩は「ワガ」に別格縮字の「ハイ」を、和算は「ワ」に正体の「サ」を綴りて其尾端を撥ね、態々は「ワ」に「サ」を連ねて正略標を用ゐて重呼せる「ワザ」を略綴し渡初めは「ワ」に正体の「タ」を用ゐて「リ」を「ヲ」に正体の「ソ」を連ねて「メ」を接續するのである、又噂は正体の「ウ」及び「サ」を用ゐ、御座ますは變体の「オ」に「ワ」を「ワ」に正体の「シ」を連ねて「マス」を綴合するのである、川岸、川風の「シ」及「セ」は共に正体を用ゐて普通基礎文字のみを以て連綴し、

川越は「カワ」の「ワ」に對して「ワ」を隔つる前字の縮字則ち加行第五段の縮字「コ」を縮綴して「イ」を接續するのである、前者を基礎文字のみを以て綴り後者は特に縮字を應用して綴字せるは竟畢するに前者は縮字應用不便にして後者は普通文字を以て綴るよりも縮字の應用を至便とするが故に上述の如き綴字方法を採用したのである、企は正体の「タ」を用ゐて「クワダ」と連綴し「ダ」に對して「テ」を縮綴するのであります。

例題

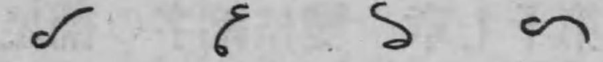
鱶	障り	騒す	茶話會	仕業
皺伸	座る	世話人	俵	戯れ
撓む	地割	武者	手業	當惑
繩飛	繩暖簾	座掃	俄雨	野分

■注意　例題中の佐行各字は正体を多行各字は變体の應用を以て良法と致します、今特殊のものに就て説明するならば、仕業は「シ」の正体に「ワ」を「ワ」に變体の「ザ」を連ね手業は「テ」の變体に「ワ」を「ワ」に變体の「ザ」を連綴するのであります。

綴字例並例題

ナワ　ワヒ　フワ　ミワ

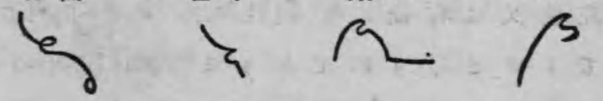
ワヤ　ヴユ　ワレ　ワマ



ワヌ	ワネ	ワノ	ナワ	ニワ	ヌワ
ネワ	ノワ	ワハ	ワヒ	ワフ	ワヘ
ワホ	ヒワ	フワ	ヘワ	ホワ	ワヌ
ワミ	ワム	ワメ	ワモ	マワ	ミワ
ムワ	メワ	モワ	ワラ	ワク	ワル
ロワ	ワロ	ラワ	リワ	ルワ	レワ
○●○□ ワヤ	○●○□ ワユ	○●○□ ワヨ	□□ ヤワ	●○□□ ユワ	□□ ヨワ

連綴例並例題

日割　哇布　柔か　齢



及渡り	不和	不惑	平和	廻り
見分	迷惑	湯沸	世渡り	言はゞ

■注意　言はゞは「イワバ」と連綴すべきではありますが此場合に於ける「イ」は「ユ」と聞ゆるが故に「ユ」の正体文字を用ゐて「ワバ」を連綴する方が得策である、其他「イ」の「ユ」に聞ゆるものは總て「ユ」を應するを以て良法と致します。

第十七章　變格縮字の補足

變格縮字の補足として次の三字を追加説明致しませう、此縮字も亦補助的文字でありますから何れの場合に於ても悉く應用せんと欲する時は却つて運筆を晦澁ならしむるの嫌ひあるを以て普通文字綴合の惡しき場合に限り活用する事に注意せねばなりませぬ。

偖て其方法は如何にすべきかといふに正体「タ」の尾端右側又は左側に第三段縮字即ち「ウ」字形の楕圓形を附して「タク」となし、「ッ」に同一方法により左側又は右側に縮綴して「ック」、「ト」に同樣縮綴して「トク」となすのであります、即ち次の如し。

應用例並例題

タク　　ック　　トク

上掲三縮字中「タク」は「タッ」「トク」は「トッ」「ック」は「ッッ」と全然同一文字ではありますが誤譯するの憂ひはありませぬ。

特意（トクイ）　造る（ツク）　特赦（トクシヤ）　危篤（キトク）　遠く（トホク）
澤庵（タクワン）　總督（ソウトク）　特色（トクシヨク）　痛苦（ツウク）　特に（トク）

注意　例題中特殊のものに就て説明せんに遠くは變格縮字「トク」の「ト」に長音符を附して「トー」となし痛苦も亦變格縮字「ック」の「ッ」の部分を長くするか若しくは「ッ」に對して長音符を附して長音「ッー」なる事を表示し又特には變格縮字を用ゐるも將た普通文字を以て連綴するも速記力並に運筆上に於ては些の軒輊はありませぬけれども普通文字の「ト」及び「ク」を以て連綴する時は往々常にと紛乱するの慮みあるに反し變格縮字は如上の弊害なきが故に變格縮字の「トク」に「ニ」を連續するものゝ優れるは贅々する迄もありませぬ。

應用例題

諸君は如上の説明に依りて基礎的文字即ち吾人が日々使用する言語を書寫するに足る一切の文字を知得し該文字を如何に綴合すれば運筆を自由快速ならしめ得べきかに就き充分諒解せられたる事と信ずるのである、故に之れより愈々一字を以て數語を表示し得べき所謂秘

訣文字の講明に移り、而して一文章一講語を速記するには以上詳解細說せる單語の綴字を如何なる法則に依て綴合すれば最も適切なるかに就き講述する事と致します、諸子よ諸子は之れより益々速記學の蘊奥を極め速記學應用の時代に入らんとするものである夫れ速記の術に熟達せんと欲せば從來學修し來れる基礎的文字并に其綴字方法に就き充分の研究と練磨の功とを積まねばなりませぬ、今次に特殊例題を掲げたれば各自に於て如何なる方法に依つてすれば最も字劃の整正を期し運筆を輕妙ならしめ得べきかに就き能く考査して適切なる解決を與へられよ。

特殊例題

關東郡督（クワントウトヌグ）　朝鮮總督府（テフセンソウトクフ）　流離顚沛（リウリ テンパイ）　右往左往（ウワウ サワウ）

西園寺首相（ザイオン ジ シユセウ）　卒業證書授與式（ソツゲフセウシヨ ジユ ヨシキ）　約束手形（ヤクソク テ ガタ）　自働車（ジ ドウシヤ）

總督官房（ソウトククワンボウ）　御多分（ゴ タ ブン）　御膝許（オヒザモト）　追慕（ツイ ボ）

事納め（コトオサ）　デパートメントストア　コロタイプ

第十八章　拗音と綴字

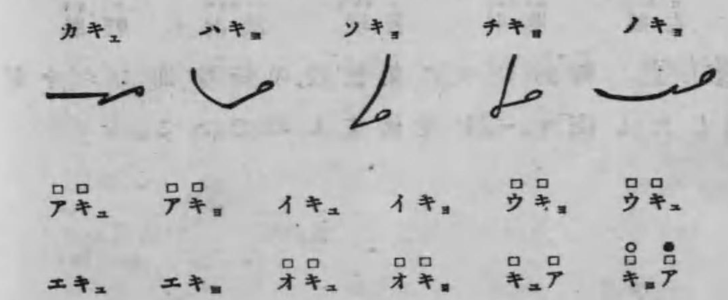
前章の解說講明に依りて直音各文字間の綴字の方法を會得し且つ各例題に付ての練習に依りて運筆を自由自在ならしむる事が出來たであらうと思ひます、故に本章に於ては拗音と直音各字間の綴字方法並に拗音各字間の綴字方法を講じ尙ほ運筆を輕快自在ならしめんが爲め例題を掲げて練習資料に供しませう。併しながら拗音全体に亘る例題を組立つる時は徒らに頁數のみを增大ならしむるのみならず拗音は直音の如く應用の範圍廣からざれば從つて殆んど、練習の要なき例題夥多となり却つて諸君の熱心なる練習努力をして空所に注がしむるの嫌ひあれば拗音に對しては其最も應用の廣きもの並に直音各字間の綴字と聊か運筆の方法を異にするものを擇びて練習例題を組立て之れが綴字の方法（假名文字の頭に附すべき標は前編と同樣）を說述致します。尙ほ之れが解說に先立つて一言注意して置きたいのは　（チャ）を「チユ」と讀ましむる事であります。

我國語に於ては「チャ」と發音さるゝ事の餘り多からざるに反し「チュー」と發音さるゝ事は極めて多いのであります、從つて（チュ）の應用範圍も亦廣多であるが該文字の次に波行各字並に半母韻字「ワ」等の綴合さる場合、假へば中部、駐米大使の如きにありては其綴合の不便にして運筆を滯滯ならしむるもの蓋し鮮少ではありませぬ、故に「チュ」の次に波行各字及「ワ」並に波行「ヒャ」を除く拗音文字及び「シャ」の九字を綴合する場合に限り「チャ」を假用して「チュ」と讀ましむる事と致したのであります。而して「チャ」と「チュ」とは自から用所を異にするのみならず「チャ」の應用さるゝ事は頗る稀れでありますから兩者混淆するの虞れは全くありませぬ、尙ほ說明の便宜上「チャ」と同一文字の「チュ」を變體とし本來の「チュ」を正體と呼稱する事と致します。

第一　「キャ」行と直音字の綴字法

加行拗音中「キャ」は其應用さるゝ事數ふる程しかありませぬから之れを省略して「キュ・キョ」だけに付て說明致しませう、偖て各行との關係に付て解說せんに加行中「カ」及「コ」等の單線文字の次に加行拗音各字を綴るには其尾端即ち起筆点を少しく勾曲し、佐行中「サ」及「ソ」の次に加行拗音各字を綴合する場合には「サ・ソ」の變体文字を使用し、多行各字は加行拗音各字が其前なると後なるとに論なく總て正体を應用し、奈行中「ナ」及び「ノ」の次に加行拗音各字を接續する場合には加行に連ぬると同樣其首端を少しく勾曲し其他の文字と連綴する時は前字の尾端と後字の首端とを綴合すれば宜しいのであります。

綴字例並例題



キュイ　キョイ　キュウ　キョウ　キュエ　キュエ

キュオ　キョオ　カキュ　カキョ　キキュ　キキョ

クキュ　クキョ　ケキュ　ケキョ　コキュ　コキョ

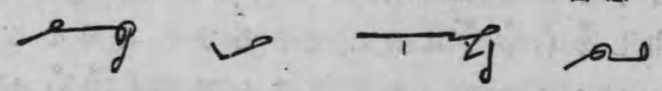
キュカ　キョカ　キュキ　キョキ　キュク　キョク

キュケ　キョケ　キュコ　キョコ　キュネ　キョネ

キュノ　キョノ　ネキョ　ネキュ　ノキュ　ノキョ

連綴例並例題

學國一致	影響	公共團體	舊惡



異郷	紆曲	永久	應急	高級
號泣	抗拒	佳境	下級	牛疫
舊怨	舊稿	糾合	急行	吸引
響應	境界	行幸	驚愕	狂句
行儀	去年	恐喝	恐慌	輩固
古郷	鞠躬	苦境	景況	輕擧

■注意　鞠躬は「キ」に第三段の縮字即ち「ク」を縮綴したる後「キュー」を連綴するのである。

綴字例並例題

シキュ　トキョ　サキョ　キョタ

キュサ　キョサ　キュシ　キョシ　キュス　キョス

キュセ　キョセ　キュソ　キョソ　サキュ　サキョ

キュテ　シキョ　スキュ　スキョ　セキュ　セキョ

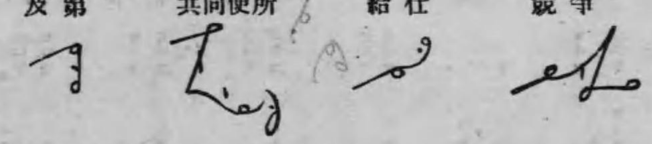
キョテ　ソキョ　タキュ　タキョ　チキュ　チキョ

ツキュ　ツキョ　テキュ　テキョ　トキュ　キュト

キュタ　キョト　キュチ　キョチ　キュツ　キョツ

連綴例並例題

及第	共同便所	給仕	競爭



翕然	窮す	窮鼠	恐察	凶作
共通	京都	急速	居宅	協定
怯懦	昨曉	至急	時局	請求
創業總會	左胸部	近去せり		等級
當局者	地球	通御	增給	擧示

■注意　翕然乃至恐察の佐行は總て正体を、凶作、急速、昨暁、增給等の「サ」及び「ソ」は變体を、至急、時局の佐行各字は正体を多行は總て正体の應用を可と致します、又創業總會は「ソー」の變体に「ギョー」並に變体の「ソー」及び「カイ」を連綴し、逝去せりは正体の「セー」に「キョ」並に變体の「セ」を用ゐて「リ」を連續するのであります。

例　題

ハキュ	ハキョ	ヒキュ	ヒキョ	フキュ	フキョ
ヘキュ	ヘキョ	ホキュ	ホキョ	キュハ	キョハ
キュヒ	キョヒ	キュフ	キョフ	キュヘ	キョヘ
キュホ	キョホ	ロキュ	キュロ	レキュ	レキョ
リキュ	リキョ	キュロ	キョロ	キョラ	キョル
キョレ	キュリ	キョリ	リキュ	ワキョ	キョワ
キュヨ	ヤキュ	ヤキョ	ユキョ	ユキュ	ヨキョ
ヨキュ	キュヤ	キョヤ	キョユ	キョユ	キョヨ
ムキュ	キュム	メキュ	キュメ	キュモ	モキョ

連綴例並例題

要求	夜業	不況不振	離宮

敎範	饒名	脅迫	窮民	享年
恐怖	郷里	行列	窮厄	曲筆
玉露	魚類	暴擧	暴虐	白玉樓
波及	匪躬	普及	協和	遊興

■注意　例題中窮厄は「キュー」に變格縮字の「ヤク」を白玉樓は「ハク」の變格縮字に「キョクロー」を連ね接續し、遊興は正体の「ユ」に「キョー」を綴合するのであります。

第二　「シャ行」と直音字の綴字法

佐行拗音各字に綴合すべき安行は「シュ」に「オ」の變体を應用するの外總て正体を應用し、安行各字に佐行拗音各字を綴る場合、後字が「シャ」なる時は變体を「シュ・ショ」なれば正体の應用を可と致します。又佐行各字は其前後を問はず正体を用ゐ、多行各字を「シュ」の次に綴る時は變体、「シャ・ショ」の次なる時は正体を應用し、多行各字の次に「シャ」を綴る場合の多行各字は總て變体を其他多行各字は正体の活用を可とし、也行各字は其前なると後なるとに論無く正体の活用を以て良法と致します。

例　題

アシャ	アシュ	アショ	イシャ	イシュ	イショ
ウシャ	ウシュ	オシャ	オシュ	オショ	シャア
シュア	ショア	シャイ	シュイ	ショイ	シャウ
シュウ	ショウ	シャオ	シュオ	ショオ	シャカ
シャキ	シャク	シャケ	シャコ	シュカ	シュキ
シュク	シュケ	シュコ	ショカ	ショキ	ショク

連綴例並例題

醫者　　桑爵　　諸君　　醜惡

阿闍梨（アジャリ）	啞者（アシャ）	阿修羅（アシュラ）	以上（イジャウ）	御酌（オシャク）
鞅掌（アウシャウ）	嘉賞（カシャウ）	呵責（カシャク）	記者（キシャ）	苦情（クジャウ）
愚者（グシャ）	交渉（カウショウ）	職人（ショクニン）	所期（ショキ）	周圍（シュウイ）

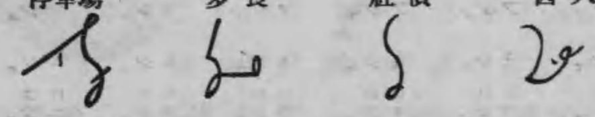
例　題

サシャ	サシュ	サショ	シシャ	シシュ	シショ
スシャ	スシュ	スショ	セシャ	セシュ	セショ
ソシャ	ソシュ	ソショ	シャサ	シュサ	ショサ

シャシ	シャス	シュシ	ショシ	シュス	ショス
シャタ	シャチ	シャト	ショト	シュト	シュア
タシャ	タシュ	タショ	チシャ	チシュ	チショ
ツシャ	ツシュ	ツショ	テシャ	トショ	トシュ

連綴例並例題

停車場　　多食　　社債　　囚人



就職（シュショク）	集成（シフセイ）	澁滯（ジフタイ）	賞讃（シャウサン）	情死（ジャウシ）
常態（ジャウタイ）	請待狀（シャウタイジャウ）	詳傳（シャウデン）	彰德（シャウトク）	綽然（シャクゼン）
書店（ショテン）	所得稅（ショトクゼイ）	小冊子（セウサツシ）	招致（セウチ）	聲色（セイショク）
清酒（セイシュ）	盛者（セイシャ）	總集會（ソウシフクワイ）	奏上（ソウジャウ）	通常（ツウジャウ）
訴訟法（ソジャウハフ）	恥辱（チジョク）	治者（ヂシャ）	提唱（テイシャウ）	謄寫版（トウシヤバン）

注意　例題中集成は「シュー」に正体の「セー」を、澁滯は「ジュー」に變体の「タ」を用ゐて「イ」を連ね、常態は「ジョー」に別格縮字の「タイ」を、綽然は「シャ」に第三段縮字即ち正体の「ウ」を楕圓形にしたるものを右側に附したる「シャク」に正体の「ゼン」を所得稅は「ショ」に正体の「ト」及び「ゼー」を用ゐて連綴し、小冊子は「ショ」に正体の「サ」を綴り、「サ」に對し同行第一

段の縮字即ち小圓環に少しのを出し其ツノを「サ」に交叉接續して其間に促音の存する事を表示するのである、治者は變体の「チ」に謄寫版は變体の「トー」に「シャバン」を連續し其他の各行佐行各字は正体を用ゐて綴合するのである。

例　題

ハシャ	ハシュ	ハショ	ヒシャ	ヒシュ	ヒショ
フシャ	フシュ	フショ	マシャ	マシュ	マショ
ミシャ	ミシュ	ミショ	ムシャ	ムシュ	ムショ
ヤシュ	ヤシャ	ヤショ	ユシャ	ユシュ	ユショ
ラシャ	ラシュ	ラショ	リシャ	リシュ	リショ
レシャ	レシュ	レショ	ワシャ	ワシュ	ワショ

綴字例並例題

非常に　不承知　眞正面

馬車　場所　遊暑　部署　秘書官
扶助　侮辱　凡常　扶殖　豐穣
奉職　募集　保釋　歩哨　無職
夜叉　洋食　老弱　令嬢　冷酒
破邪顯正　非訟事件　無主義　名所舊蹟

■注意　例題中夜叉洋食の「ヤ」及び「ヨ」は共に正

体を用ゐるを可と致します。

例　題

シャハ	シャヒ	シャフ	シュハ	シュヒ	シュフ
ショハ	ショヒ	ショフ	シャマ	シャミ	シャム
シュミ	シュマ	シュム	ショマ	ショミ	ショム
シャヤ	シャユ	シャヨ	シュヤ	シュユ	シャユ
ショヤ	シャラ	シャリ	シャレ	シュラ	シュリ
シュレ	ショラ	ショリ	ショレ	シャワ	ショワ

連綴例並例題

進般	從來	受話機	條約

社費　車夫　寫本　邪僻　三味線
社務所　赦免　借問　邪慾　洒落臭
破利　車輛　謝禮　邪論　首班
守備隊　主婦　首謀　種目　諸般
處分　庶民　署名　所用　書類

■注意　例題中三味線は「シャミ」に正体の「セン」を綴り、邪慾は「シャ」に變格縮字の「ヨク」を連ね、酒落臭は「シャラク」に變格縮字の「サイ」を連續し、種目は「シュ」に變格縮字の「モク」を接續するのであります。

第三「チャ」行と直音字の綴字法

「ア」の次に綴る「チャ」は「ア」の變体に「チュ」は正体に、「チョ」は正体に、又「オ」の次に綴る「チャ」は變体の「オ」に「チュ」は正体に、「チョ」は變体に、尙ほ「イ」に綴る「チ■」は變体を用ゆるのを可とす、之れに反し「チャ」に綴る「ア」は變体を「オ」は正体を「チュ」に連る「ア」は正体を、「オ」は變体を用ゐ、「チ■」の次に「イ」を綴る時の「チョ」は正体の應用を善しと致します。

佐行各字と多行拗音各字とは其前後を問はず兩行共正体の應用を良法と致します。

多行中の「タ」及び「ト」に綴るべき「チャ」は正變兩体何れにするも大なる軒輊はない、又「チュ」は正体の「タ」及び「ト」に連ね、「チョ」は「タ」及び「ト」の正体を用ゐたる時は「チョ」の變体を、「タ●ト」を變体に書きたる時は「チョ」の正体を用ゐ、「ッ」に對しては變体の應用を可と致します、之れに反し「チャ」「チュ」「チョ」の次に多行各字を綴合する場合には縮字を應用するものと否らざるものとある事は前章に述べたる所なれば茲には再説致しませぬ。

波行各字の次に綴る多行拗音各字は正体の應用を以て可と致しますが、多行拗音各字の次に

波行各字を綴合する場合の「チュ」は前述の如く「チャ」を借用したる「チュ」即ち變体の「チュ」を用ゐ、「チ■」は正体の應用を以て良法と致します。

也行と多行拗音字とは「チャ」の次に綴る也行を變体に用ゐるの外總て正体を用ゐ。

「和」に綴る「チュ」を變体に應用するの外之れ亦「チ■」「チャ」は正体の活用を最良の綴字法と致します。

例題

アチャ	アチュ	アチ■	イチャ	イチュ	イチ■
アチャ	アチュ	アチ■	イチャ	イチュ	イチ■
ウチャ	ウチュ	ウチ■	オチャ	オチュ	オチ■
チャア	チュア	チ■ア	チャイ	チュイ	チ■イ
チャウ	チュウ	チ■ウ	チャオ	チュオ	チ■オ
カチャ	カチュ	カチ■	キチャ	キチュ	キチ■
クチャ	クチュ	クチ■	ケチャ	ケチュ	ケチ■
チャコ	チュコ	チュコ	チャキ	チュキ	チ■キ
チャク	チュク	チ■ク	チャケ	チュケ	チ■コ

連綴例並例題

有頂天	茶色	御茶屋	苦夏
雨中（ウチユウ）	移牒（イテフ）	營中（エイチユウ）	校長（カウチヤウ）
講中（カウチユウ）			

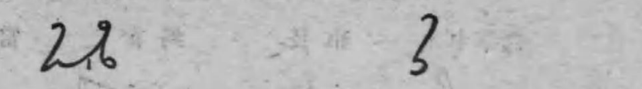
綱條砲	歸着	几帳面	愚直	區長
愚衷	傾聽	傾注	輕佻	誇張
固着	御遊樣	長音	聽講劵	長期
町會	長官	仲介	忠義	中國

■注意 御茶屋の「オ」は變体の應用を以て運筆上至便と致しますが餘り滑脱に過ぎて筆勢を失し正確を保ち難き憾みあれば少しの不便は之れを忍ぶも正体の「オ」に「チャ」を連ぬるものは字劃の井然を期する点に於て數等優れるが故に「オ」に「チャ」を連ぬる場合には連綴例の如くし、更らに「チャ」に接すべき「ャ」は變体の活用を良法と致します。

而して「チャ」に「ャ」の變体を綴る時は往々にして「シャ」と同樣文字に變化するの嫌ひがあります、然れども「ャ」及び「ョ」の變体文字は「シャ」と全然同一文字に書くも兩者各々其用所を異にし、加之我が國語に於ては其使用さるゝ事餘り多からざれば兩者混用するも紛雜を來すが如き事は決してありませぬ。

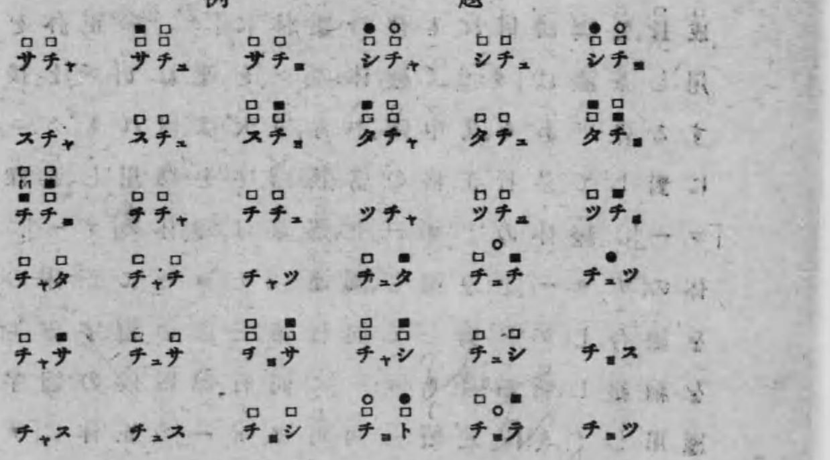
傾注、愚衷の「チュー」は共に「チャ」を借用したる「チュー」即ち變体文字を應用するも然らざるも差支はありませぬが

中央政府　　注意



等の如く「シュー」の次に他の文字を連綴する場合、次に綴るべき文字が波行各字並に「ワ」及び「シャ」「ヒュ」「ヒョ」の各字以外の文字なる時換言すれば「チュー」を他文字の前に書く時は可成正体の「チュ」を用ゐるを可と致します、即ち「中央行政官廳」「中央集權」「中央銀行」「中央氣象臺」「中央機關」「中央大學校」等の如き皆な正体の「チュ」を用ゐて連綴するのであります。

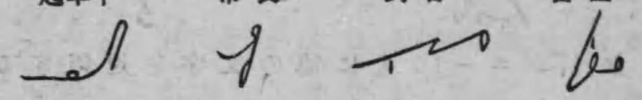
例題



注意　例題中○印の附しあるものは縮綴字の應用を可とするもの又は應用し得るものを示したのである

連綴例並例題

起草中　市長　到着　當直



市中	輜重輸卒	司直	素町人	誠忠
成長	聲調	總長	當中	茶漬
茶簞笥	茶會	茶澁	茶染	中佐
注進	中斷	中毒	冲天	通牒
鄭重	調達	朝敵	調度	同町

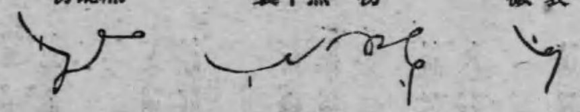
注意　例題中市中は正体の「シ」に、誠忠も亦正体の「セー」に「チュー」を連ね、輜重輸卒、司直、素町人、成長、聲調は何れも佐行正体に「チ」の正体を應用し茶澁は「チャ」に變体の「シ」を連ねて「ブ」を接續するのである、又中斷、中毒、冲天は何れも「チュー」に對して多行正格の當該縮字を應用し、通牒は「ッー」に變体の「チョー」を、鄭重は變体の「テー」に正体の「チョー」を連綴し、調達は「チョー」に正体の「ダ」を綴合し「ダ」に對して同行第三段の縮字即ち「ヅ」を縮綴し、朝敵は「チョー」に同行第四段の縮字を應用して「キ」を連續し同町は「ドー」の正体に「チョー」の變体を綴り、調度は正体の「チョー」及び「ド」を用ゐて綴合するのである。

例題

ナチャ	ナチュ	ナチ	ニチャ	ニチュ	ニチ
ヌチャ	ヌチュ	ヌチ	チャネ	チュネ	チネ
チャナ	チュナ	チナ	チャヌ	チノ	チュニ
ハチャ	ハチュ	ハチ	ヒチャ	ヒチュ	ヒチ
フチャ	フチュ	フチ	チャハ	チャヒ	チャフ
チュハ	チュヒ	チュフ	チハ	チヒ	チフ

連綴例並例題

傍聽席　囊中無物　徵衷



膨脹	爬虫類	府中	イ注意	部長
附着	符牒	補註	茶畑	懲罰
中部	駐兵	忠僕	徵發	徵兵

注意　例題中爬虫類は「ハ」に正体の「チュー」を用ゐて「ルキ」を接續し、府中、不注意の「チュー」は共に變体を、中部、駐兵、忠僕も亦變体の「チュー」を應用して連綴すれは宜しい。

例題

マチャ　マチュ　マチョ　ミチャ　ミチュ　ミチョ

ムチャ　ムチュ　ムチョ　ヤチャ　ヤチュ　ヤチョ

ユチャ　ユチュ　ユチョ　チャマ　チャミ　チャム

チュマ　チュミ　チュム　チョマ　チョミ　チョム

チャヤ　チュヤ　チョヤ　チュユ　チャユ　チョユ

連綴例並例題

茶飯　無茶苦茶　命中

茶店　誅滅　注目　註文　忠勇

中庸　朝命　朝野　貼用　夢中

銘茶　滅茶苦茶　夜中　優勅　晝夜

■注意　茶店は「茶飯」の例に倣つて綴合し、誅滅乃至中庸の「チュー」は正体を用ゐて連綴するのである、又滅茶苦茶は「チャ」を以て促綴の別法に依り「メ」に交叉するが如く將た併行するが如くにして其間に促音の存在する事を表示し「チャ」に對して「クチャ」を連接するのである、又夜中は「ヤ」の正体に「チュー」の正体を用ゐて綴合するのであります。

例題

チャラ　チャリ　チャレ　チュラ　チュリ　チュレ

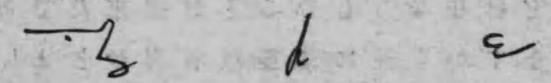
ラチャ　リチャ　レチャ　ラチュ　リチュ　レチュ

ラチョ　リチョ　レチョ　チョラ　チョリ　チョレ

ワチャ　ワチュ　ワチョ　チャワ　チュワ　チョワ

連連綴例並例題

御駐輦　調和　和衷



應令（ヤウレイ）　中老（チユウロウ）　誅戮（チユウリク）　中立（チユウリツ）　中烈（チユウレツ）

嘲弄（テウロウ）　蝶類（テフルイ）　靈長（レイチヤウ）　中禮服（チウレイフク）　顱頂骨（ロチヤウコツ）

■注意　中老乃至中烈の「チュー」は正体を用ゐ、顱頂骨は「ロ」に變体の「チョー」を連ねて「ヨ」及び「ッ」を接續し其他の「チョ」は總て正体を應用綴合するのであります。

第四 「ミ+」「ヒ=」「リ=」「リ=」と直音字

奈行拗音、波行拗音、末行拗音、良行拗音各文字中「ニ=」「ミ=」「ヒ=」「ヒ=」「リ=」「リ=」の六文字を除く各音字は其使用さる範圍極めて稀薄なるのみならず是等各文字は直音字を借用して少しの技工を加へたるに過ざないのでありまして、綴字の練習は直音字各行間の練習例題に依りて充分に運筆を自在ならしむることが出來たであらうと思ひますから茲には全然省畧致しまして「ニ=」「ミ=」「ヒ=」「ヒ=」「リ=」「リ=」のみに限り例題を組立て掲示する事と致しました。

例　題

ニ=イ　ニ=ト　ニ=ス　ミ=イ　ミ=カ　ミ=キ

ミ=ケ　ミ=ク　ミ=サ　ミ=シ　ミ=ス　ミ=タ

ミ=チ　ミ=ニ　ミ=ナ　ミ=ハ　ミ=ヒ　ミ=フ

ミ=マ　ミ=ミ　ユミ=　ヤミ=　レミ=　ラミ=

ミ=レ　ミ=リ　リ=ウ　リ=イ　リ=コ　リ=ク

リ=シ　リ=サ　リ=ス　リ=ト　リ=チ　リ=フ

リ=ホ　リ=ヒ　リ=マ　リ=ミ　リ=ヤ　リ=ユ

リ=ラ　リ=レ　リ=ワ　ヒ=イ　ヒ=ア　ニ=ソ

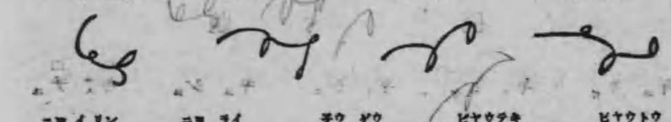
ニ=コ　ニ=ホ　ニ=ツ　ニ=ラ　ヒ=カ　ニ=テ

ヒ=キ　ヒ=ク　ヒ=シ　ヒ=サ　ヒ=ス　ヒ=ニ

ヒ=レ　ヒ=ハ　ヒ=ヒ　ヒ=ム　ヒ=ラ　ヒ=リ

連綴例並例題

不如意　明日　妙藥　氣力



如意輪　如來　尿道　病的　平等

評判　氷解　氷山　表紙　表札

漂着　表白　豹變　標本　標目

明年　名目　妙法　妙齡　明攀

極力　兩議院　良心　兩端　良策

注意 評判は基礎文字を以て連綴し、氷山、表紙、表札は佐行正体文字を用ゐ、漂着、表白は共に變格縮字を應用し、標本は「ヒ=」に對して波行第五段の縮字即ち「ホ」を縮綴して其尾端を撥ね、兩端は「タ」の正体を用ゐて其尾端を撥ぬるのであつて良策は「サ」の變体を用ゐて「ク」を連綴するのであります。